

# 主要地方道成田松尾線IX

——芝山町大台西藤ヶ作遺跡・深田台遺跡・洞谷台遺跡・大堀切遺跡——

平成11年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

# 主要地方道成田松尾線IX

— 芝山町大台西藤ヶ作遺跡・深田台遺跡・洞谷台遺跡・大堀切遺跡 —



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第372集として、千葉県土木部の主要地方道成田松尾線道路改良事業（芝山地区）に伴って実施した芝山町洞谷台遺跡ほか3遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中近世掘立柱建物群を初め、古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術的資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係諸機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 中村好成

## 凡 例

- 1 本書は主要地方道成田松尾線道路改良事業（芝山地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

大台西藤ヶ作遺跡	山武郡芝山町高田字窪田394ほか（遺跡コード409-022）
深田台遺跡	山武郡芝山町朝倉字入谷277-1ほか（遺跡コード409-031）
洞谷台遺跡	山武郡芝山町朝倉字洞谷台23-1ほか（遺跡コード409-028）
大堀切遺跡	山武郡芝山町岩山字出崎1,646-5ほか（遺跡コード409-016）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、室長 香取正彦が第1・2章、第3章第1節・第2節2、第4章第1節・第2節2・3（貝類を除く）、第5章第1節・第2節2を、主任技師 安井健一が、第3章第2節1、第4章第2節1・3（2）貝類、第5章第2節1を担当し、第6章は2名が共同で担当した。
- 6 洞谷台遺跡出土の陶磁器類の分類については、日本考古学協会員 鈴木裕子氏の御指導、御協力を得た。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県成田土木事務所、芝山町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図	国土地理院発行 1/25,000地形図「多古」(N1-54-19-10-2)
第2・4・14・92図	芝山町発行 1/2,500都市計画図
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成5年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 掲図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。



遺物…赤彩



遺構…カマド



遺構…焼土

遺物…スス

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の経過.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	2
第2章 大台西藤ヶ作遺跡.....	4
第1節 調査の概要.....	4
第2節 遺構と遺物.....	4
第3章 深田台遺跡.....	7
第1節 調査の概要.....	7
第2節 遺構と遺物.....	7
1 縄文・弥生時代.....	7
2 奈良・平安時代.....	10
第4章 洞谷台遺跡.....	20
第1節 調査の概要.....	20
第2節 遺構と遺物.....	26
1 縄文時代.....	26
2 古墳時代.....	27
3 中近世.....	39
(1) 遺構 .....	39
(2) 遺物 .....	55
第5章 大堀切遺跡.....	83
第1節 調査の概要.....	83
第2節 遺構と遺物.....	83
1 縄文時代.....	83
2 その他.....	86
(1) 遺構 .....	86
(2) 遺物 .....	88
第6章 まとめ.....	90
報告書抄録.....	卷末

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第31図 1区5号掘立柱建物跡及び1号地下式坑実測図	42
第2図 大台西藤ヶ作遺跡周辺地形図	5	第32図 2区中近世遺構配置図	45
第3図 全体図及びグリッド配置図	6	第33図 2区1号掘立柱建物跡及び土坑031・032実測図	47
第4図 深田台遺跡周辺地形図	8	第34図 2区1号地下式坑実測図	48
第5図 全体図及びグリッド配置図	9	第35図 3区中近世遺構配置図	51
第6図 繩文・弥生時代遺物実測図	10	第36図 3区1号掘立柱建物跡及び土坑053・055実測図	52
第7図 001号住居跡実測図及び出土遺物実測図	11	第37図 中近世遺構出土遺物実測図(1) (カワラケ)	56
第8図 002号住居跡実測図及び出土遺物実測図	13	第38図 中近世遺構出土遺物実測図(2) (土鍋・熔炉)	57
第9図 003号住居跡実測図	14	第39図 中近世遺構出土遺物実測図(3) (火鉢類)	58
第10図 004号住居跡及びカマド実測図	15	第40図 中近世遺構出土遺物実測図(4)(陶器)	59
第11図 004号住居跡出土遺物実測図(1)	16	第41図 中近世遺構出土遺物実測図(5)(陶器)	60
第12図 004号住居跡出土遺物実測図(2)	18	第42図 中近世遺構出土遺物実測図(6)(陶器)	61
第13図 住居跡外出土遺物実測図	19	第43図 中近世遺構出土遺物実測図(7)(陶器)	62
第14図 洞谷台遺跡周辺地形図	21	第44図 中近世遺構出土遺物実測図(8)(磁器)	63
第15図 全体図及びグリッド配置図	22	第45図 中近世遺構出土遺物実測図(9)	68
第16図 繩文時代遺物実測図(1)	23	第46図 中近世遺構出土遺物実測図(10) (銅製品)	69
第17図 繩文時代遺物実測図(2)	24	第47図 中近世遺構出土遺物実測図(11)(砥石)	70
第18図 繩文時代遺物実測図(3)	25	第48図 中近世遺構出土遺物実測図(12)(砥石)	71
第19図 004号住居跡及びカマド実測図	27		
第20図 004号住居跡出土遺物実測図	28		
第21図 005号住居跡及びカマド実測図	30		
第22図 005号住居跡遺物接合図	31		
第23図 005号住居跡出土遺物実測図(1)	32		
第24図 005号住居跡出土遺物実測図(2)	33		
第25図 008号住居跡及びカマド実測図	35		
第26図 008号住居跡出土遺物実測図	36		
第27図 013号住居跡実測図及び出土遺物実測図	37		
第28図 住居跡外出土遺物実測図	38		
第29図 1区中近世遺構配置図	40		
第30図 1区1・2号掘立柱建物跡実測図	41		

第49図 中近世遺構出土遺物実測図（13）（砥石）	78
.....	72
第55図 中近世遺構出土遺物実測図（19）（古錢）	79
第50図 中近世遺構出土遺物実測図（14）（砥石）	79
.....	73
第56図 中近世遺構出土遺物実測図（20）（古錢）	81
第51図 中近世遺構出土遺物実測図（15）（砥石）	81
.....	74
第57図 タニシ盤長分布図	82
第52図 中近世遺構出土遺物実測図（16）（砥石）	84
.....	75
第58図 大堀切遺跡周辺地形図	84
第59図 全体図及びグリッド配置図	85
第53図 中近世遺構出土遺物実測図（17）	86
（石塔類・板碑）	76
第60図 繩文時代遺物実測図	86
第54図 中近世遺構出土遺物実測図（18）（古錢）	88
.....	76
第61図 1号土坑及び1号炭窯跡実測図	87
第62図 中近世出土遺物実測図	88

## 表 目 次

深田台遺跡	第12表 中近世遺構出土遺物表（3）
第1表 001号住居跡出土遺物表	12 (陶磁器) ..... 65
第2表 002号住居跡出土遺物表	13 第13表 中近世遺構出土遺物表（4）
第3表 004号住居跡出土遺物表	17 (鉄製品) ..... 68
洞谷台遺跡	第14表 中近世遺構出土遺物表（5）
第4表 出土石器属性表	26 (銅製品) ..... 68
第5表 004号住居跡出土遺物表	28 第15表 中近世遺構出土遺物表（6）
第6表 005号住居跡出土遺物表	34 (砥石・石塔類・板碑) ..... 77
第7表 008号住居跡出土遺物表	36 第16表 中近世遺構出土遺物表（7）（古錢） 80
第8表 013号住居跡出土遺物表	37 大堀切遺跡
第9表 住居跡外出土遺物表	38 第17表 出土遺物表 ..... 89
第10表 中近世遺構出土遺物表（1）（カワラケ）	まとめ
.....	55 第18表 洞谷台遺跡出土中近世土器・陶磁器集計表 ..... 93
第11表 中近世遺構出土遺物表（2）	
（土鍋・焙烙・火鉢類）	58

## 図版目次

- 図版1 航空写真（1）  
図版2 航空写真（2）  
　　大台西藤ヶ作遺跡  
図版3 調査区近景　調査区近景　調査区近景  
　　調査区近景　確認グリッド　確認風景  
　　深田台遺跡  
図版4 調査区近景（北から）  
　　調査前状況（北から）  
　　縄文時代遺物  
図版5 上 001号住居跡土層断面  
　　右 001号住居跡（南西から）  
　　002号住居跡全景（南西から）  
　　002号住居跡炭化材出土状況（南西から）  
図版6 003号住居跡全景（南西から）  
　　004号住居跡全景（南西から）  
　　004号住居跡遺物出土状況（南西から）  
　　004号住居跡遺物出土状況  
　　004号住居跡カマド検出状況  
　　004号住居跡カマド  
図版7 深田台遺跡遺物（1）  
図版8 深田台遺跡遺物（1）  
　　洞谷台遺跡  
図版9 縄文時代遺物（1）  
図版10 縄文時代遺物（2）  
図版11 縄文時代遺物（3）  
図版12 004号住居跡全景（南から）  
　　005号住居跡全景（北東から）  
　　008号住居跡全景（南西から）  
図版13 洞谷台遺跡遺物（1）  
図版14 洞谷台遺跡遺物（2）  
図版15 調査区全景（北から） 1区全景（北から）  
　　1区全景（南から）  
　　1区1号地下式坑（東から）  
　　1区1号溝状遺構（南東から）  
　　2区全景（南から） 2区全景（北から）  
　　2区全景（南東から）  
　　2区1号地下式坑（東から）  
　　2区1号地下式坑入口部分  
　　2区2号地下式坑（東から）  
　　2区4・5号掘立柱建物跡、2区1号竪穴  
　　状遺構（北西から）  
　　3区全景（北西から）  
　　3区土壙内全景（北西から）  
　　3区1・2号土壙（西から）  
　　3区南部全景（西から）  
　　2区中央部全景（西から）  
　　3区北部全景（北西から）  
　　図版21 中近世遺構出土遺物（1）  
　　図版22 中近世遺構出土遺物（2）  
　　図版23 中近世遺構出土遺物（3）  
　　図版24 中近世遺構出土遺物（4）  
　　図版25 中近世遺構出土遺物（5）  
　　図版26 中近世遺構出土遺物（6）  
　　図版27 中近世遺構出土遺物（7）  
　　図版28 中近世遺構出土遺物（8）  
　　図版29 中近世遺構出土遺物（9）  
　　図版30 中近世遺構出土遺物（10）  
　　図版31 中近世遺構出土遺物（11）  
　　大堀切遺跡  
　　図版32 調査区近景 001号土坑 001号土坑土層  
　　002号土坑 002号土坑断面  
　　図版33 出土遺物

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経過

主要地方道成田松尾線は芝山町大里と松尾町五反田を結ぶ県道である。現在、空港、国道296号線（バイパス）間及び、芝山町大台から松尾町五反田間が開通している。

また、道路が通る地域は埋蔵文化財が豊富に所在する地域であり、財団法人千葉県文化財センターでは昭和53年度から、千葉県土木部の委託を受け、路線内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、報告書を刊行している<sup>1)</sup>。

本書で報告する遺跡は、南から芝山町大台西藤ヶ作遺跡、深田台遺跡、洞谷台遺跡、大堀切遺跡の4遺跡である。各年度ごとの調査の経過及び担当は次のとおりである。

昭和62年度

発掘調査 大台西藤ヶ作遺跡

調査部長 堀部昭夫 部長補佐 岡川宏道 古内 茂  
班 長 矢戸三男 調査研究員 新田浩三

平成3年度

発掘調査 大堀切遺跡

調査部長 天野 努 部長補佐 阪田正一 佐久間 豊  
班 長 宮 重行 技 師 半澤幹雄

平成4年度

発掘調査 洞谷台遺跡

調査部長 天野 努 部長補佐 佐久間 豊 深澤克友  
班 長 三浦和信 技 師 渡邊高弘

平成8年度

発掘調査 深田台遺跡

調査部長 西山太郎 調査課長 古内 茂  
東部調査事務所長 石田廣美 主任技師 荒木清一

平成10年度

整理作業 大台西藤ヶ作遺跡 深田台遺跡 洞谷台遺跡 大堀切遺跡

水洗・注記から原稿執筆、報告書刊行まで

調査部長 沼澤 豊 調査課長 上野純司

## 第2節 遺跡の位置と環境（第1図）

千葉県の大部分を占める房総半島は、ほぼ中央（木更津と茂原を結ぶ線）で地形が二分される。北半分は、下総台地と東京湾岸、九十九里海岸及び利根川流域の低地、南半分は、上総丘陵、懶岡山塊などから構成される安房丘陵などの山地的な地形である。

本書の4遺跡が所在する山武郡芝町は、千葉県の北東部に位置し、地形的には下総台地の南東部になる。下総台地は標高15m～80mの平坦な台地であるが、利根川、東京湾及び太平洋に注ぐ大小河川により侵食を受け、樹枝状の複雑な地形を呈している。下総台地南東部では九十九里海岸に注ぐ、木戸川、栗山川及びその支流に侵食を受け、南東方向へ、河川に沿って台地が並んでいる。各台地からは河川に向かって細長く樹枝状に舌状台地が伸びている。これらの台地上の平坦部には、ほとんど全域に遺跡が確認されている。

本書の4遺跡もこれらの舌状台地上に位置している。

注1 以下8冊の報告書が刊行されている。

萬崎博昭ほか 昭和58年 「主要地方道成田松尾線I 小池麻生遺跡 小池向台遺跡」 勅 千葉県文化財センター

高橋賢一ほか 昭和60年 「主要地方道成田松尾線II 小池新林遺跡 小池地蔵遺跡」 勅 千葉県文化財センター

萬崎博昭ほか 昭和61年 「主要地方道成田松尾線III 鯉ヶ窪遺跡 中台柿谷遺跡 遠山天ノ作遺跡」 勅 千葉県文化財センター

伊藤智樹ほか 昭和61年 「主要地方道成田松尾線IV 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡」 勅 千葉県文化財センター

宮 重行ほか 昭和62年 「主要地方道成田松尾線V 中台貝塚・松尾東雲遺跡・八田太田台遺跡」 勅 千葉県文化財センター

渡邊高弘ほか 平成3年 「主要地方道成田松尾線VI 芝町小池地蔵II遺跡 宮門遺跡」 勅 千葉県文化財センター

渡邊高弘ほか 平成4年 「主要地方道成田松尾線VII 芝町御田台 小池新林遺跡」 勅 千葉県文化財センター

石塚 浩 平成10年 「主要地方道成田松尾線VIII 松尾町名城遺跡」 勅 千葉県文化財センター

2 千葉県教育委員会 平成10年 「千葉県埋蔵文化財分布地図（2）－香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）－」



1:25,000 多古

第1図 遺跡位置図

## 第2章 大台西藤ヶ作遺跡

### 第1節 調査の概要

大台西藤ヶ作遺跡は、山武郡芝山町高田字窓田394ほかに所在し、木戸川の支谷によって開析された舌状台地上に位置する。隣接した遺跡の調査例として、大台西遺跡<sup>1)</sup>、高田権現遺跡<sup>2)</sup>がある。

大台西遺跡は東隣の遺跡で、成田用水の水路建設に伴い発掘調査が行われている。古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡などが検出されているが、大台西藤ヶ作遺跡の調査区に近接した地区では、鍛冶溝、羽口などを伴う土坑敷基が検出されている。

高田権現遺跡は浅い谷を挟んだ西隣の台地上の遺跡で、成田用水加圧機場の建設に伴い発掘調査が行われている。古墳時代後期及び奈良・平安時代の竪穴住居跡、円墳の周溝、近世の塚が検出されている。

今回の発掘調査は道路建設に伴う調査で、遺跡内を南北に長い帯状に調査している。調査区は舌状台地西端部の緩やかな斜面に位置している。対象面積は4,000m<sup>2</sup>で、調査を始めるに当たり、調査区を全体を含むように公共座標に合わせて、20m×20mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を4m×4mに分割し、25個の小グリッドとした。大グリッドは西から東へA、B、C…、北から南へ1、2、3、…と記号を付け、小グリッドについては北西隅を起点に00～04～44と番号を付け、これらを組み合わせて呼称している。

調査は昭和62年8月1日から同年8月31日まで実施した。グリッド及び調査区の長辺に合わせて確認グリッドを設定し調査を開始した。調査は上層確認調査、上層本調査、下層確認調査、下層本調査の順に行う予定であったが、上層確認調査終了時に遺構が認められず、また、下層についても、斜面のため旧石器時代の文化層を含む土層が検出されなかったので、400m<sup>2</sup>の上層確認調査で、発掘調査を終了した。

### 第2節 遺構と遺物

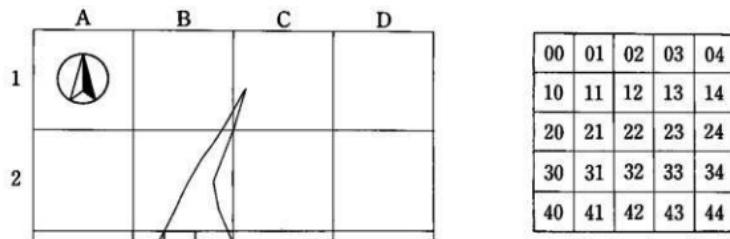
遺構は検出されなかった。遺物も縄文土器または土師器と考えられる土器の細片を少量出土しただけであった。

注1 平岡和夫 1979 「成田用水」 高田権現遺跡他調査会

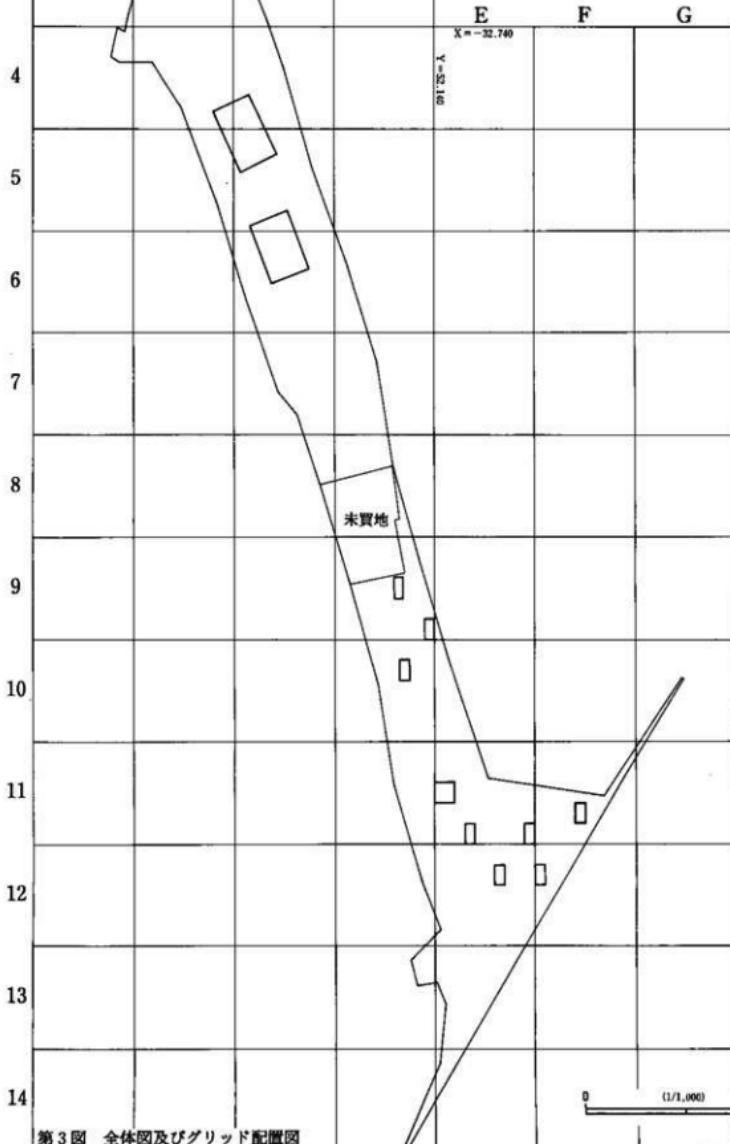
2 平岡和夫 1979 「成田用水」 高田権現遺跡他調査会



第2図 大台西藤ヶ作遺跡周辺地形図



小グリッド分割図 0 (1/500) 10m



第3図 全体図及びグリッド配置図

## 第3章 深田台遺跡

### 第1節 調査の概要

深田台遺跡は、山武郡芝山町朝倉字入谷277-1ほかに所在し、栗山川の支流の高谷川の支谷によって開析された舌状台地上に位置する。隣接した遺跡の調査例として、沖ノ台Ⅰ遺跡<sup>1)</sup>、沖ノ台Ⅱ遺跡<sup>2)</sup>がある。

沖ノ台Ⅰ遺跡は、小支谷を挟んだ北隣の舌状台地上に位置する。これも主要地方道成田松尾線の建設に伴う発掘調査である。古墳時代後期の竪穴住居跡などが検出され、古鐵冶跡が検出されている。また、調査区外の南側山林中には精錬炉跡の存在が確認されている。

沖ノ台Ⅱ遺跡は沖ノ台Ⅰ遺跡の斜面部及び深田台遺跡との間の小支谷内で、これも主要地方道成田松尾線の建設に伴う発掘調査である。沖ノ台Ⅰ遺跡の製鐵遺構に関連した遺跡で、炭窯跡、作業場遺構が検出されている。また、遺物として製鉄の際に破壊された精錬炉の破片及び鉄滓が多量に出土している。

今回の発掘調査は道路建設に伴う調査で、調査区は、遺跡の西端部、舌状台地の斜面際に位置している。対象面積は300m<sup>2</sup>で、調査を始めるに当たり、調査区を全体を含むように公共座標に合わせて、20m×20mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を2m×2mに分割し、100個の小グリッドとした。大グリッドは西から東へA、B、C…、北から南へ1、2、3、…と記号を付け、小グリッドについては北西隅を起点に00～99と番号を付け、これらを組み合わせて呼称している。

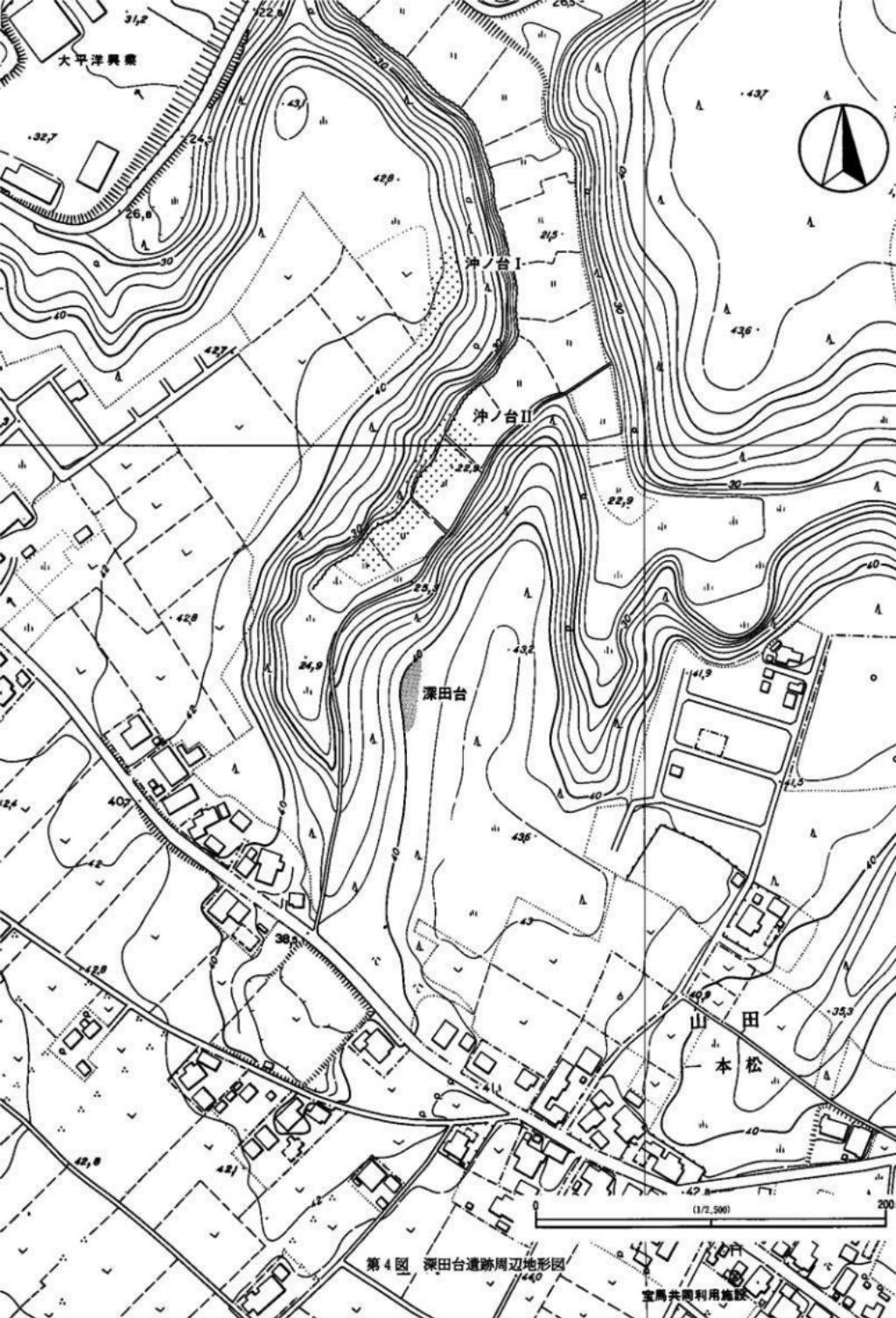
調査は平成8年5月23日から同年6月14日まで実施した。調査は、上層確認・本調査、下層確認調査、下層本調査の順に行う予定であった。しかし、下層確認調査で、確認グリッドを2か所に設定し、6m<sup>2</sup>の確認調査を実施したが、遺物は出土せず、下層本調査は行わなかった。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1 繩文・弥生時代

##### 繩文、弥生土器（第6図 図版4）

出土した繩文土器は少なく、いずれも表面採集もしくは表土中の出土である。1～5は早期後半の条痕文土器である。1～3は植物纖維の含有量が少なく、器表面は内面・外面ともケズリ状の擦痕が観察される。4、5は植物纖維を多量に含むもので、5は外面に貝殻条痕が施される。6、7は前期黒浜式土器である。6は植物纖維を多量に含むもので、先のとがった棒状工具で沈線が施される。7は撚糸文である。8～23は前期浮島式、興津式で、当遺跡出土の繩文土器では最大多数を占める。8は口縁部で、変形爪形文が施される。9、10は波状貝殻文が施されるもの。11～14は外面に輪積み痕を残し、水平になるように瘤状の凹凸文を巡らせるもの。いずれも胎土は砂粒を多量に含み、淡橙色に発色する。15～17、22は棒状工具による縱方向の沈線が施されるもの。これらのうちいくつかは、先の凹凸文の土器と同一個体になるとみられる。18、19は口縁部に条線文が施されるもの。20は平行沈線が施されるもので、胴部下半とみられる。21は、磨消貝殻文のもの。23は無文の深鉢底部で、胎土や焼成からこの時期に属すると考えた。24、25は中期初頭の下小野式に属すると考えられる土器である。24は口縁部で、繩文原体を水平に圧痕する。25は結束繩文を横方向に施す。26、27は後期加曾利B式である。26はキザミを持つ隆起線を水平に貼



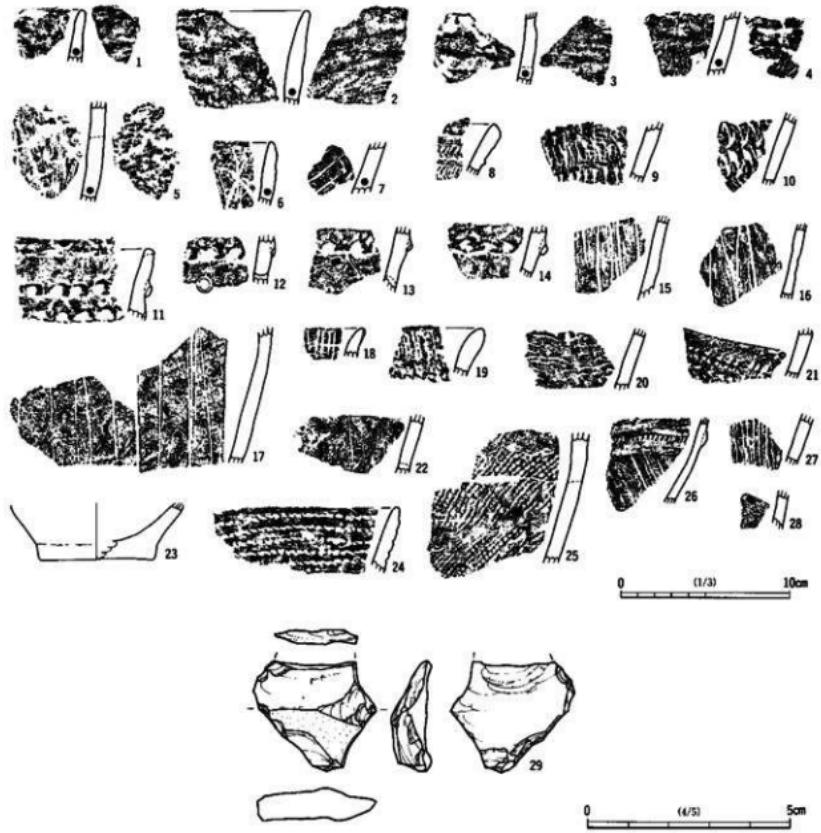
第4図 深田台遺跡周辺地形図

宝馬共同利用施設



00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

第5図 全体図及びグリッド配置図



第6図 繩文・弥生時代遺物実測図

り付け、その下側に条線を施す。28は細い櫛歯状の沈線が施されるもので、弥生土器と考えられる。

#### 石器（第6図）

調査区より二次加工のある剝片が1点出土している。29は最大長26.3mm、最大幅30.0mm、最大厚9.5mm、重量6.0gである。石材は乳褐色を呈する珪質頁岩で、打面側は折れている。右側縁から先端部にかけて二次加工が施される。

## 2 奈良・平安時代

竪穴住居跡が4軒検出されたが、住居跡全体が調査できたのは1軒のみであった。

### 001号住居跡（第7図 第1表 図版5・7）

調査区南端部に検出された。全体の4/5が調査区外であり、カマドも調査区外にあると考えられる。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約3mと考えられる。西壁中央が攢乱を受けている。北を中心とした住居跡の方向はN-15°-Eである。検出面からの深さは0.15mで、床面は全体に平坦である。柱穴、壁周溝は検出されなかった。西壁下の床面にピットが1基検出されている。梢円形で0.5m×0.25m、床面からの深さは0.2mである。覆土の状況から住居跡に付属するものと考えられている。

出土遺物は土師器、須恵器である。1・2は土師器の甕である。1はほぼ球形の胴部から口縁部がほぼ直立し、上端部で外反する。口縁部端は丸い。2は口縁部が外反し、口縁部端は受け口状になる。3～7は土師器の壺である。3はクロロ未使用の壺で、口縁部にススが付着しているので、灯明具として使用されたと考えられる。4～7はクロロ成形である。6は底部内面の一点叉線で囲まれた部分がなめらかに摩耗しているので、硯として使用されたと考えられる。8は須恵器の甕の胴部片である。格子目の叩き目が特徴である。

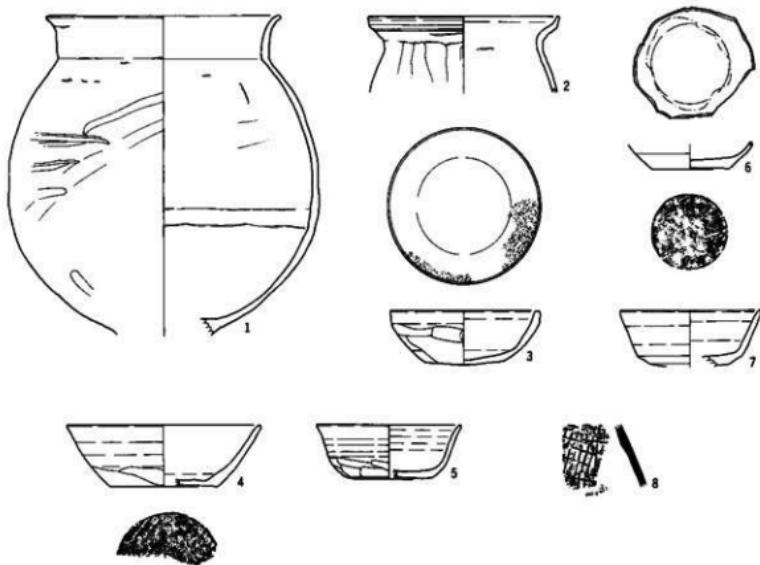
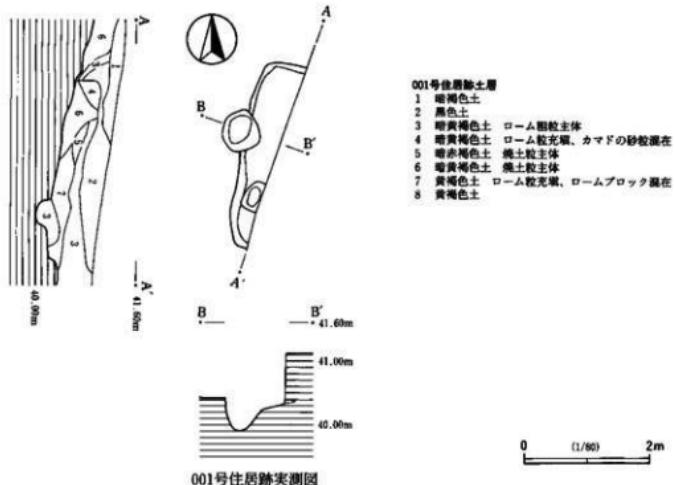
### 002号住居跡（第8図 第2表 図版5・7）

調査区南端部、001号住居跡の北隣に検出された。全体の1/2が調査区外であり、カマドも調査区外にあると考えられる。北を中心とした住居跡の方向はN-16°-Wである。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約4.2mと考えられる。検出面からの深さは0.4mである。床面は全体に平坦で、一点叉線内は特に堅緻である。柱穴は1基検出されている。円形で径0.25m、床面からの深さは0.55mである。壁周溝は西壁下中央から北壁下に検出された。幅0.15m、床面からの深さは0.05mである。床面にピットが1基検出されている。梢円形で、0.6m×0.38m、床面からの深さは0.15mである。

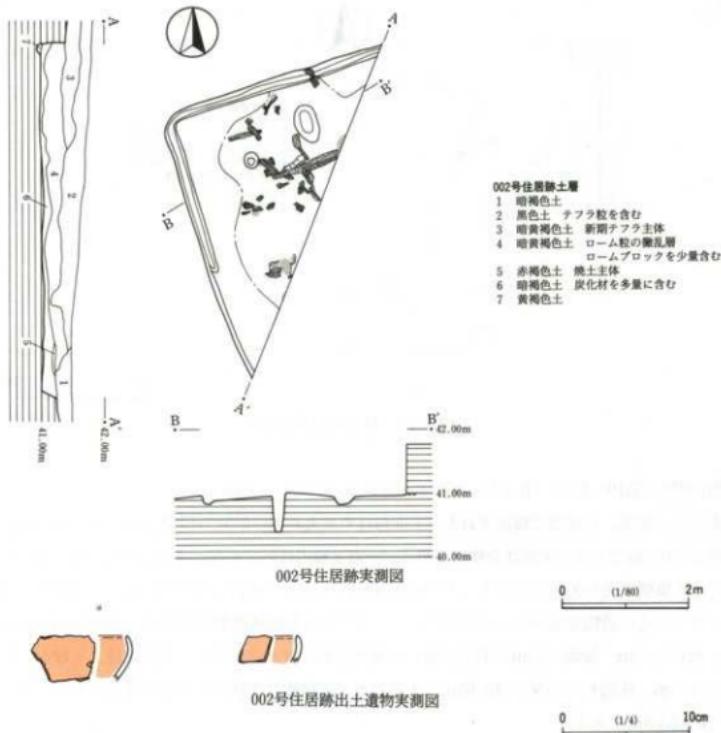
また、床面中央部を中心に炭化材が多く出土している。住居跡全体の調査ができなかったので、焼失か廃棄後の焼却かは不明である。

第1表 001号住居跡出土遺物表

博覧番号	種類・器種	法寸（cm）	保存度	成形・施釉等の特徴		胎土	焼成	色調
1	土師器 甕	口径 18.6	25%	口縁部ヨコナデ 胴部外表面ヘラケズリの後ナデ、ケズリ痕は不明瞭 胴部内面ナナデ、中位に接合痕	砂粒や多 良好	淡褐色 内面黒色		
		底径 16.7	底部欠					
		高さ 24.7						
2	土師器 甕	口径 15.4	10%	口縁部ヨコナデ 胴部外表面ヘラケズリ 胴部内面ナナデ	細砂粒・赤色 粒少	良好	明褐色	
		底径 12.8	口縁部～ 肩部					
		高さ 4.3						
3	土師器 外	口径 12.1	100%	口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナナデ 底部外表面ヘラケズリ	砂粒や多 良好	明褐色		
		底径 6.2						
		高さ 4.3						
4	土師器 壺	口径 15.5	25%	体部外表面ヘラケズリ 底部外表面回転糸切りの後に周辺部ヘラケズリ 右回転クロコ成形	砂粒少 良好	褐色		
		底径 8.6	底部中央					
		高さ 4.8	欠					
5	土師器 壺	口径 11.6	30%	体部外表面ヘラケズリ 底部外表面回転糸切りの後に周辺部回転ヘラケズリ 右回転クロコ成形	細砂粒や多 良好	淡褐色 一部暗褐色		
		底径 7.0	底部中央					
		高さ 4.2	欠					
6	土師器 壺	口径 一	40%	体部外表面回転ヘラケズリ 底部外表面回転ヘラケズリ 右回転クロコ成形 内面が磨耗し、施が付着、転用窯と考えられる	細砂粒・赤色 粒微量	良好	明褐色	
		底径 6.2	底部～					
		高さ 一	底部					
7	土師器 外	口径 11.4	25%	体部外表面回転ヘラケズリ 底部外表面回転ヘラケズリ 右回転クロコ成形	細砂粒少 良好	明褐色		
		底径 6.4	底部中央					
		高さ 4.2	欠					
8	須恵器 甕	口径 一	脱部片	外面部格子目の叩き目 内面ナナ	細砂粒や多 良好	褐色		
		底径 一						
		高さ 一						



第7図 001号住居跡実測図及び出土遺物実測図



第8図 002号住居跡実測図及び出土物実測図

第2表 002号住居跡出土物表

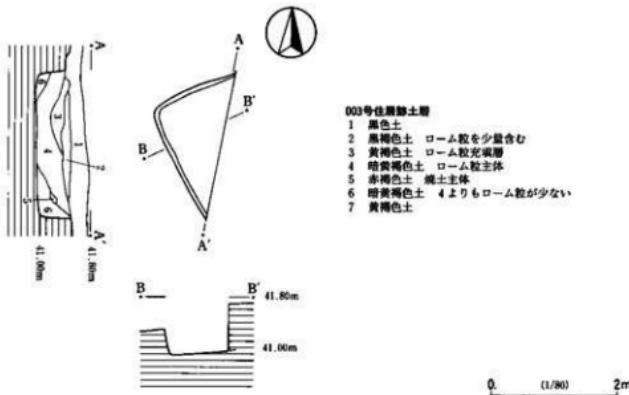
検出番号	種類・割れ	法量(cm)	遺存状	成形・断面等の特徴	胎土	焼成	色調
1	土師器 环	—	口縁部片	外表面ラクスリの後ナデ ケズリ痕は不明瞭	細砂粒少	良好	暗褐色
	底径 器高	—	—	内面ナデ 内外面に赤彩			
2	土師器 环	—	口縁部片	外表面ヨコナデ	細砂粒少	良好	暗褐色
	底径 器高	—	—	内面ナデ 内外面に赤彩			

出土遺物は土師器である。土器の出土量は少ない。1・2は土師器の環である。ロクロ未使用で、口縁部は内湾し、外面に赤彩が施される。鉄鉢形になる可能性がある。

#### 003号住居跡（第9図 図版6）

調査区中央部に検出された。全体の2/3が調査区外であり、カマドも調査区外にあると考えられる。北を中心とした住居の方向はN-36°-Wである。平面形は隅丸方形で、規模は一辺が約2mと考えられる。検出面からの深さは0.45mで、床面は全体に平坦である。柱穴、壁周溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器細片がごく少量出土している。住居の規模、形状から奈良・平安時代と推定した。



第9図 003号住居跡実測図

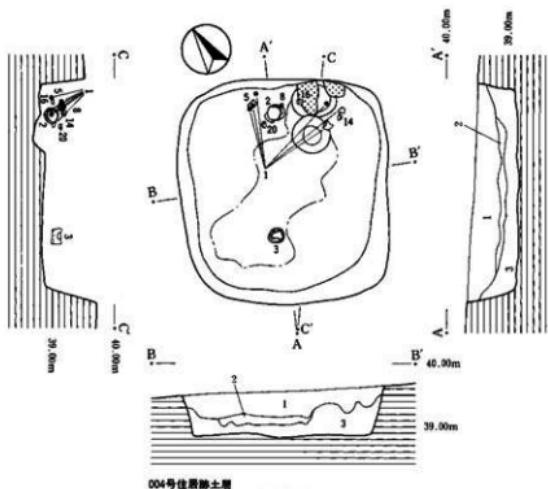
#### 004号住居跡（第10～12図 第3表 図版6～8）

調査区北南端部、斜面際に検出された。平面形はやや丸みある隅丸方形で、規模は一片3.5m、検出面からの深さは0.8mである。床面は全体に平坦で、一点叉線内は特に堅緻である。柱穴、壁周溝は検出されなかった。北東壁中央や矢右寄りにカマドが検出された。カマドを中心とした主軸の方向はN-34°-Eである。カマド周辺に遺物が集中して出土している。カマドは右側袖前半分を欠く。規模は、長さ0.6m、幅0.75m、袖長0.55m、袖幅0.35mである。壁への掘り込みはほとんどない。火床は浅くくぼむ。梢円形で、0.7m×0.6m、床面からの深さは0.05mである。カマド前面に皿状のピットが検出された。円形で、径0.6m、深さ0.08mである。

出土遺物は土師器、須恵器である。1～6は土師器の壺である。1はやや長胴である。口縁部は外反し、口縁部端は受け口状になる。2・3は半球形の胴部で、口径が底径、器高に比べて、大きい。5は小型壺である。ほぼ球形の胴部である。6は球形の胴部になると考えられる。7～26は土師器の壺である。7～10はロクロ未使用の壺である。7は口縁部が内湾し、外面に赤彩が施される。鉄鉢形になると考えられる。8～10は口縁部にスヌが付着しているので、灯明具として使用されたと考えられる。11～26はロクロ成形である。口縁部上端がわずかに外反する。17・19・23は口縁部にスヌが付着しているので、灯明具として使用されたと考えられる。13・14・19・20・23・24・25・26は墨書が施されている。文字は「井」、「寺」、「万」、「南」、「辻？」などである。中でも、「井」は4点で、最も多い。また、20の「井」は、墨書の後に重ねて線刻の「井」が施されている。27は須恵器の壺の胴部片である。平行叩き目が施されている。内面全体がなめらかに摩耗しているので、硯として使用されたと考えられる。

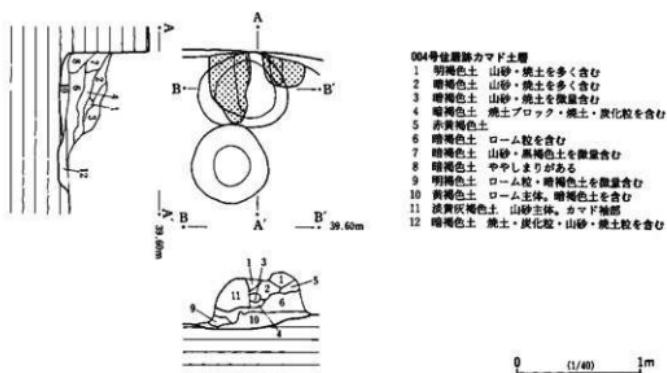
#### 住居外出土遺物（第13図 図版8）

1は土師器の台付壺の台部である。台径11.8cmである。ヘラケズリの後にナデが施される。色調は淡明褐色で、胎土は細砂粒を少量含む。住居跡と同時期の土器である。



004号住居跡実測図

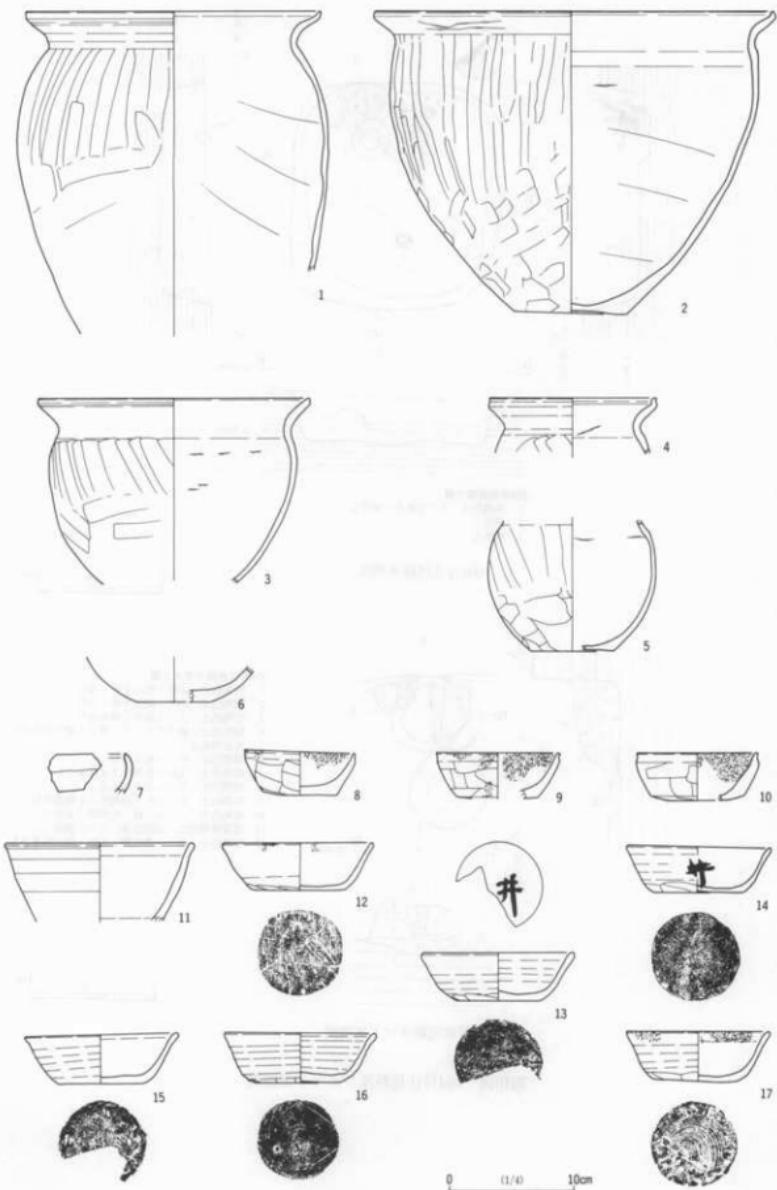
0 (1/80) 2m



004号住居跡カマド実測図

0 (1/40) 1m

第10図 004号住居跡及びカマド実測図

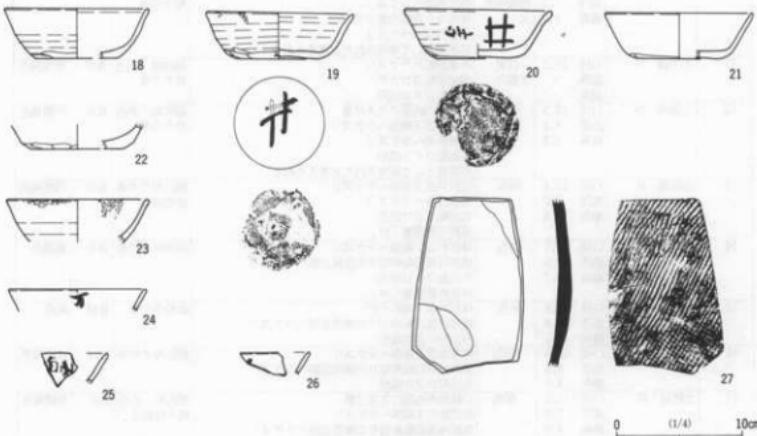


第11图 004号住居跡出土遺物実測図(1)

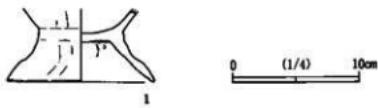
第3表 004号住居跡出土遺物表

件目番号	器類・部品	直径 (cm)	裏厚度	形状・開閉等の特徴		地土	地成	色相
				口径	底			
1	土師器 蓋	口径 23.6 底径 19.8 器高 25.0	40% 底部欠	口縁部ヨコナデ 開閉外面上半部横位へラケズリ、下半部へラケズリ の後ナデ、ケズリ痕不明瞭 開閉内面ナゲ		細砂粒多	良好	明褐色
2	土師器 蓋	口径 32.2 底径 29.0 脚径 29.3 底径 9.0 器高 29.3	70%	口縁部ヨコナデ、接合痕 開閉外面上半部横位へラケズリの後ナデ、下半部斜 位へラケズリの後ナデ 開閉内面ナゲ、接合痕		細砂粒多 赤色粒少	良好	明茶褐色 一部黒斑
3	土師器 蓋	口径 21.8 底径 18.5 脚径 19.9	80% 底部欠	口縁部ヨコナデ 開閉外面上半部横位へラケズリの後ナデ、下半部横 位へラケズリの後ナデ 開閉内面ナゲ、接合痕		細砂粒多	良好	明灰褐色
4	土師器 蓋	口径 13.4 底径 10.9	10%以下	口縫部～ 開閉部～	口縫部ヨコナデ、内面接合痕 開閉外面上半部横位へラケズリ		細砂粒多	暗赤褐色
5	土師器 小型蓋	口径 13.5 底径 6.6 器高 4.2	25% 口縫部	25% 開閉部	開閉外面上半部横位へラケズリ、下半部横位へラケ ズリ 開閉内面ナゲ、接合痕 底部外表面へラケズリ		細砂粒や多 黑色	褐色一部 黒色 まだら状
6	土師器 环	口径 一 底径 6.0 器高 一	25%	体部～ 底部～ 内外面赤影	体部外表面へラケズリの後ナデ、ケズリ痕不明瞭 体部内面ナゲ 底部外表面へラケズリ		細砂粒多	良好 赤褐色
7	土師器 环	口径部	ヨコナデ 内外面赤影			細砂粒少	良好	暗褐色
8	土師器 环	口径 9.0 底径 6.5 器高 3.5	50%	口縫部ヨコナデ、内外面にスス付着 体部外表面へラケズリ 体部から底部内面ナデ 底部外表面へラケズリ 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒や多 黑色	良好	暗赤褐色
9	土師器 环	口径 10.0 底径 6.6 器高 3.6	20% 底部中央 欠	口縫部ヨコナデ、内外面にスス付着 体部外表面へラケズリ 体部から底部内面ナデ 底部外表面へラケズリ 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒・赤色 粒や多	良好	淡明褐色
10	土師器 环	口径 9.9 底径 7.5 器高 3.7	25% 底部中央 欠	口縫部ヨコナデ、内外面にスス付着 体部外表面へラケズリ 体部から底部内面ナデ 底部外表面へラケズリ 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒・赤色 粒や多	良好	淡明褐色
11	土師器 环	口径 15.2 底径 一 器高 一	15% 底部欠	外面部回転ヘラケズリ 内面部回転ヨコナデ 右回転ロクロ成形		細砂粒・赤色 粒や多	良好	明暗褐色
12	土師器 环	口径 12.3 底径 7.4 器高 3.9	90%	口縫部内外面にスス付着 体部外表面下端部へラケズリ 底部外表面へラケズリ 右回転ロクロ成形		細砂粒・赤色 粒や多	良好	明暗褐色
13	土師器 环	口径 12.4 底径 7.0 器高 3.8	55%	体部外表面下端部へラケズリ 底部外表面へラケズリ 右回転ロクロ成形 底部内面巻着「井」		細砂粒や多 赤色粒少	良好	明暗褐色
14	土師器 环	口径 11.7 底径 7.0 器高 3.7	90%	体部外表面下端部へラケズリ 底部外表面軸孔外切りの後周辺部へラケズリ 右回転ロクロ成形		細砂粒や多	良好	暗褐色
15	土師器 环	口径 12.3 底径 6.8 器高 4.0	95%	体部外表面下端部ナデ 底部外表面軸孔外切りの後周辺部へラケズリ 右回転ロクロ成形 底部外表面巻着「井」		砂粒や多	良好	褐色
16	土師器 环	口径 12.3 底径 6.4 器高 4.0	100%	体部外表面下端部へラケズリ 底部外表面軸孔外切りの後周辺部へラケズリ 右回転ロクロ成形		細砂粒や多	良好	淡明褐色
17	土師器 环	口径 11.5 底径 7.0 器高 4.0	80%	口縫部内外面にスス付着 体部外表面下端部へラケズリ 底部外表面軸孔外切りの後周辺部へラケズリ 右回転ロクロ成形 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒・赤色 粒・砂粒少	良好	明暗褐色
18	土師器 环	口径 11.5 底径 6.4 器高 3.9	15% 底部中央 欠	体部外表面下端部へラケズリ 底部外表面軸孔外切りの後周辺部へラケズリ 右回転ロクロ成形		細砂粒少	良好	明褐色

査定番号	種類・器種	法面 (cm)	保存度	成形・施釉等の特徴		胎土	焼成	色調
				口径	底径			
19	土師器 环	口径 11.8 底径 6.6 器高 3.8	70%	口縁部内外面にスス付着 体部外面下縁部へラケズリ 底部外面回転舟切り、墨書き「井」 右回転ロクロ成形 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒や多 細砂粒や少	良好	褐色
20	土師器 环	口径 11.9 底径 6.4 器高 3.9	80%	体部外面墨書き「井」「寺」、繰削「井」 体部外面下縁部へラケズリ 底部外面回転舟切り		細砂粒・赤色 粒や少	良好	明褐色
21	土師器 环	口径 11.9 底径 6.6 器高 3.6	25%	体部外面下縁部へラケズリ 底部中央 右回転ロクロ成形		細砂粒や多 細砂粒や少	良好	明褐色
22	土師器 环	口径 - 底径 7.4 器高 -	10%以下	体部外面下縁部へラケズリ 底部外面周辺部へラケズリ 底部内面スス付着 右回転ロクロ成形 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒・赤色 粒や少	良好	淡明褐色
23	土師器 环	口径 11.4 底径 - 器高 -	20%	口縁部内外面にスス付着 右回転ロクロ成形 灯明具として使用されたと考えられる		細砂粒少	良好	明褐色
24	土師器 环	口径 11.0 底径 - 器高 -	10%以下	体部外面墨書き「万」 右回転ロクロ成形		細砂粒・赤色 粒や少	良好	明褐色
25	土師器 环	口縁部～ 体部片		口縁部墨書き「南」「北？」 右回転ロクロ成形		細砂粒少	良好	明褐色
26	土師器 环	口縁部～ 体部片		口縁部墨書き 字体不明 右回転ロクロ成形		細砂粒少	良好	明褐色
27	須恵器 転用環 (要)	長さ 13.8 幅 8.8	100% (腰部片)	外面平行叩き目 内面磨耗、垂付着 須恵器腰の側面部底部付近の破片を腰に転用		緻密 砂粒少	良好	灰色



第12図 004号住居跡出土遺物実測図 (2)



第13図 住居跡外出土遺物実測図

注1 平成8年度、<sup>2)</sup> 千葉県文化財センター調査。

2 平成10年度、<sup>2)</sup> 千葉県文化財センター調査。

## 第4章 洞谷台遺跡

### 第1節 調査の概要

洞谷台遺跡は、山武郡芝山町朝倉字洞谷台23-1ほかに所在し、栗山川の支流の高谷川の支谷によって開析された舌状台地上に位置する。隣接した遺跡の調査例として、古宿・上谷遺跡<sup>1)</sup>、大堀切遺跡<sup>2)</sup>がある。

古宿・上谷遺跡は、洞谷台遺跡が位置する舌状台地の東隣に位置し、空港南部工業団地造成に伴い発掘調査が行われた。舌状台地の基部のやや広い台地上にあり、旧石器時代石器ブロック、縄文時代中期末の集落跡、古墳時代後期の集落跡及び、中近世の集落跡、墓地などが検出された。

大堀切遺跡は、小支谷を挟んで北隣に位置する樹枝状の台地上である。主要地方道成田松尾線の建設及び、空港南部工業団地造成に伴い発掘調査された。旧石器時代石器ブロック、中近世土坑などが検出された。

今回の発掘調査は道路建設に伴う調査で、調査区は、遺跡の東半部に位置している。対象面積は4,200m<sup>2</sup>で、調査を始めるに当たり、調査区を全体を含むように公共座標に合わせて、20m×20mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を2m×2mに分割し、100個の小グリッドとした。大グリッドは西から東へA、B、C…、北から南へ1、2、3、…と記号を付け、小グリッドについては北西隅を起点に00～99と番号を付け、これらを組み合わせて呼称している。

調査は平成4年8月3日から同年10月30日まで実施した。調査は、上層確認調査、上層本調査、下層確認調査、下層本調査の順に行う予定であった。上層確認調査420m<sup>2</sup>を実施したところ、竪穴住居跡などが検出されたので、上層本調査3,400m<sup>2</sup>を行った。しかし、下層確認調査238m<sup>2</sup>を実施したが、遺物は出土せず、下層本調査は行わなかった。

### 第2節 遺構と遺物

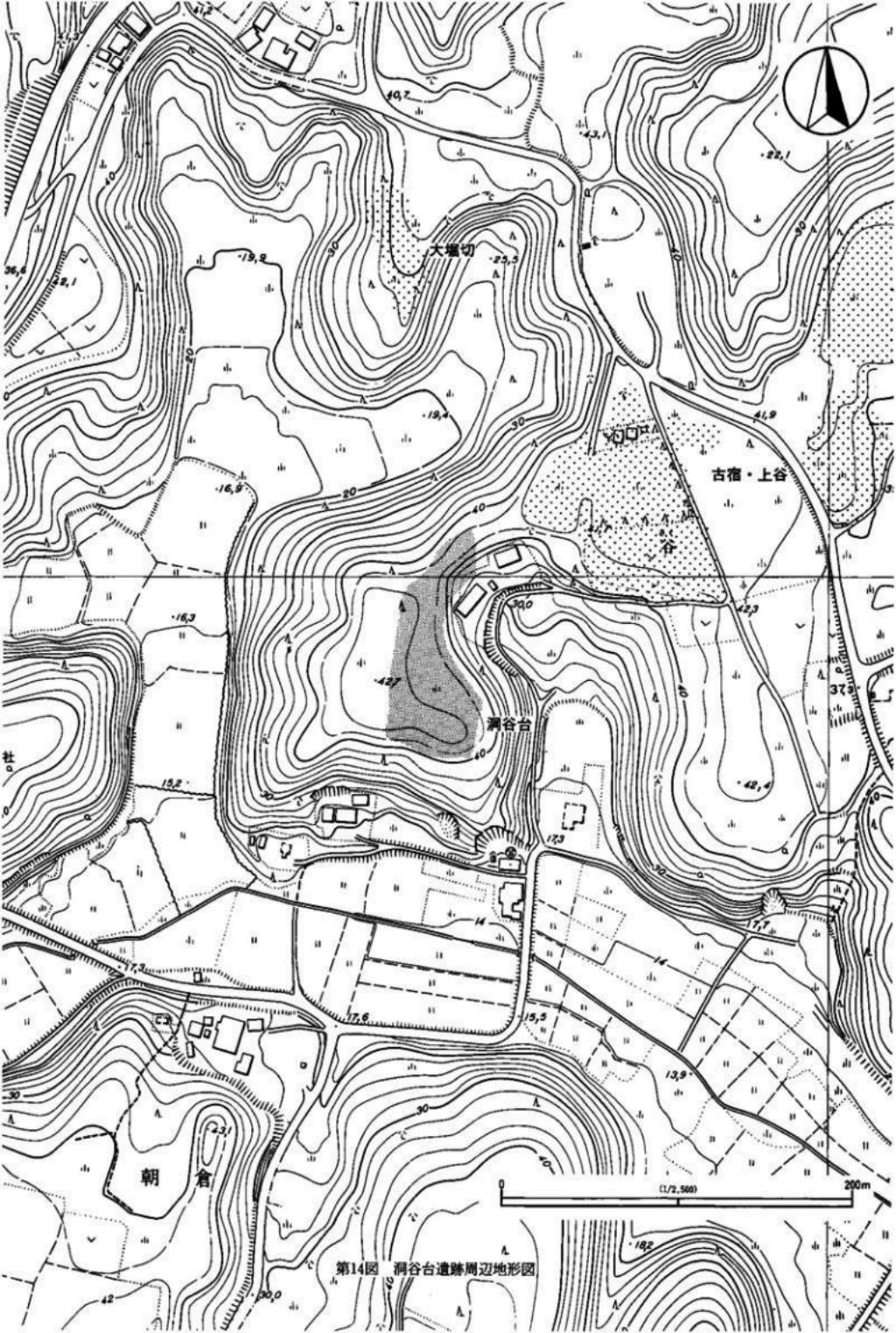
#### 1 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかった。出土した遺物は次のとおりである。

##### 縄文土器（第16図、図版9）

出土した縄文土器は少量であるが、その理由は調査区全体にわたって古墳時代以降の遺構が構築されていることによるものであり、実際の縄文時代の状況を反映しているものではない。

1は撚糸文土器である。外反する口縁に原体が圧痕される。2は半裁竹管による刺突が施されるもので、前期後半に属すると考えられる。3～6は加曾利E式土器である。3は口縁部に沿って棒状工具による連続刺突が施される。4は波状口縁になるもので、貼り付けた隆帯は剥落している。7は縄文地紋に曲線的な沈線が施されるもので、堀之内式である。8～18は加曾利B式の精製土器である。8はやや強く内湾するもので、口縁に沿って帶状の磨り消し縄文が配される。9～11は縄文地紋に平行沈線が施されるものである。12は無文の鉢形土器で、口唇上にキザミが施される。14は小型の深鉢形土器で、口縁部は肥厚しながら内湾する。14は波状口縁のもので、口唇部内面側に連続刺突が施される。16～18は集合沈線が施されるものである。19～26、28～30は加曾利B式の粗製土器である。27は底部で、直径は約6.5cmである。無文

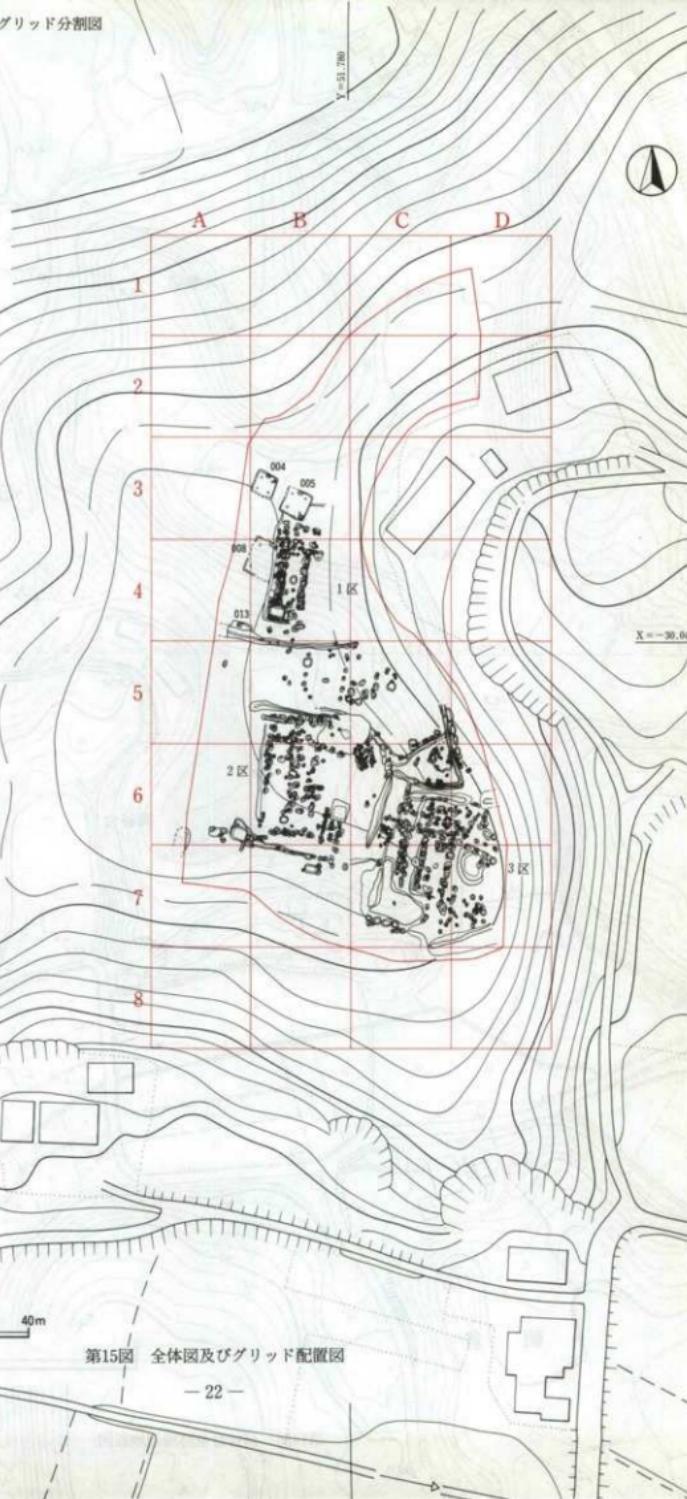


第14図 洞谷台遺跡周辺地形図

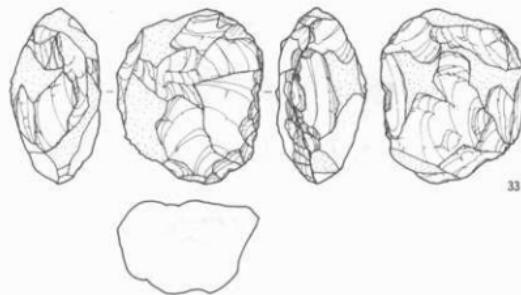
## 小グリッド分割図

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

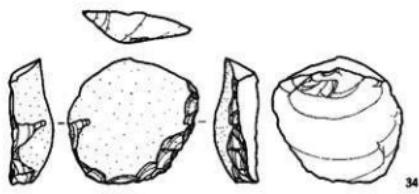
0 (1/400) 10m



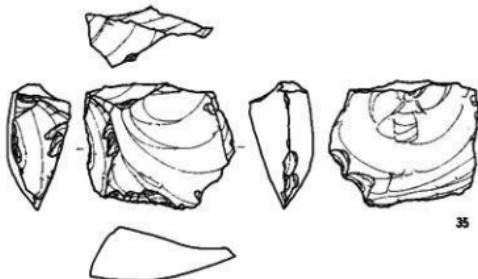
第15図 全体図及びグリッド配置図



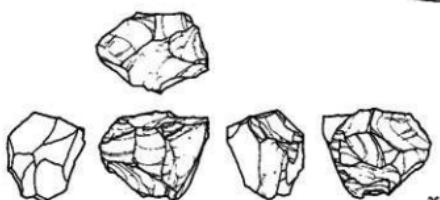
第16図 繩文時代遺物実測図（1）



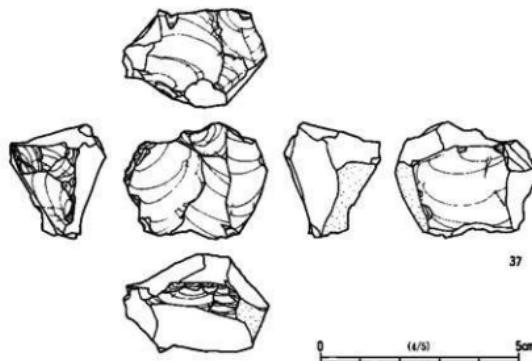
34



35



36



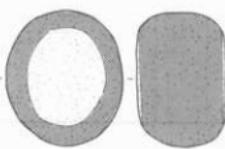
37



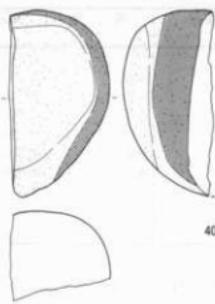
第17図 繩文時代遺物実測図（2）



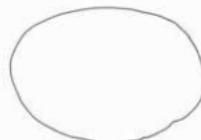
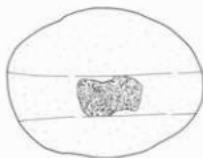
38



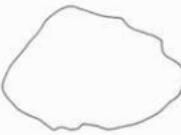
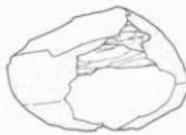
39



40



41



42

0 (1/2) 5cm

第18図 繩文時代遺物実測図（3）

第4表 出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	持因番号	石材	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)
33	042-6	火打ち石	第16図33	石英	43.3 × 36.5 × 22.8	40.1
34	018-1	削器	第17図34	珪質頁岩	31.2 × 32.6 × 11.0	12.5
35	13H-01-1	R剥片	第17図35	珪質頁岩	30.6 × 37.6 × 16.0	16.1
36	5A-23-1	石核	第17図36	安山岩	21.8 × 27.2 × 19.0	10.5
37	019-1	石核	第17図37	珪質頁岩	28.2 × 36.0 × 24.0	21.0
38	003-11	磨製石斧	第18図38	砂岩	21.8 × 39.5 × 19.0	15.8
39	030-2	磨石	第18図39	凝灰岩	52.5 × 46.3 × 35.5	132.8
40	022-1	磨石	第18図40	安山岩	74.5 × 39.8 × 35.5	135.3
41	122-1	敲石	第18図41	流紋岩	68.0 × 77.5 × 58.8	286.8
42	034-1	敲石	第18図42	チャート	83.3 × 72.3 × 47.5	325.9

であるが、加曾利B式に属するものと考えられる。31は後期安行式と考えられる精製土器、32は同じく粗製土器である。

#### 石器（第16図～第18図、図版10・11）

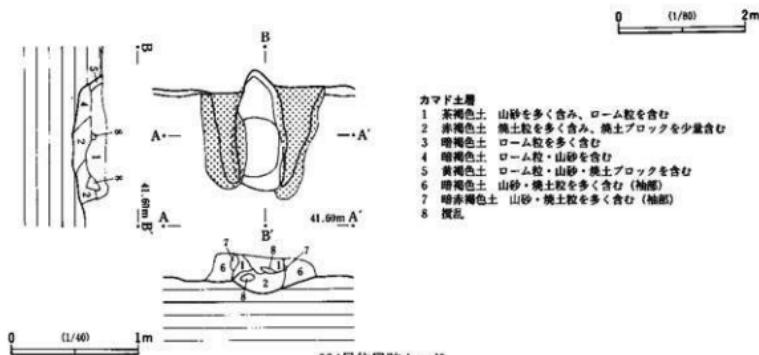
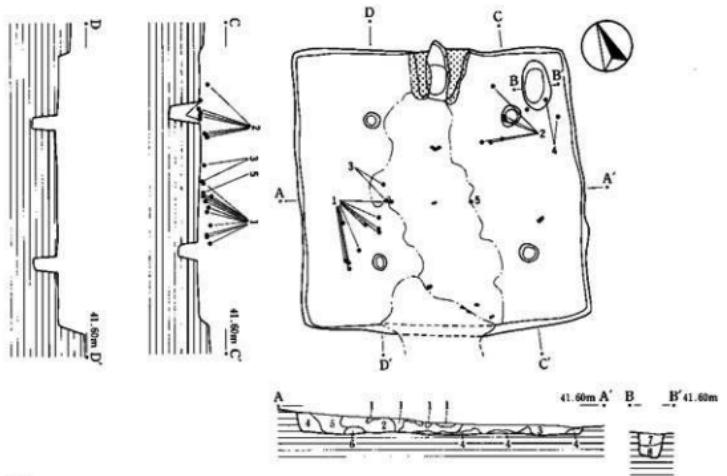
33は縁辺部に不規則な敲打痕が観察されるもので、火打ち石と考えられる。34は側縁部から先端部にかけて連続した二次加工痕が観察されるもので、削器である。35は先端部に二次加工痕が観察されるもので、搔器製作を意図したものか。36、37は石核である。38は磨製石斧の刃部の破片である。39～41は磨石である。41は敲打痕も観察され、敲石としても使用されたと考えられる。42は大きな剝離痕のある砾で、やはり敲石として使用されたものであろう。

## 2 古墳時代

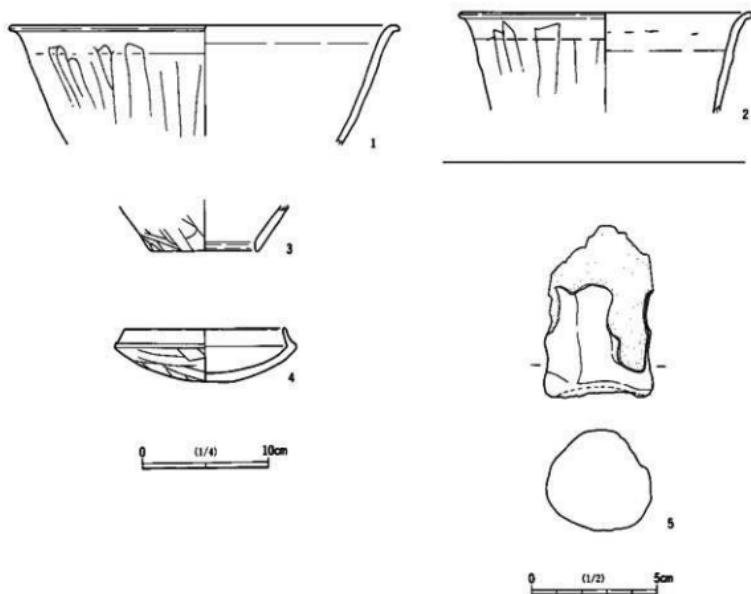
堅穴住居跡が4軒検出された。成果は次のとおりである。

004号住居跡居跡（第19・20図 第5表 図版12・13）

調査区の北部に検出された。平面形はやや横長の方形で、規模は4.4m×4.5mである。検出面からの深さは0.4mである。南壁中央部が木根により擾乱されている。床面は全体に平坦で、一点叉線内は特に堅緻である。壁周溝は検出されなかった。柱穴は4か所で、径0.25m～0.3m、深さ0.3m～0.5mである。北壁中央にカマドが検出された。カマドを中心とした主軸の方向はN-23°-Eである。床面の北東隅に貯蔵穴が検出された。平面形は椭円形で、大きさは0.4m×0.8m、深さは0.4mである。カマドの遺存は良く、規



第19図 004号住居跡及びカマド実測図



第20図 004号住居跡出土遺物実測図

第5表 004号住居跡出土遺物表

検査番号	種類・型種	法長 (cm)	遺存度	成形・調飾等の特徴	胎土	焼成	色調
1	土器盤 板	口径 31.0 底径 - 器高 -	20%	口縁部ヨコナデ 縁部外面斜位ヘラケズリ 底部内面ナデ	砂粒やや多	良好	明褐色
2	土器盤 艦	口径 23.4 底径 - 器高 -	15%	口縁部ヨコナデ 縁部外面斜位ヘラケズリ 底部内面ナデ	砂粒やや多	良好	明褐色
3	土器盤 艦	口径 - 底径 8.6 器高 -	10%以下 底 底筋	外面斜位及び斜位ヘラケズリ 内面ナデ 縁部ヨコナデ	砂粒やや多	良好	明褐色
4	土器盤 坏	口径 12.8 受部径 14.5 器高 4.2	40%	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリの後ナデ、ケズリは一部不明瞭 体部内面ナデ、一部ミガキ状のナデ	細砂粒やや多	良好	黒褐色
5	土製支器	長 6.7 幅 4.3 厚 4.0	40%	全体にナデ 底面がくぼむ	砂粒やや多	良好	暗褐色

模は、長さ1.0m、幅0.9m、袖長0.95m、袖幅0.3m、壁への掘り込み0.2mである。火床は浅くくぼむ。梢円形で、0.85m×0.4m、床面からの深さは0.1mである。

出土遺物は土師器である。1～3は土師器の甌である。1・2は底部を欠くが、口縁部と胴部との間がくびれないので、甌とした。4は土師器の壺である。丸底で、受部がある。口縁部端はわずかに外反する。5は土製支脚である。円筒形で、側面に面取り状のナデが施される。

#### 005号住居跡居跡（第21～24図 第6表 図版12～14）

調査区の北部に検出された。中近世遺構の削平を受け、遺存状態は悪い。平面形はやや縦長の方形で、規模は5.5m×5.4mである。検出面からの深さは0.1mである。北西隅及び西壁中央が攪乱されている。床面は全体に平坦で、一点又線内は特に堅緻である。壁周溝は検出されなかった。柱穴は4か所で、径0.2m～0.4m、深さ0.5m～0.7mである。北壁中央にカマドが検出された。カマドを中心とした主軸の方向はN-27°-Eである。床面に貯蔵穴1基、ピット3基が検出された。貯蔵穴は南東隅で、平面形は方形である。大きさは0.9m×0.7m、深さは0.55mである。ピットはカマド前、南側2柱穴間及び、南壁下である。径0.2m～0.65m、深さは0.15m～0.35mである。遺物が多く出土し、特に、カマド前面及び床面南東部に集中している。

カマドの規模は、長さ1.1m、幅1.05m、袖長0.65m、袖幅0.4m、壁への掘り込み0.3mである。火床は浅くくぼむ。梢円形で、0.8m×0.6m、床面からの深さは0.1mである。カマド内から遺物が多く出土し、土製支脚が出土している。

出土遺物は土師器である。1～10は土師器の甌である。1～3は丸胴の甌、4・5はやや長胴の甌である。6はやや小型の甌、10は小型の甌である。口縁部にヨコナデ、胴部にはヘラケズリが施される。口縁部と胴部との境が稜線状になる。11・12は壺である。11は胴部に丸みがあり、甌状である。13は大型の壺である。丸底に近い平底で、通常の壺に比べて器高が高い。14～17は丸底の壺である。14・15は受部があり、口縁部端はわずかに外反する。14は内面にミガキ状のナデが施され、外面体部にヘラ記号「×」が施される。16・17は口縁部と体部との境に稜がある。口縁部は外反する。18は土製支脚である。断面が丸みのある菱形の角柱形で、側面にナデが施される。

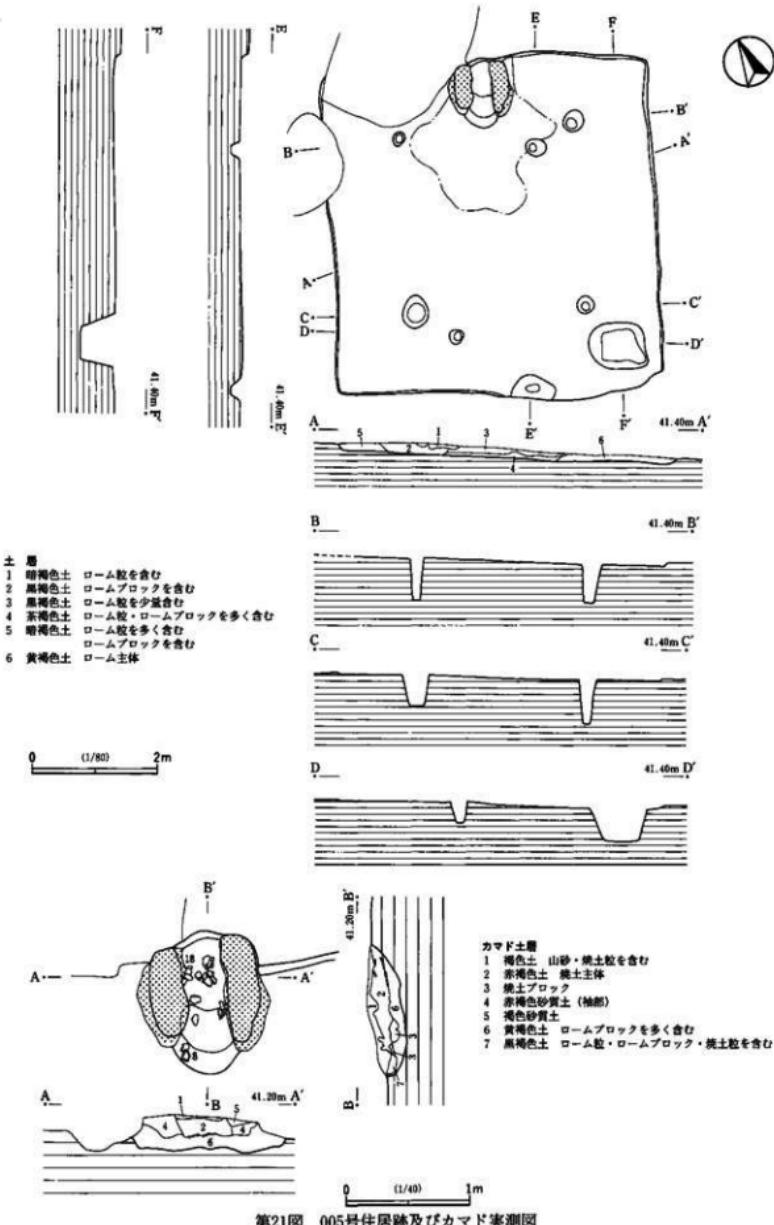
#### 008号住居跡居跡（第25・26図 第7表 図版12・14）

調査区の北部に検出された。東側1/3が中近世遺構に削平されている。平面形は方形で、規模は一辺約7.5mである。検出面からの深さは0.1～0.3mである。西壁中央部及び南壁中央部が攪乱されている。床面は全体に平坦である。柱穴、壁周溝が検出された。柱穴は2か所で、径0.4m、深さ0.75mである。壁周溝は、西壁南部及び南壁下に検出された。幅0.15m、深さ0.15mである。北壁中央にカマドが検出された。カマドを中心とした主軸の方向はN-22°-Eである。カマドは右袖が削平されている。規模は、長さ1.05m、幅約1.2m、左袖長0.8m、左袖幅0.4m、壁への掘り込み0.4mである。火床は浅くくぼむ。梢円形で、0.5m×0.6m、床面からの深さは0.05mである。遺物は細片が多く、図化は少量である。

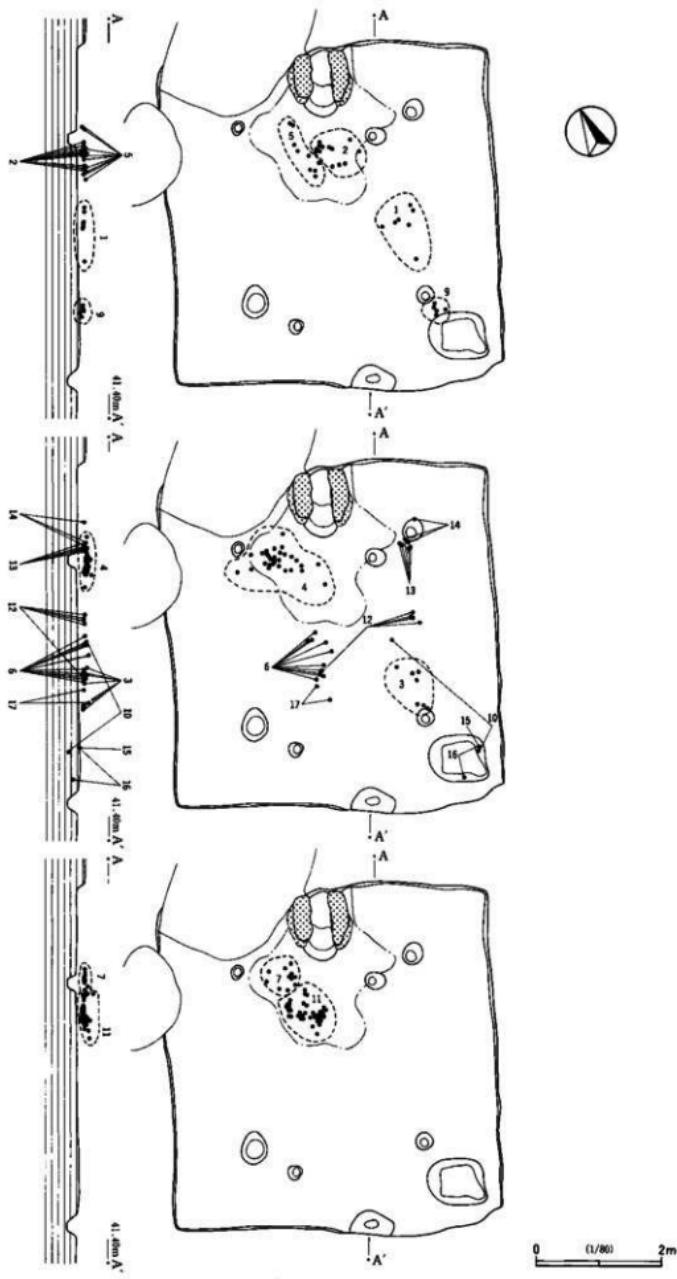
遺物は土師器である。1～4は土師器の壺である。1～3は丸底で、受部がある。口縁部は1が内傾し、2・3は直立する。4は丸底で、口縁部と体部との境に稜がある。口縁部は外傾する。1・4は口縁部端がわずかに外反する。

#### 013号住居跡居跡（第27図 第8表 図版14）

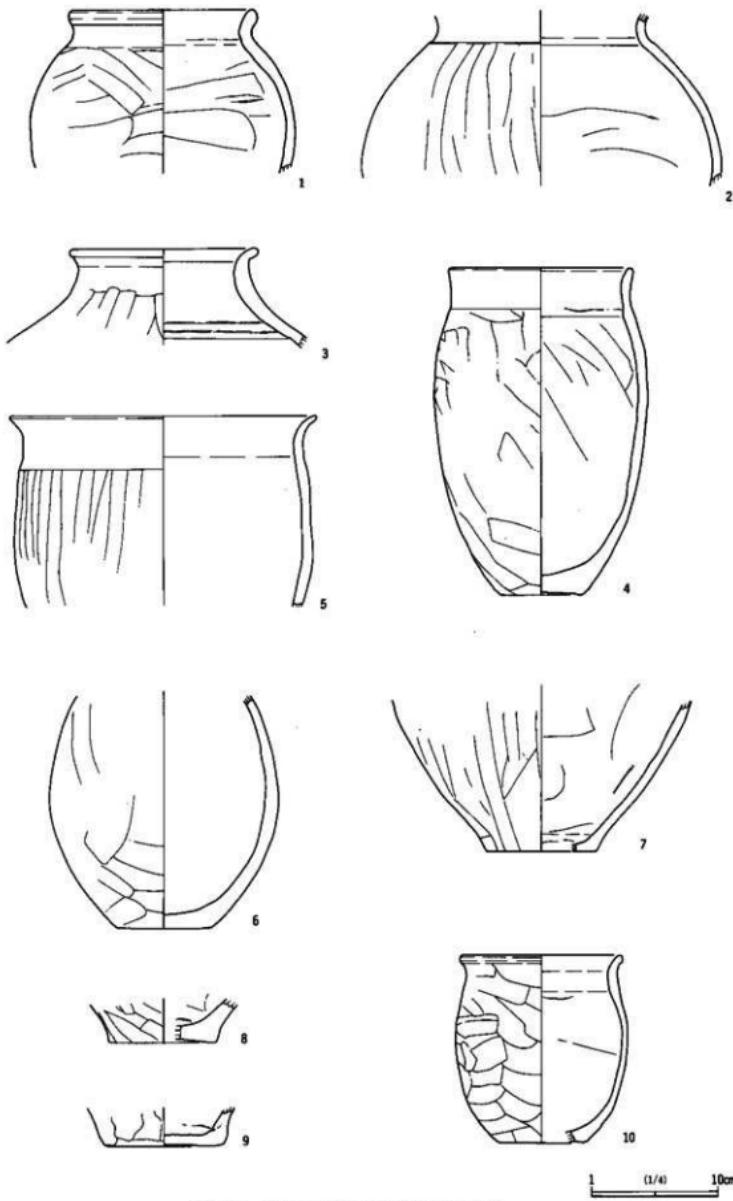
調査区の中央部に検出された。南側2/3が中近世遺構に削平され、全体に削平を受けている。平



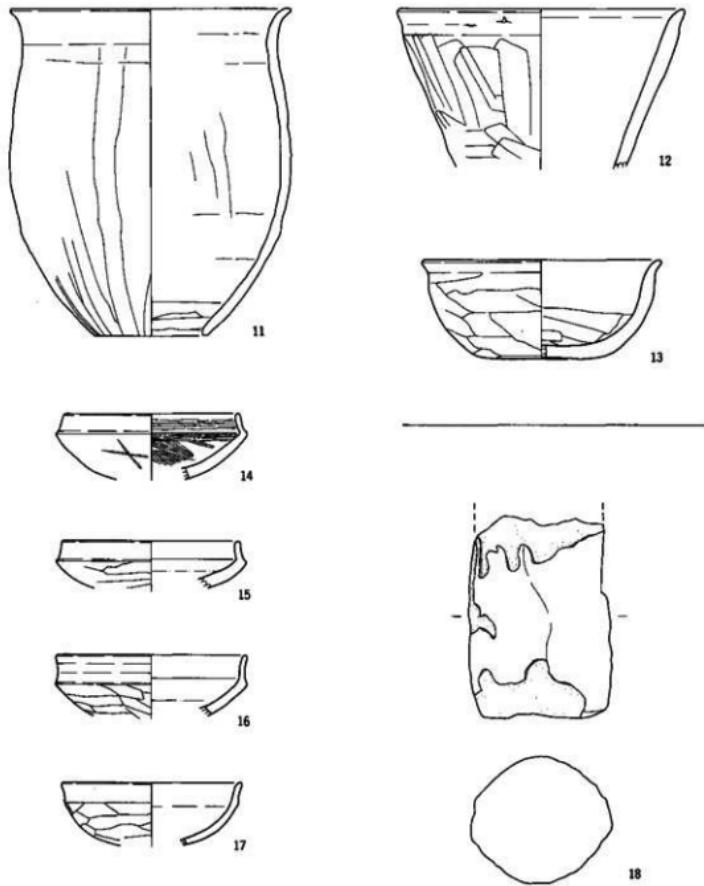
第21図 005号住居跡及びカマド実測図



第22図 005号住居跡遺物接合図



第23図 005号住居跡出土遺物実測図(1)



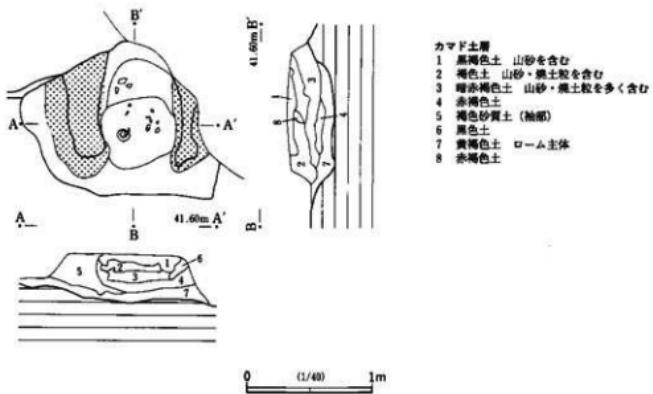
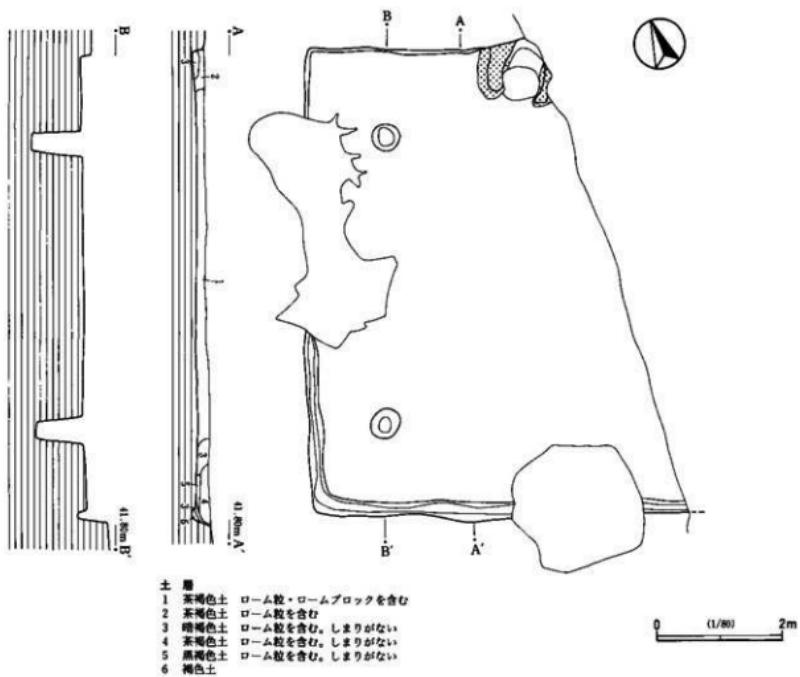
0 (1/4) 10cm

0 (1/2) 5cm

第24図 005号住居跡出土遺物実測図（2）

第6表 005号住居跡出土遺物表

地図番号	種類・部種	法寸 (cm)	遺存度	形態・調査等の特徴	胎土	焼成	色調
1	土師器 容	口径 15.0 腰径 14.2 底径 21.0	25% 口縁部～胴部～ 胴部	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ	砂粒多	良好	明褐色
2	土師器 容	頭径 16.3 腰径 28.6	15% 頭部～胴上部	頭部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ	砂粒多	良好	淡褐色
3	土師器 容	口径 14.9 腰径 13.5	20% 口縁部～胴上部	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ	やや密 砂粒多	良好	明褐色
4	土師器 容	口径 24.4 腰径 22.2 底径 23.7	15% 口縁部～ 胴部	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ	砂粒多	良好	明褐色
5	土師器 容	口径 14.6 腰径 14.1 底径 17.0 高さ 5.4	70% 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリの後ナデ、ケズリは一部不明瞭 胴部内面ナデ 背部ヘラケズリの後ナデ	砂粒多	良好	明褐色	
6	土師器 容	頭径 18.2 底径 7.4	25% 胴部～ 底部	胴部外面ヘラケズリの後ナデ、ケズリ痕は不明瞭 胴部内面ナデ 底部ヘラケズリ	やや密 砂粒多	良好	淡褐色
7	土師器 容	底径 8.8	10%以下 胴下部～ 底部	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ 底部ヘラケズリ	砂粒多	良好	褐色
8	土師器 容	底径 8.4	10%以下 底部	ヘラケズリ 内面ナデ	砂粒多	良好	暗赤褐色
9	土師器 容	底径 9.6	10%以下 底部	ヘラケズリ 内面ナデ	砂粒多	良好	明褐色
10	土師器 容	口径 12.9 腰径 11.9 底径 13.7 底高 6.6 高さ 7.7	40% 底部中央 欠	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ 底部ヘラケズリ	砂粒多	良好	明褐色
11	土師器 風	口径 22.3 腰径 20.1 腰径 22.3 底径 9.0	50% 口縁部ヘラケズリ 胴部内面ナデ 底部端部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ 底部端部ヨコナデ	砂粒多 赤色粒ごく少	良好	明褐色 黒斑あり
12	土師器 風	口径 22.9	10% 口縁部～ 胴部	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ	やや密 砂粒多	良好	明褐色
13	土師器 壁	口径 15.0 底径 10.2 高さ 7.7	50% 体部内外面ヘラケズリ 底部木葉痕	口縁部ヨコナデ 体部内外面ヘラケズリ 底部木葉痕	細砂粒多 砂粒少	良好	明褐色 内面黒褐色
14	土師器 壁	口径 13.8 受部径 15.2	30% 底部欠	口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面粗いヘラミガキの後ヨコナデ 体部外面ヘラケズリの後ナデ、ケズリ痕は不明 体部内面粗いヘラミガキの後ナデ、ミガキは一部不明 体部外面ヘラ記号「×」焼成前	砂粒多	良好	褐色
15	土師器 壁	口径 12.0 受部径 15.1	15% 底部欠	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ 外面口縁部、内面口縁部～体部上半部赤影	細砂粒多	良好	黒褐色
16	土師器 壁	口径 15.0	20% 底部欠	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ 内外面赤影	細砂粒多	良好	暗褐色
17	土師器 壁	口径 14.3	20% 底部欠	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂粒多 赤色粒少	良好	淡灰褐色
18	土製支脚	長 幅 厚	7.9 5.6 5.0	50% 全体にナデ 二次焼成のため全体にもろい	砂質 砂粒多	良好	明褐色



第25図 008号住居跡及びカマド実測図



第26図 008号住居跡出土遺物実測図

第7表 008号住居跡出土遺物表

検出番号	種類・器種	法量(cm)	遺存度	成形・質等の特徴	胎土	焼成	色調
1	土師器 环	口径 12.4 受部径 14.0 縦高 4.3	95%	口縁部端面取付のナデ 口縁部ミガキ状のヨコナデ 体部外周ヘラケズリの後ナデ、ケズリ痕不明瞭 体部内面ミガキ状のナデ	砂粒やや多	良好	茶褐色
2	土師器 环	口径 15.8 受部径 15.8 縦高 4.2	25%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリの後ナデ、ケズリは一部不明瞭 体部内面ナデ 内外面赤影	砂粒やや多	良好	茶褐色
3	土師器 环	口径 15.4 受部径 15.6 縦高 5.2	100%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリの後ナデ、ケズリ痕不明瞭 内外面赤影	砂粒多	良好	茶褐色
4	土師器 环	口径 13.7 縦高 4.9	100%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリ 体部内面ミガキ状のナデ	砂粒少	良好	灰褐色-暗褐色

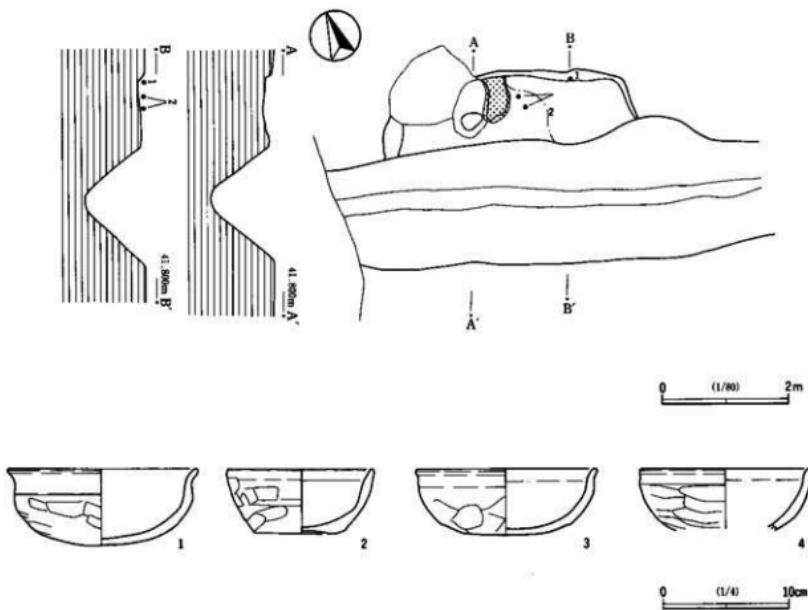
面形は方形で、規模は一辺約4.0mである。検出面からの深さは0.1mである。床面は全体に平坦で、一点叉線内は特に聖蹟である。柱穴、壁周溝は検出されなかった。北壁中央やや西寄りにカマドが検出された。カマドを中心とした主軸の方向はN-21°-Eである。カマドは左袖が荒らされ、全体が削平されている。遺物は土師器である。1~4は土師器の环である。3・4は溝状造構の出土であるが、1・2と同形であるので、住居跡の遺物と考えられる。丸底で、口縁部と体部との境に稜がある。口縁部は外傾し、口縁部端がわずかに外反する。

#### 住居跡外出土遺物（第28図 第9表 図版14）

住居跡外から出土した古墳時代の遺物を掲載した。

1は2区1号地下式坑、3・4は1区1号掘立柱建物跡、5は土坑051、7は土坑031の出土である。また、2は1区出土、6は表探である。

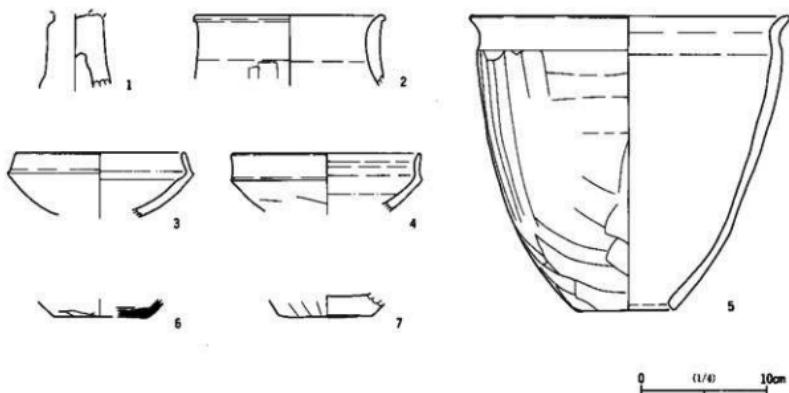
1は高环の脚部である。やや細長い切頭円錐形である。2は壺である。口縁部端が外反し、丸縁状である。3・4は环で、受部がある。5・6は壺の底部である。7は瓶である。口縁部は外反し、胴部との境に稜がある。



第27図 013号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第8表 013号住居跡出土遺物表

博団番号	種類・型種	法量 (cm)	遺存度	成形・裏面等の特徴	胎土	焼成	色調
1	土師器 环	口径 15.2 底径 - 壁高 6.0	90%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリの後ナデ ケズリは不明瞭 内面ナデ	砂粒やや多	良好	淡明褐色
2	土師器 环	口径 11.6 底径 6.4 壁高 5.1	70%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面ナデ	砂粒やや多	良好	明褐色
3	土師器 环	口径 14.4 底径 - 壁高 5.2	25%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリ 内面ナデ	砂粒やや多	良好	暗灰褐色
4	土師器 环	口径 13.6 底径 - 壁高 -	20%	口縁部ヨコナデ 体部外周ヘラケズリ 内面ナデ	砂粒やや多		暗褐色



第28図 住居跡出土遺物実測図

第9表 住居跡出土遺物表

検出番号	種類・器種	法長(cm)	遺存度	形態・圖鑑等の特徴	胎土	焼成	色調	目録
1	土師器 高杯		20%	外面へラケズリの後ナデ 内面ナデ	砂粒多	良好	淡明褐色	001
2	土師器 変	口径 15.3 底径 — 器高 —	10%以下	口縁部ヨコナデ 脚部外周線位へラケズリの後ナデ 内面ナデ	粗砂粒多	良好	明褐色	006
3	土師器 环	口径 15.2 受部径 15.3 器高 —	10%以下	口縁部ヨコナデ 体部外周へラケズリの後ナデ ケズリは不明瞭 内面ナデ	砂粒多	良好	暗褐色 内外面赤彩	014
4	土師器 环	口径 13.4 受部径 14.8 器高 —	15%	口縁部ヨコナデ 体部外周へラケズリの後ナデ ケズリは不明瞭 内面ナデ	砂粒やや多	良好	明褐色	014
5	土師器 瓢	口径 25.5 底径 7.8 器高 23.5	95%	口縁部ヨコナデ 脚部外周へラケズリの後一部ナデ ケズリは一部不明瞭 内面ナデ	砂粒多 布 色粒少	良好	明褐色 黒斑あり	031
6	須恵器 环	口径 — 底径 7.4 器高 —	10%以下	体部下端部へラケズリ 基部へラケズリ	長石・石英 粒多	良好	灰色	051
7	土師器 変	口径 — 底径 7.5 器高 —	10%以下	脚部へラケズリ 基部へラケズリ 内面ナデ	砂粒多	良好	褐色	—

### 3 中近世

#### (1) 遺構

中近世の遺構は、掘立柱建物跡を主体とする屋敷地が隣接して3か所検出された。北から1区、2区、3区とし、概要を述べる。

##### 1区（第29図 図版15・16）

1区は東半分が削平を受け消滅している。検出された遺構は、居住関連遺構として掘立柱建物跡5棟、地下式坑1基、区画遺構として溝状遺構1条である。東に向かった緩斜面上にあり、段整形を施して平坦面をつくり、掘立柱建物跡等を配置している。段差は検出面で、0.4m～0.6mである。

屋敷地の構造は、東向き正面の主屋と考えられる1・2号掘立柱建物跡を中心に、北側に3・4号掘立柱建物跡、南側に1号地下式坑を伴う5号掘立柱建物跡が配置され、主屋（1・2号掘立柱建物跡）前面の空間が庭的な場所と考えられる。3・4号掘立柱建物跡は作業小屋的な付属屋、1号地下式坑を伴う5号掘立柱建物跡は貯蔵庫的な付属屋と考えられる。また、5号掘立柱建物跡は1号地下式坑との位置関係から、妻入りと考えられる。

主屋の1・2号掘立柱建物跡の新旧関係は、屋敷地の段成形に合致する1号掘立柱建物跡が段部分から離れている2号掘立柱建物跡よりも新しいと考えられる。また、北側の3・4号掘立柱建物跡との共存関係は、配置から1号と3号、2号と4号が共存すると考えられる。なお、5号掘立柱建物跡と1号地下式坑は新主屋（1号掘立柱建物跡）と共に存するが、旧主屋（2号掘立柱建物跡）と共に存するかは不明である。よって、1区の屋敷地は2号掘立柱建物跡、4号掘立柱建物跡（5号掘立柱建物跡と1号地下式坑）の屋敷構造から、1号掘立柱建物跡、3号掘立柱建物跡、5号掘立柱建物跡、1号地下式坑の屋敷構造に発展したと考えられる。

1号溝状遺構は屋敷地を区画する溝と考えられ、段成形との間があいているので、土壙を伴っていた可能性がある。

各遺構の規模等は次のとおりである。

##### 1区 1号掘立柱建物跡（第30図）

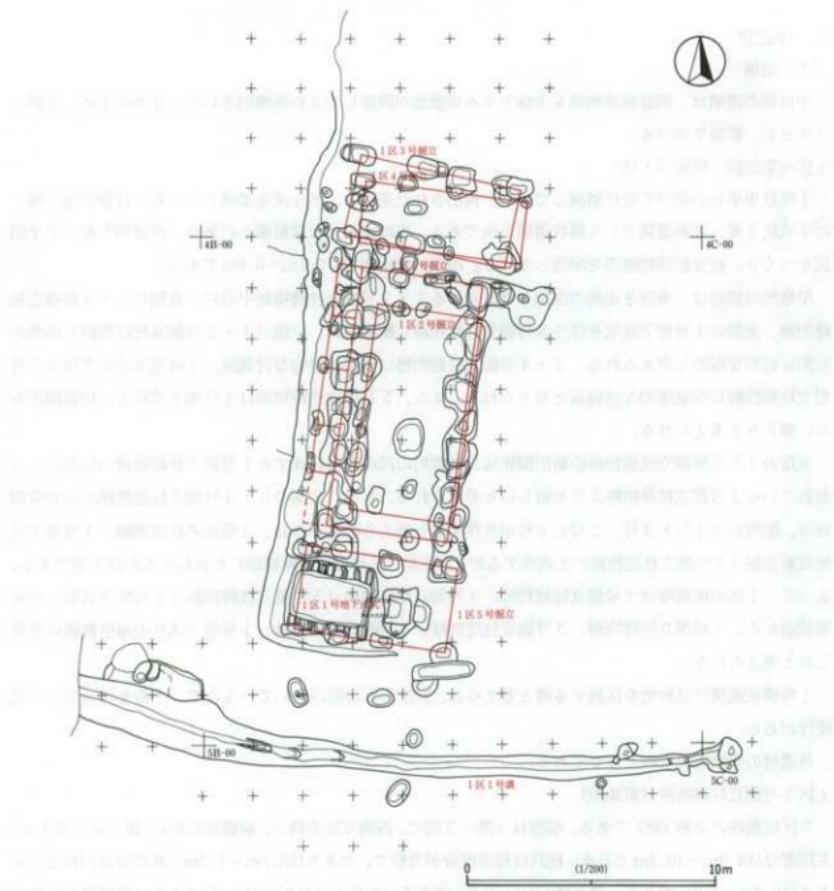
1区屋敷地の主屋（新）である。規格は3間×5間で、西側に庇を持つ。規模は5.8m×10.2mであるが、主屋部分は4.9m×10.2mである。柱穴は母屋部分が方形で、大きさは0.7m～1.3m、庇部分は円形で、大きさは0.4m～1.0mである。深さは0.4m～0.6mである。長軸方向はN-8°-Eである。母屋部分の柱穴の状況から2回建て替えが行われたと考えられる。また、建物内の土坑（土層B-B'）には、焼土が検出されているので、掘立柱建物跡に伴う囲炉裏跡の可能性がある。

##### 1区 2号掘立柱建物跡（第30図）

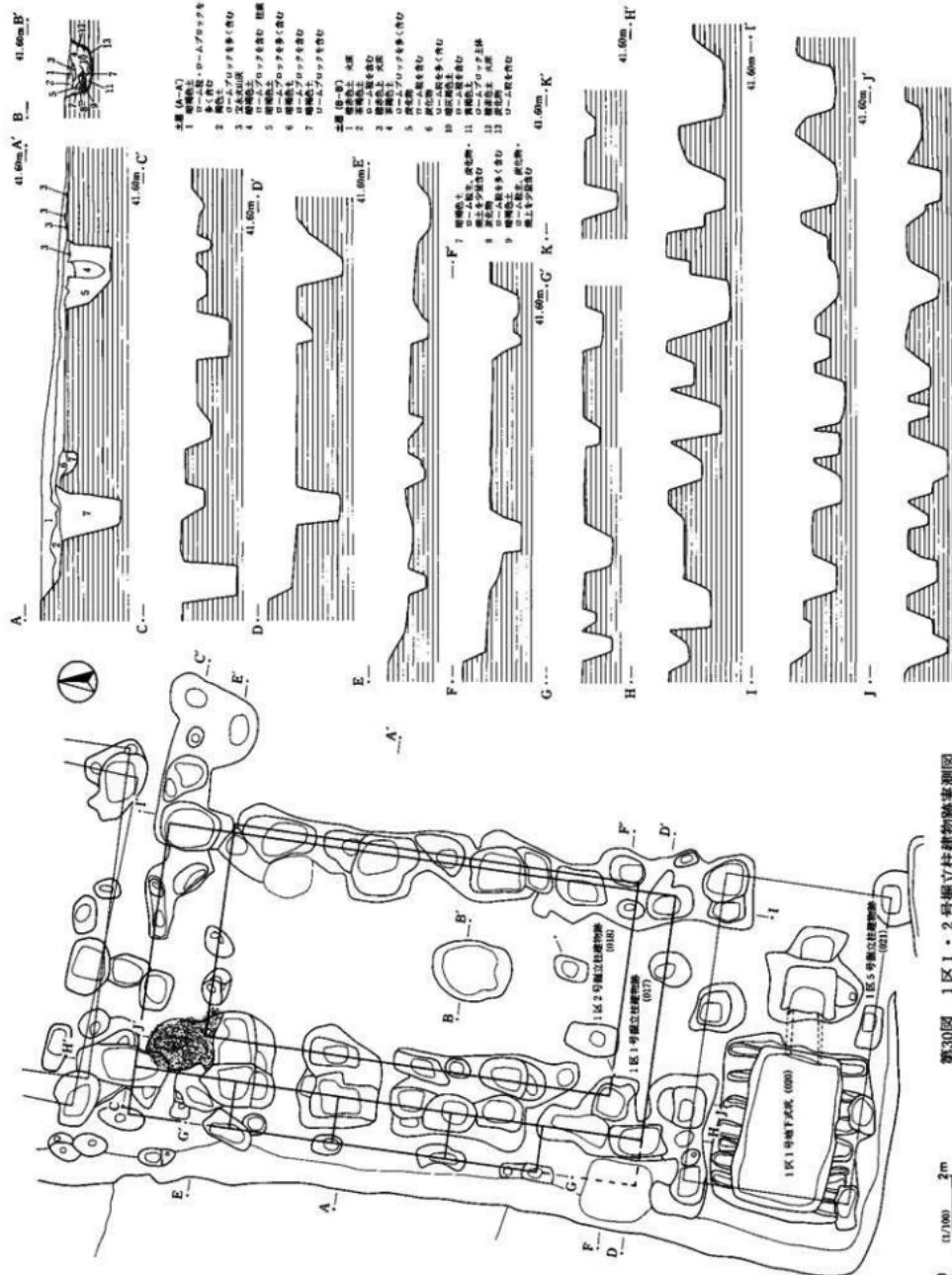
1区屋敷地の主屋（古）である。規格は3間×5間で、規模は4.3m×8.1mである。柱穴は横円形及び長方形で、大きさは0.4m～1.0m、深さは0.5m～0.7mである。長軸方向はN-8°-Eである。柱穴の状況から2回建て替えが行われたと考えられる。

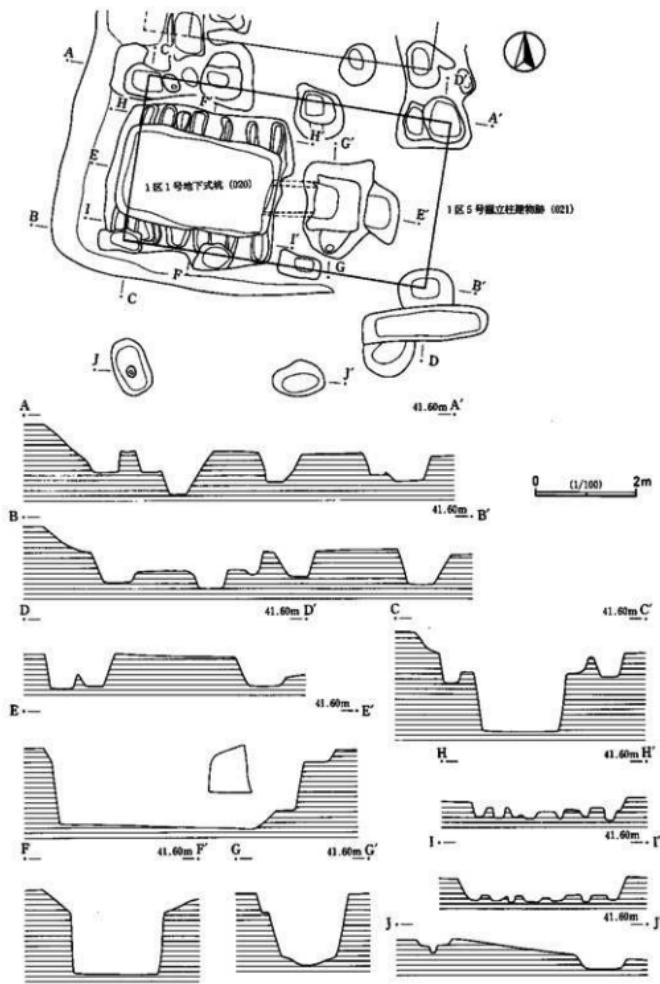
##### 1区 3号掘立柱建物跡（第29図）

規格は1間×3間で、規模は3.3m×6.6mである。柱穴は方形で大きさは0.7m～1.3m、深さは0.7m～1.1mである。長軸方向はN-102°-Eである。



第29図 1区中近世遺構配置図





第31図 1区5号掘立柱建物跡及び1号地下式坑実測図

#### 1区4号掘立柱建物跡（第29図）

規格は1間×3間で、規模は2.6m×6.6mである。柱穴は方形で、大きさは0.6m～1.0m、深さは0.2m～0.4mである。長軸方向はN-97°-Eである。

#### 1区5号掘立柱建物跡（第31図）

1号地下式坑の上屋跡の可能性がある。規格は1間×3間で、規模は3.6m×6.1mである。柱穴は方形で、大きさは0.4m～1.0m、深さは0.4m～1.0mである。長軸方向はN-99°-Eである。

#### 1区1号地下式坑（第31図 図版16）

規格は全長5.9mである。主室部分は長さ3.2m、幅1.9m、深さ1.5mである。入口部分は長さ1.9m、幅1.9m、深さ1.15mであり、浅い段までの深さは0.2mである。床面は平坦で、壁はほぼ垂直である。入口は東向きで、方向はN-100°-Eである。この地下式坑は土天井ではなく丸太状の部材を短軸方向に渡し、天井とした可能性がある。

#### 1区1号溝状遺構（第29図 図版16）

規格は、幅0.5m～2.0m、深さは0.25m～0.7mで、西へ向かうほど幅が広くなり、深さが深くなる。断面は東部で箱形、西部では幅の広いV字形である。013号住居跡と重複しているが出土遺物から本跡が新しい。

#### 2区の遺構（第32図 図版17）

1区と同様の屋敷地であるが、全体が検出された。遺構は、居住関連遺構として掘立柱建物跡9棟、地下式坑2基、竪穴状遺構1基、区画遺構として棚列跡2条、溝状遺構2条である。土坑が多数検出されているがどちらに所属するかは不明なものが多い。居住関連としてはゴミ穴跡、庭木跡が考えられ、区画としては柵跡、立木跡などが考えられる。東に向かって緩斜面上にあり、段整形を施して平坦面をつくり、掘立柱建物跡等を配置している。段差は検出面で、0.2mである。屋敷地は北側及び南側が溝状遺構で区画され、東側は3区屋敷地に付属すると考えられる溝状遺構で区画される。西側は区画の遺構は検出されなかつたが、段成形が施されているので、土手状に高くなっていた可能性がある。1区屋敷地との間には空間があり、土坑群、柵列跡（2区2号）が検出されている。掘立柱建物跡は2・3・9号及び4・5号がそれぞれ重複している。

1区と同じく、大きく2時期に区分されると考えられる。掘立柱建物跡の屋敷地としての最新の構造は、東向き正面の主屋と考えられる1号掘立柱建物跡を中心に、北側に2・3号掘立柱建物跡、南側に1号地下式坑、1号柵列跡が配置され、主屋の前面の空間が庭的な場所と考えられる。2・3号掘立柱建物跡は作業小屋または、廻的な付属屋と考えられる。また、庭を囲むように4・5号掘立柱建物跡及び8号掘立柱建物跡・1号竪穴状遺構が配置されると考えられる。

古い屋敷地の構造は、東向き正面の主屋と考えられる6号掘立柱建物跡を中心に、北側に9号掘立柱建物跡、南側に7号掘立柱建物跡が配置され、主屋の前面の空間が庭的な場所と考えられる。7・9号掘立柱建物跡は作業小屋的な付属屋と考えられる。

溝状遺構は屋敷地の古い段階から形成され、西側に拡張した新しい段階に西に延びた可能性がある。また、1号地下式坑は、2号溝状遺構の西端に位置しているので、屋敷地の新しい段階に付属すると考えられる。1号柵列跡も位置及び作り替えの状況から、古新両段階で使用されたと考えられる。

以上から、2区の屋敷地は、古い段階から西側へ屋敷地を拡張した新しい段階へと発展したと考えられる。

各遺構の規模等は次のとおりである

#### 2区1号掘立柱建物跡（第33図）

2区屋敷地の主屋（新）である。規格は1間×5間で、規模は4.6m×9.4mである。柱穴は楕円形で、大きさは0.5m～1.5mである。深さは0.4m～0.6mである。長軸方向はN-6°-Eである。

#### 2区2号掘立柱建物跡（第32図）

規格は2間×5間で、規模は4.6m×9.5mである。柱穴は楕円形で、大きさは0.7m～1.3m、深さは0.7m～1.2mである。長軸方向はN-93°-Eである。

#### 2区3号掘立柱建物跡（第32図）

規格は2間×5間で、規模は3.5m×12.0mである。柱穴は円形及び楕円形で、大きさは0.5m～1.0m、深さは0.6m～0.9mである。長軸方向はN-92°-Eである。

#### 2区4号掘立柱建物跡（第32図 図版18）

規格は1間×2間で、規模は2.8m×3.8mである。柱穴は円形及び楕円形で、大きさは0.45m～1.0m、深さは0.2m～0.75mである。長軸方向はN-11°-Wである。

#### 2区5号掘立柱建物跡（第32図 図版18）

規格は1間×2間で、規模は2.5m×3.7mである。柱穴は円形及び楕円形で、大きさは0.3m～0.8m、深さは0.2m～0.6mである。長軸方向はN-1°-Eである。

#### 2区6号掘立柱建物跡（第32図）

2区屋敷地の主屋（古）である。規格は1間×4間で、規模は3.4m×8.9mである。柱穴は方形及び楕円形で、大きさは0.5m～1.0m、深さは0.1m～0.7mである。長軸方向はN-9°-Eである。

#### 2区7号掘立柱建物跡（第32図）

規格は2間×2間で、規模は3.2m×4.5mである。柱穴は円形及び楕円形で、大きさは0.7m～1.3m、深さは0.45m～0.7mである。長軸方向はN-98°-Eである。

#### 2区8号掘立柱建物跡（第32図）

規格は1間×4間で、規模は3.0m×7.1mである。柱穴は円形及び楕円形で、大きさは0.6m～1.4m、深さは0.4m～0.85mである。長軸方向はN-9°-Wである。柱穴の検出状況から1回以上の建て替えが行なわれたと考えられる。

#### 2区9号掘立柱建物跡（第32図）

規格は1間×3間で、規模は4.05m×6.8mである。柱穴は方形で、大きさは0.8m～1.2m、深さは0.4m～0.9mである。長軸方向はN-154°-Eである。

#### 2区1号竪穴状遺構（第32図 図版18）

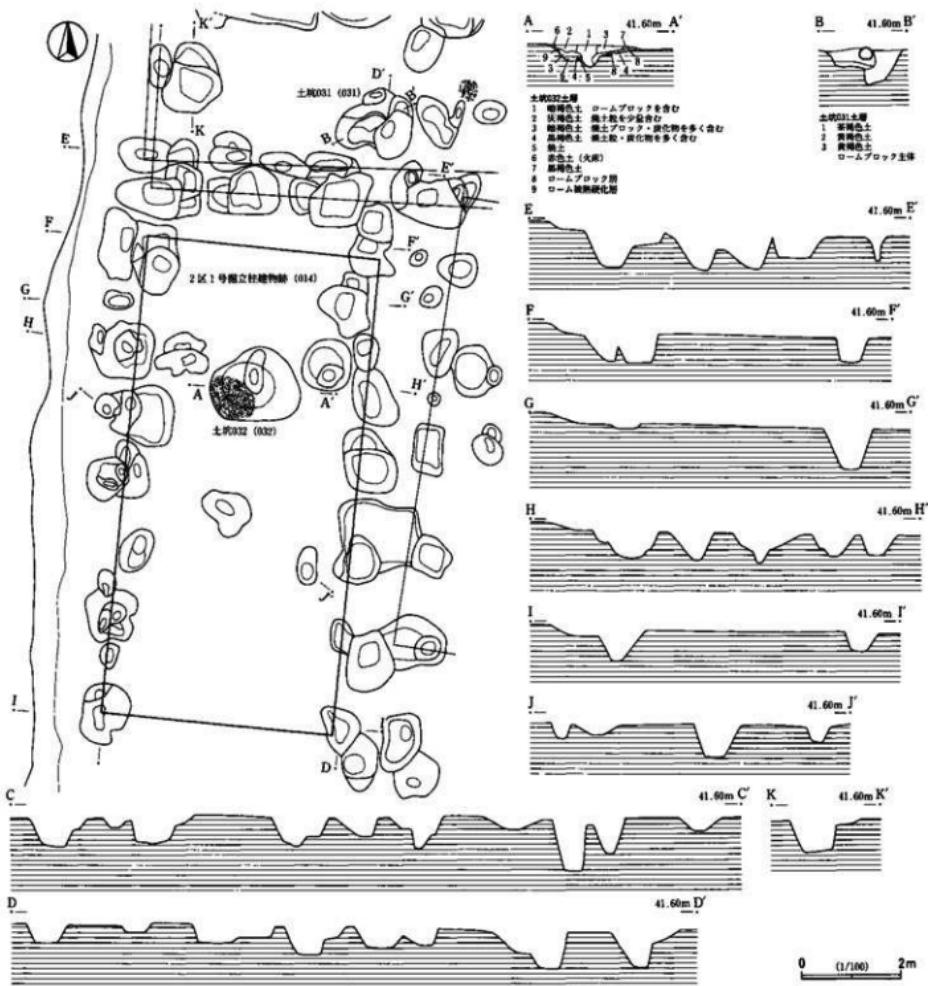
平面形は楕円形で、規模は11.0m×8.3m、深さは0.7mである。底面は皿状で、中央部がくぼむ。覆土は暗褐色土が主体であるので、池跡ではないと考えられる。

#### 2区1号地下式坑（第34図 図版18）

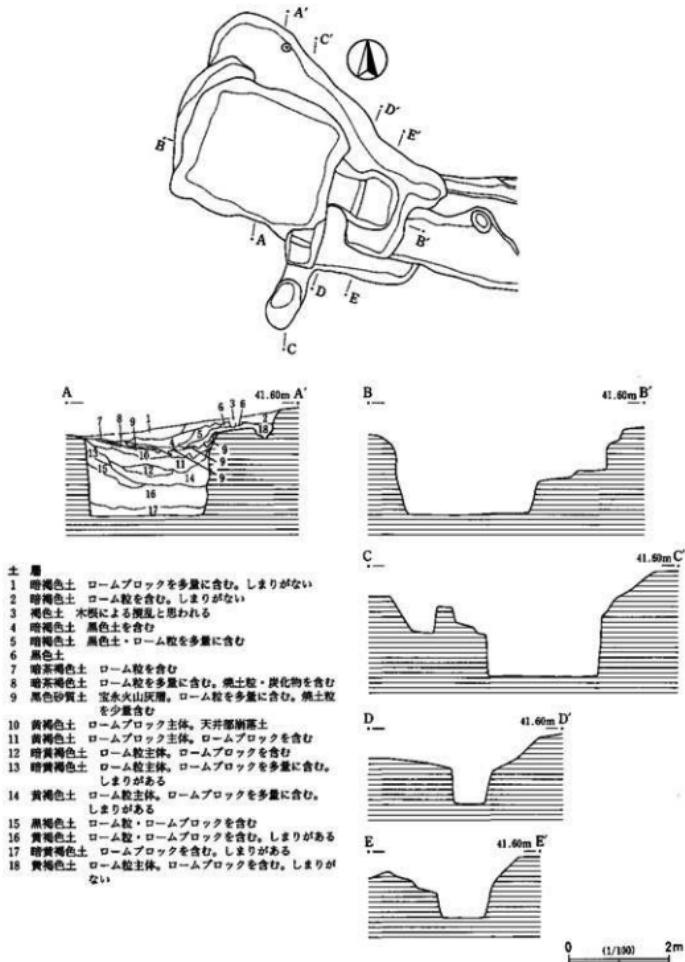
規模は全長5.0mである。主室部分は長さ3.3m、幅2.65m、深さ1.5mである。入口部分は長さ0.9m、幅1.2m、深さ0.7mである。床面は平坦で、壁はほぼ垂直である。入口は東向きで、方向はN-110°-Eである。



第32図 2区中近世遺構配図



第33図 2区1号掘立柱建物跡及び土坑031・032実測図



第34図 2区1号地下式坑実測図

ある。天井部が崩落し、覆土上層部に宝永の火山灰が検出されているが、レンズ状の堆積ではないので、火山灰降灰時には天井が維持されていた可能性がある。

#### 2区2号地下式坑（第32図 国版18）

規模は全長3.4mである。主室部分は長さ2.6m、幅1.6m、深さ1.2mである。入口部分は長さ0.8m、幅1.3m、深さ0.3mである。床面は平坦で、壁はほぼ垂直である。入口は東向きで、方向はN-110°-Eである。2区屋敷地に付属するかは不明瞭である。

#### 2区1号棚列跡（第32図）

検出長は3間、7.9m、棚跡は方形及び楕円形で、大きさは0.7m～1.0m、深さは0.4m～0.8mである。方向はN-85°-Wである。検出状況から建て替えが行なわれたと考えられる。

#### 2区2号棚列跡（第32図）

検出長は4間、7.9m、棚跡は楕円形で、大きさは0.5m～0.9m、深さは0.25m～0.4mである。方向はN-10°-Eである。周辺に土坑があるが、掘立柱建物跡としては成立しないと考えられる。

#### 2区1号溝状遺構（第32図）

検出長は14.7m、幅0.35m～1.87m、深さは0.1m～0.2mである。西へ向かうほど幅が広くなるが、深さは東ほど深い。方向はN-83.5°-Wである。

#### 2区2号溝状遺構（第32図）

検出長は14.7m、幅0.35m～1.87m、深さは0.1m～0.2mである。西へ向かうほど幅が広くなるが、深さは東ほど深い。方向はN-83.5°-Wである。

土坑は多数検出されているが、遺物または焼土が出土している主な土坑は次のとおりである。

#### 土坑010（第32図）

重複土坑である。規模は1.0m×1.4m、深さは0.1m～0.3mである。覆土中に焼土が検出されている。

#### 土坑012（第32図）

2区の南西端部に位置し、西側2/3は調査区外である。平面形は楕円形で、検出長が5.0m、深さは0.25mである。大型の土坑であるので、西側にも遺構が存在する可能性がある。

#### 土坑031（第33図）

2区の北部に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.0m×1.5m、深さは0.4mである。土器の軸がほぼ完形で出土しているので、古墳時代の住居跡が存在した可能性がある。

#### 土坑032（第33図）

2区の北部、1号掘立柱建物跡内に位置する。平面形は楕円形で、規模は1.5m×1.8m、深さは0.5mである。覆土に焼土検出されているので、囲炉裏跡など、1号掘立柱建物跡の付属施設の可能性がある。

#### 土坑058（第32図）

2区の南東部に位置する。平面形は方形で、規模は3.4m×3.9m、深さは0.55mである。底面は平坦で、中央に8号掘立柱建物跡の柱穴がある。

#### 土坑060（第32図）

2区の南東端に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は径0.9m、深さは0.4mである。

#### 2区土坑群（第32図）

1区と2区の中間であるが、2区とした。大小の土坑が検出されているが、屋敷区内に比べてかなり少

ない。平面形は円・梢円・方形である。性格は不明であるが、掘立柱建物跡、柵列跡ではない。

### 3区の遺構（第35図 図版19・20）

3区は東約1/3が調査区外である。1・2区と同様の屋敷地であるが、相違点として屋敷地を囲む土塁が検出されている。遺構は、居住関連遺構として掘立柱建物跡7棟、竪穴状遺構1基、区画遺構として柵列跡2条、土塁、溝状遺構3条である。掘立柱建物跡は7棟検出され、2・3・4号及び5・6号がそれぞれ重複し、柵列跡は1・2号が重複している。土坑が多數検出されているがどちらに所属するかは不明なものが多い。東に向かった緩斜面上にあり、段整形を施して平坦面をつくり、掘立柱建物跡等を配置している。段差は検出面で、0.3mである。屋敷地は北・西・南側が土塁で区画される。東側は調査区外で、斜面になり、土塁状の高まりは確認されなかった。

東向き正面の主屋と考えられる1号掘立柱建物跡中心に、北側に2・3・4号掘立柱建物跡、南側に7号掘立柱建物跡が配置され、主屋の前面の空間が庭的な場所と考えられる。2・3・4号掘立柱建物跡は作業小屋または、廐的な付属屋と考えられる。また、庭を囲むように5・6号掘立柱建物跡が配置されると考えられる。また、1号掘立柱建物跡の前面に1号竪穴状遺構が検出されている。機能は不明であるが、屋敷地に付属する施設と思われる。1号掘立柱建物跡西側に1・2号柵列跡が検出されている。地山の形状から従来は土塁であり、柵列に変更されたと考えられる。

3区の屋敷地では主屋の建て替えはなかったと考えられる。しかし、付属屋、柵列は建て替えが行われ、重複関係として検出されていると考えられる。

以上から、3区の屋敷地は、主屋及び土塁は継続して使用され、北側の付属屋は1または2回ほどの建て替えが行われている。また、主屋西側の土塁は柵列に変更され、柵列も作り替えが行われている。溝状遺構は屋敷地を区画する遺構であるが、外部にも延びているので、外部に延びる部分については道路または道路に伴う溝の可能性がある。

各遺構の規模等は次のとおりである。

#### 3区 1号掘立柱建物跡（第36図）

3区屋敷地の主屋である。規格は2間×5間で、規模は5.4m×9.4mである。柱穴は方形及び梢円形で、大きさは1.0m～1.5mである。深さは0.9m～1.3mである。長軸方向はN-13°-Eである。

#### 3区 2号掘立柱建物跡（第35図）

規格は1間×3間で、規模は3.3m×5.5mである。柱穴は円形及び梢円形で、大きさは0.5m～1.2m、深さは0.4m～0.6mである。長軸方向はN-88°-Eである。

#### 3区 3号掘立柱建物跡（第35図）

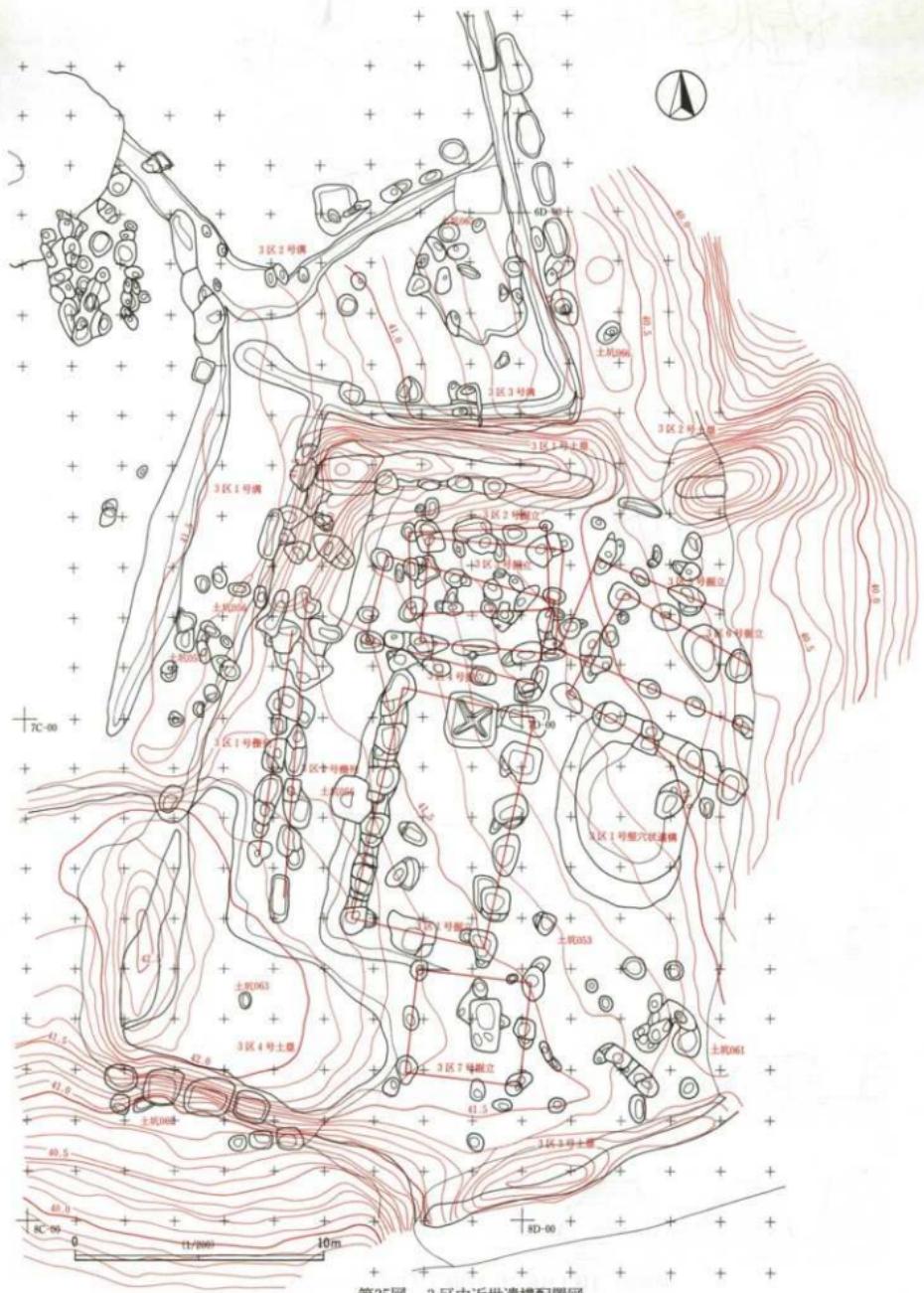
規格は1間×2（3）間で、規模は4.2m×5.5mである。柱穴は梢円形で、大きさは0.4m～0.9m、深さは0.6m～0.8mである。長軸方向はN-95°-Eである。

#### 3区 4号掘立柱建物跡（第35図）

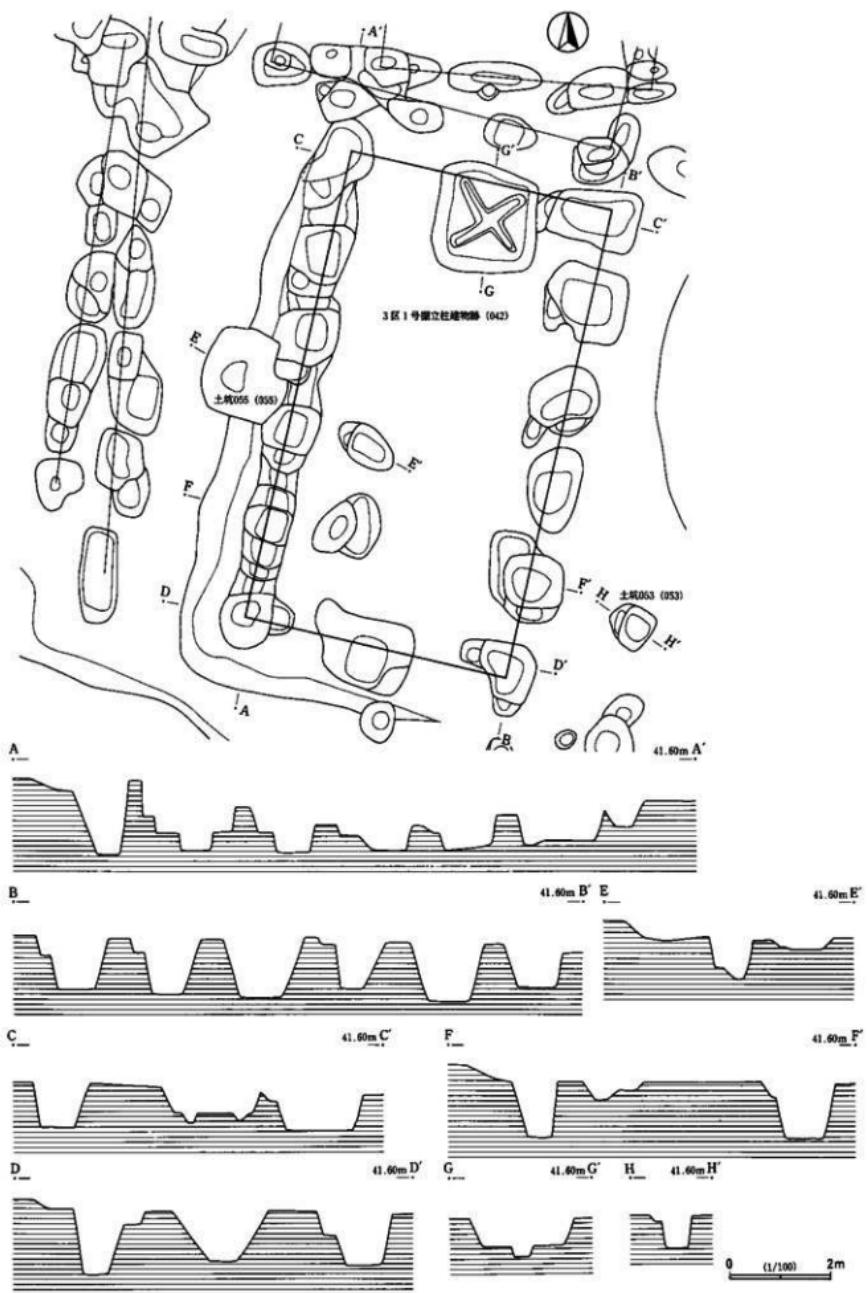
規格は1間×4間で、規模は3.5m×7.0mである。柱穴は梢円形で、大きさは0.7m～1.1m、深さは0.4m～0.7mである。長軸方向はN-104°-Eである。

#### 3区 5号掘立柱建物跡（第35図）

3区の北東部に位置する。6号掘立柱建物跡と重複する。規格は1間×4間（以上）で、規模は3.9m×



第35圖 3区中近世遺構配置図



第36図 3区1号掘立柱建物跡及び土坑053・055実測図

7.7m（以上）である。柱穴は楕円形で、大きさは0.5m～1.5m、深さは0.4m～0.7mである。長軸方向はN-1°-Eである。

### 3区6号掘立柱建物跡（第35図）

規格は2間×4間（以上）で、規模は4.6m×7.5（以上）mである。柱穴は方形及び楕円形で、大きさは0.7m～2.2.0m、深さは0.4m～1.0mである。長軸方向はN-120°-Eである。ほかの掘立柱建物跡の配置から1号竪穴状遺構よりも旧い可能性がある。

### 3区7号掘立柱建物跡（第35図）

規格は1間×2間で、規模は4.6m×4.1mで、2間が短い。柱穴は楕円形で、大きさは0.6m～1.3m、深さは0.5m～0.6mである。長軸方向はN-7°-Eである。南側の土壘が開いている所に位置しているので、門的施設の可能性がある。

### 3区1号竪穴状遺構（第35図）

平面形は楕円形で、規模は7.0m×5.4m、深さは0.55mである。池跡であるかは不明確である。

### 3区1号棚列跡（第35図）

検出長は4間、9.0m、柵跡は方形及び楕円形で、大きさは0.8m～1.0m、深さは0.4m～0.6mである。方向はN-9°-Eである。検出状況から3回以上の建て替えが行われたと考えられる。

### 3区2号棚列跡（第35図）

検出長は4間、9.7m、柵跡は方形及び楕円形で、大きさは0.65m～1.0m、深さは0.5m～0.6mである。方向はN-3.5°-Eである。検出状況から2回以上の建て替えが行われたと考えられる。土壘は3区の掘立柱建物跡を囲むように検出された。全体で一遺構であるが、部分的に途切れているので、北西から時計回りに1・2・3・4号とした。

### 3区1号土壘（第35図）

検出長は12.3m、幅1.9m～2.2m、残存高0.4m～0.6mである。方向はN-95°-Eである。

### 3区2号土壘（第35図）

検出長は2.5m、幅3.4m、残存高0.3m～0.5mである。方向はN-95°-Eである。1号土壘との間に平面形が長楕円形のくぼみが検出された。規模は1.8m×0.5m、深さは0.1mである。木戸的な施設の跡の可能性がある。

### 3区3号土壘（第35図）

検出長は14.1m、幅3.4m～4.0m、残存高は内側で0.5m～0.7mである。南側に傾斜し、区内外の比高差は最大1.4mである。方向はN-76°-Eである。

### 3区4号土壘（第35図）

検出部はL字形で、総長は14.6mである。幅6.0m～7.0m、残存高は内側で0.6mである。区外との比高差は0.9m～1.1mである。

### 3区1号溝状遺構（第35図）

2区と3区を区切る溝である。北端で2号溝状遺構と合流する。検出長は18.0m、幅1.0m～1.9m、深さは0.1m～0.25mである。方向はN-20°-Eである。

### 3区2号溝状遺構（第35図）

2区及び3区の北端に位置する。東端で3号溝状遺構に合流する。検出長は40m、幅0.6m～2.1m、深

さは0.15m～0.3mである。方向は西側1/3がN-80°-W、中央1/3はN-41°-W、東側1/3はN-58°-Eである。

### 3区3号溝状遺構（第35図）

3区の北端に位置する。検出長は30m、幅0.6m～1.0m、深さは0.2m～0.3mである。方向は南側1/3がN-89°-E、北側2/3はN-13.5°-Wである。北側部分の中間で2号溝状遺構が合流する。

土坑が多數検出されているが、遺物が出土している主な土坑は次のとおりである。  
土坑053（第36図）

3区の中央部や南東、1号掘立柱建物跡の東隣に位置する。平面形は方形で、規模は0.6m×0.8m、深さは0.65mである。

### 土坑055（第36図）

3区の中央部、1号掘立柱建物跡の西接している。平面形はほぼ正方形で、規模は一辺1.0m、深さは0.4mである。貝殻（アカニシ、イシガイ）が出土している。

### 土坑056（第35図）

3区の中央部西端に位置する。平面形は橢円形で、規模は0.45m×0.8m、深さは0.2mである。

### 土坑057（第35図）

3区の中央部西端に位置する。平面形は橢円形で、規模は0.8m×0.95m、深さは0.2mである。

### 土坑061（第35図）

3区の南東端に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は径1.1m、深さは0.3mである。

### 土坑062（第35図）

3区の南西端に位置し、4号土壙に接している。平面形は方形で、規模は1.4m×1.5m、深さは0.5mである。

### 土坑063（第35図）

3区の南西端、4号土壙上に位置している。平面形は橢円形で、規模は0.45m×0.6m、深さは0.2mである。貝殻（タニシ）が多量に出土している。

### 土坑064（第35図）

3区の北部に位置する。平面形は橢円形で、規模は0.6m×0.85m、深さは0.4mである。

### 土坑065（第35図）

3区の北部に位置する。平面形は橢円形で、規模は0.6m×0.75m、深さは0.4mである。

### 土坑066（第35図）

3区の北部東端に位置する。平面形は橢円形で、規模は0.6m×0.8m、段があり、深さは0.4m及び0.6mである。

## (2) 遺物

中近世遺構からの出土遺物には、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、鉄製品、銅製品、古錢、石器、石塔類、板碑である。

土師質土器にはカワラケ、土鍋・焙烙がある。

カワラケ（第37図 第10表 図版21）

ここでは、形態から大きく4種類に分類できると考えられる。1・2は奈良・平安時代の土師器クロロ坏に類似するものである。3～6は小型の皿状で、底部が円盤状に小さく突出し、底部と体部との境が薄くなつた特徴がある。7～9は小型の皿状であるが、底部と体部との境が薄くならない。10～19は小型の皿状であるが、底部中央がくぼむ特徴がある。20・21は以上の特徴外のものである。

また、スヌが付着しているものがあるので、食器のほかに灯明具として使用されている。

土鍋・焙烙（第38図 第11表 図版22）

口縁部の形態、内耳があることなど類似した調理用具であるが、器高の高低で分類している。22～25は土鍋、26～28が焙烙である。

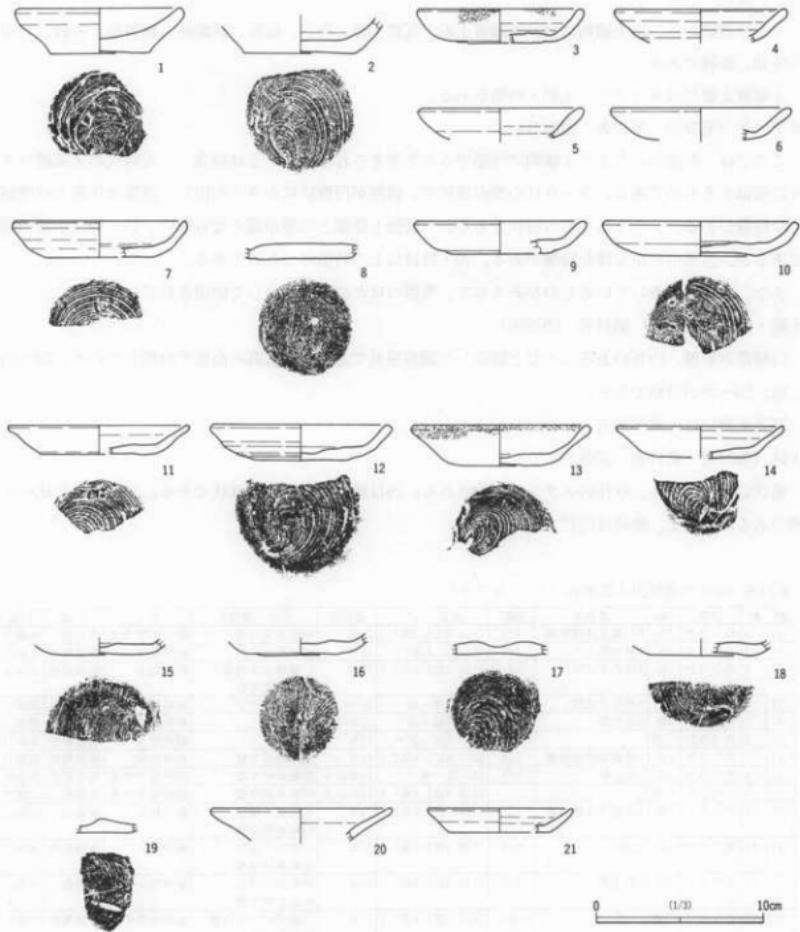
瓦質土器には火鉢がある。

火鉢（第39図 第11表 図版23）

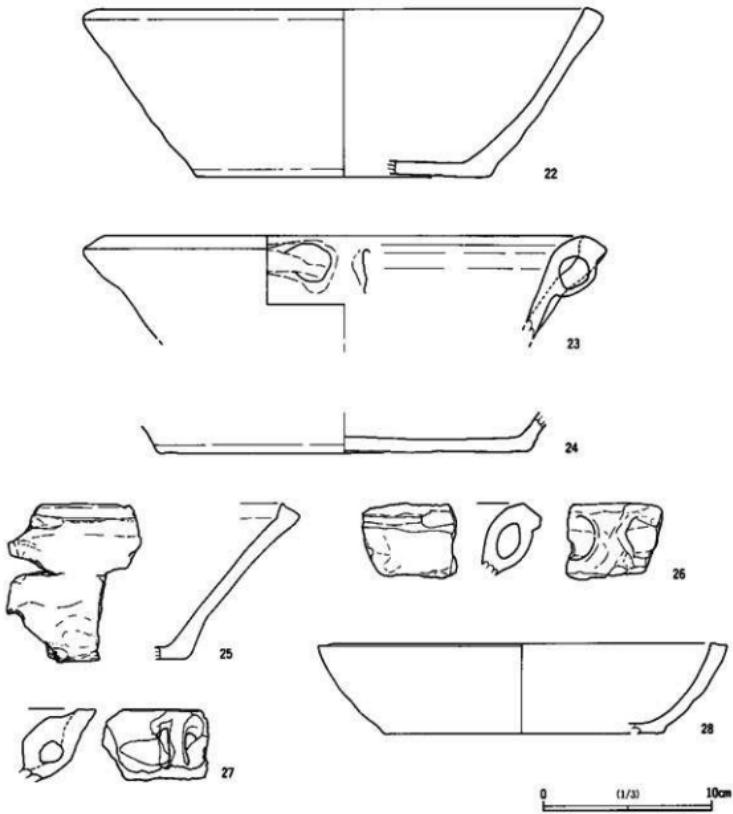
桶状のタガがあり、草花のスタンプが施される。29は底部で、高台が波状である。33はほかに比べて小型であるが、胎土、焼成は同じである。

第10表 中近世遺構出土遺物表（1）（カワラケ）

番号	経年	器種	遺構名	目次番号	法高（cm）	遺存度	成形・調整等	胎土	色調	図版
37	1	カワラケ	2区 6号獨立柱建物跡	029	□10.0底5.8高2.7	30%	回転糸切り痕	細砂粒やや多	赤褐色	図版21
37	2	カワラケ	1区 1号土壇	048	□一底6.8高-	30%	回転糸切り痕	細砂粒少	淡明褐色	図版21
37	3	カワラケ	2区 1号地下式坑	001	□10.0底5.1高2.1	20%	口縁部スス付着 回転糸切り痕	細砂粒少	淡灰褐色	図版21
37	4	カワラケ	2区 1号地下式坑	001	□10.3底-高-	15%	回転ヨコナデ	細砂粒少	淡褐色	図版21
37	5	カワラケ	3区 1号土壇	048	□10.0底-高-	10%		細砂粒少	淡褐色	図版21
37	6	カワラケ	一括		□10.8底-高-	15%		細砂粒少	淡褐色	図版21
37	7	カワラケ	2区 5号獨立柱建物跡	028	□10.4底6.4高2.1	25%	回転糸切り痕	細砂粒少	淡灰褐色	図版21
37	8	カワラケ	3区 1号土壇	048	□一底-高-	10%以下	回転糸切り痕	細砂粒やや多	淡褐色	図版21
37	9	カワラケ	一括		□10.4底6.4高2.1	10%以下	回転糸切り痕	細砂粒やや多	淡褐色	図版21
37	10	カワラケ	2区 5号獨立柱建物跡	028	□11.8底6.6高2.1	25%	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒少	淡褐色	図版21
37	11	カワラケ	2区 土坑010	010	□10.8底5.8高1.7	25%	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒少	淡褐色	図版21
37	12	カワラケ	3区 3号土壇	050	□10.8底5.8高2.1	50%	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒少	明褐色	図版21
37	13	カワラケ	一括		II-3-01 □10.8底5.6高2.4	25%	口縁部にスス付着 中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒やや多	淡灰褐色	図版21
37	14	カワラケ	一括		□10.1底5.9高1.9	20%	回転ヨコナデ 回転糸切り痕	細砂粒少	淡灰褐色	図版21
37	15	カワラケ	1区 3号獨立柱建物跡	015	□一底6.9高-	20%	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒少	淡褐色	図版21
37	16	カワラケ	3区 1号横列跡	043	□一底4.6高-	30%	回転糸切り痕	細砂粒少	淡褐色	図版21
37	17	カワラケ	一括		□一底-高-	10%以下	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒やや多	淡褐色	図版21
37	18	カワラケ	一括		□一底6.4高-	10%以下	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒少	暗灰褐色	図版21
37	19	カワラケ	3区 1号土壇	048	□一底-高-	10%以下	中央がくぼむ 回転糸切り痕	細砂粒やや多	淡褐色	図版21
37	20	カワラケ	一括		□10.8底-高-	10%以下		細砂粒少	淡褐色	図版21
37	21	カワラケ	3区 6号獨立柱建物跡	046	□10.8底5.8高1.4	10%		細砂粒極少	明褐色	図版21



第37図 中近世遺構出土遺物実測図（1）（カワラケ）



第38図 中近世遺構出土遺物実測図（2）（土鍋・焙烙）

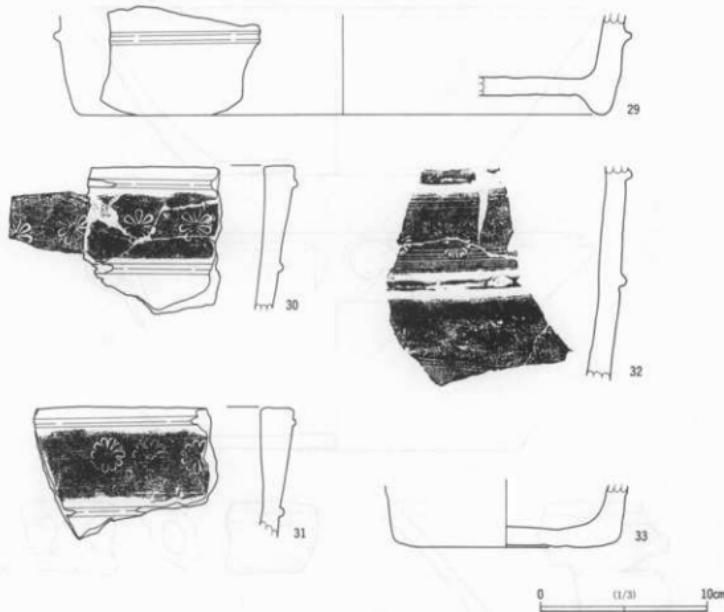
陶器は産地別に、瀬戸・美濃、肥前、京都・信楽系、信楽、志戸呂、堺、常滑がある。主な器種は次のとおりである。時代は16世紀から18世紀であるが、17世紀・18世紀が多数を占めるため、各器種の代表的なものを図示した。

**擂鉢（第40・41図 第12表 図版23・24）**

34～38は瀬戸・美濃産である。口縁部が折り返され、やや受け口状である。錫釉が施される。39は堺である。口縁が厚く、縁帶状になる。

**煙硝壠（第41図 第12表 図版23）**

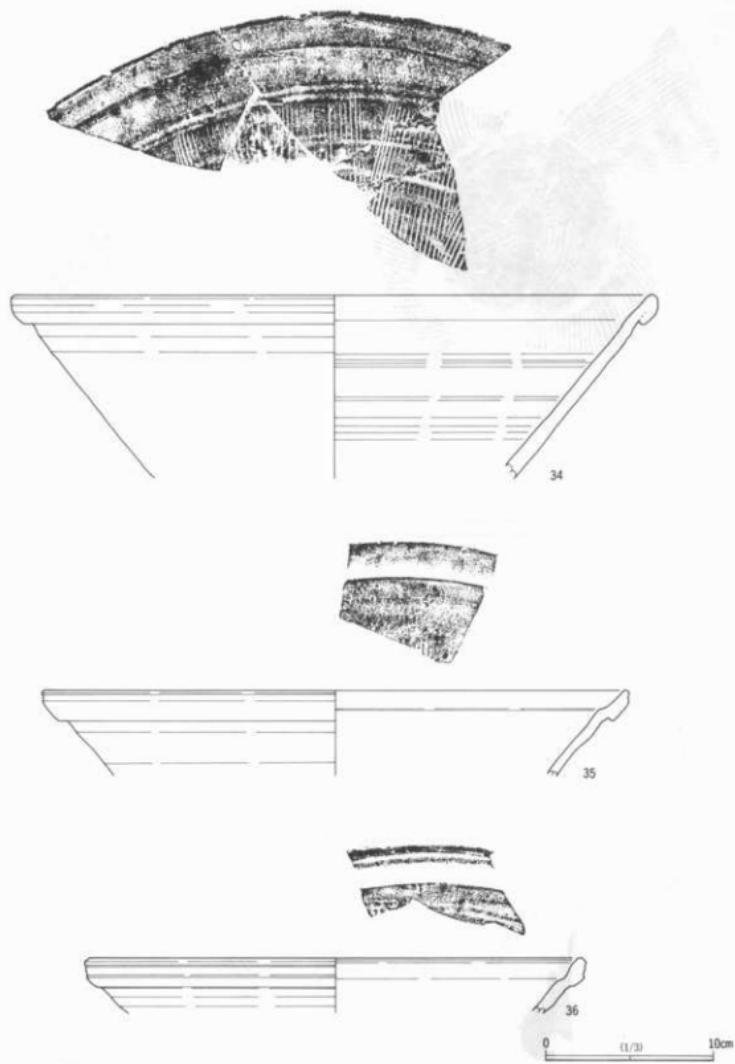
40・41は小型の擂鉢形である。口縁が内側に折り返され玉縁状になる。底部には高台がある。鉄釉が施される。瀬戸・美濃産である。



第39図 中近世遺構出土遺物実測図（3）（火鉢類）

第11表 中近世遺構出土遺物表（2）（土鍋・熔炉・火鉢類）

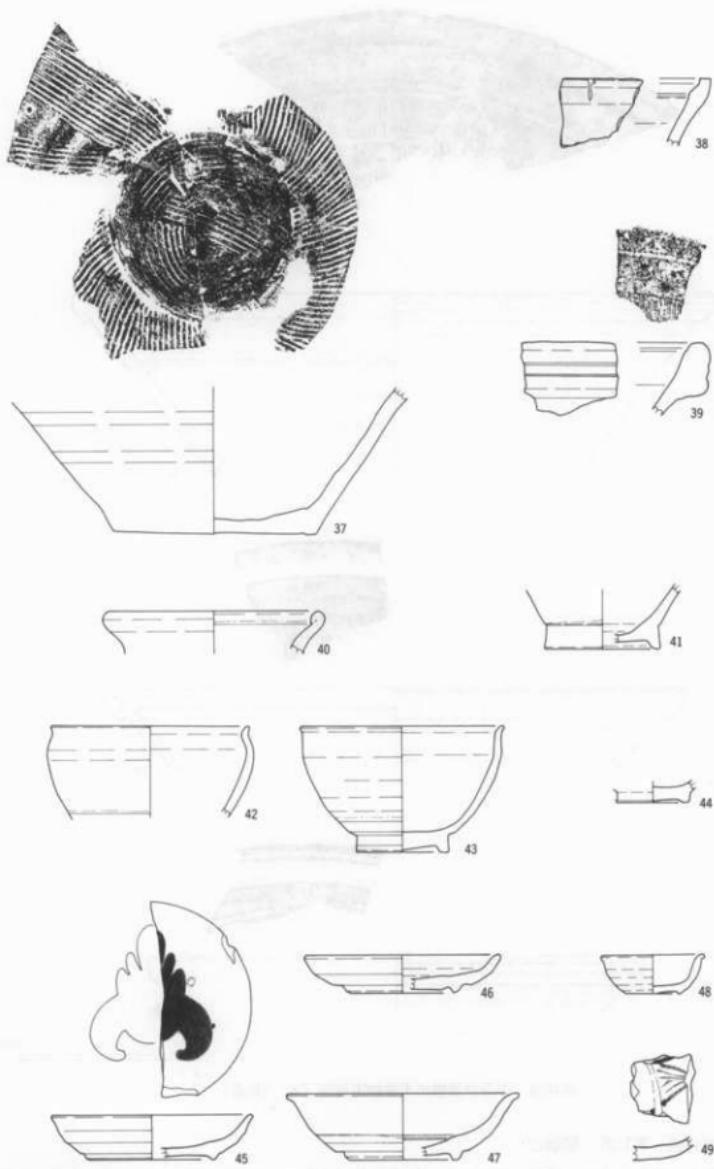
順	編	器種	区	遺構名	翻刻	法量(cm)	遺存度	註・翻刻の備	胎土	色調	図版
38	22	土鍋	1区	グリッド	006	□30.9底17.6高10.0	20%	体部ナデ	細砂粒・粗 雲母粒多	黒褐色	図版22
38	23	内耳土鍋	3区	1号土堀	048	□31.0底－高－	10%以下	内面ナデ	細砂粒・粗 雲母粒多	外面黒褐色 内面淡明褐色	図版22
38	24	土鍋	1区	1号地下式坑	001	口－底22.0高－	10%	内面ナデ	細砂粒・粗 雲母粒多	灰褐色	図版22
38	25	土鍋	3区	1号土堀	048	口－底－高－	10%以下	内面ナデ	細砂粒・粗 雲母粒含	外面暗褐色	図版22
38	26	内耳熔炉	3区	1号土堀	048	口－底－高－	口縁内耳 部片	内面ナデ	細砂粒・粗 雲母粒多	外面黒褐色 内面淡明褐色	図版22
38	27	内耳熔炉	一括		H9-40	口－底－高－	口縁内耳 部片	ナデ	砂粒・雲母 粒多	外面黒褐色 内面明褐色	図版22
38	28	熔炉	一括			□14.3底16.6高5.3	10%以下	体部ナデ	砂粒・雲母 粒多	外面黒褐色 内面明褐色	図版22
39	29	火鉢	1区	グリッド	006	口－底31.4高－	10%以下	タガ状の突帯 高台状の底部	細砂粒多	灰黑色	図版23
39	30	火鉢	1区	1号地下式坑	001	口－底－高－	口縁部片	菊花文のスタンプ タガ状の突帯	砂粒多	黒色	図版23
39	31	火鉢	1区	1号土堀	048	口－底－高－	口縁部片	菊花文のスタンプ タガ状の突帯	砂粒多	黒色	図版23
39	32	火鉢	3区	土坑061	061	口－底－高－	脚部片	菊花文のスタンプ タガ状の突帯 条線状のヨコナデ	細砂粒少	黒褐色	図版23
39	33	火鉢	1区	3号掘立柱遺跡	015	口－底13.4高－	10%以下	内面ナデ	砂質	暗褐色	図版23



第40図 中近世遺構出土遺物実測図（4）(陶器)

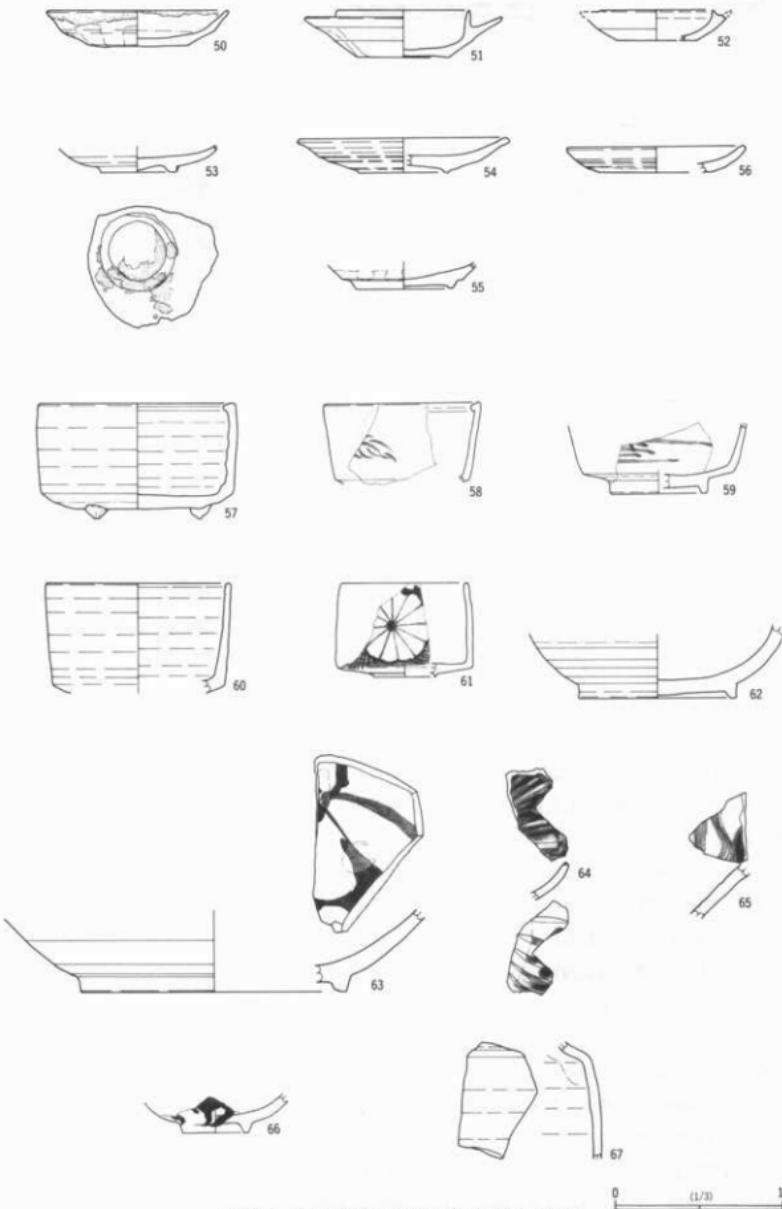
天目茶碗（第41図 第12表 図版23）

42~44である。高台があり、鉄軸が施される。体部は丸みがあり、口縁部は内弯し、口縁部端は外反する。瀬戸・美濃産である。

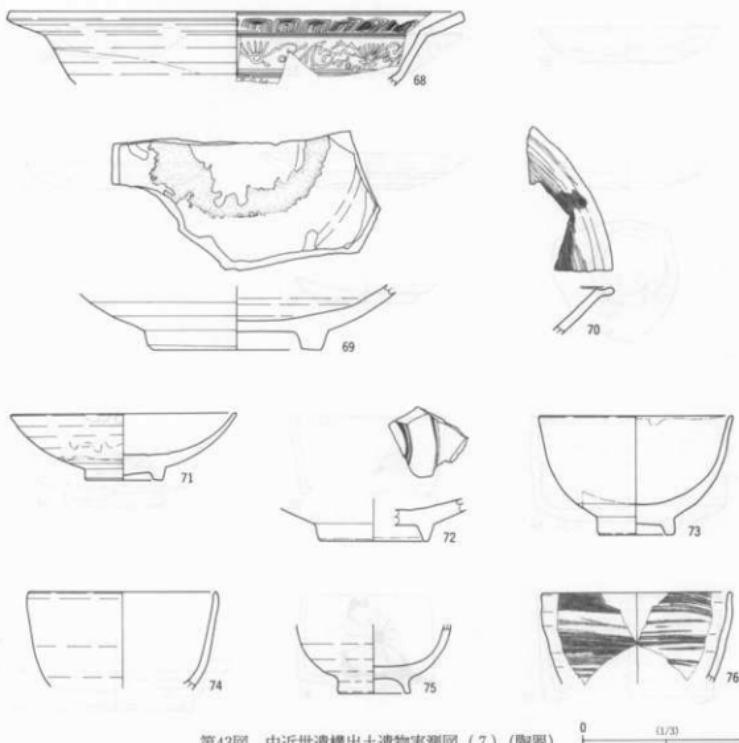


第41図 中近世遺構出土遺物実測図（5）（陶器）

0 (1/3) 10cm



第42図 中近世遺構出土遺物実測図（6）（陶器）



第43図 中近世遺構出土遺物実測図（7）（陶器）

0 (1/3) 10cm

#### 志野類（第41図 第12表 図版24）

45～59である。志野釉を施した陶器である。皿、輪禿皿、小杯がある。45は鉄絵が施される。瀬戸・美濃産である。

#### 灯明皿（第42図 第12表 図版24）

50は志戸呂産の灯明皿、51は志戸呂産の灯明受皿である。52は信楽産の灯明受皿である。50・51には鉄釉、52には灰色灰釉が施される。

#### 皿類（第42図 第12表 図版24）

53～56である。瀬戸・美濃産である。灰釉が施される。53はスヌが付着しているので灯明皿として使用されている。

#### 香炉類（第42図 第12表 図版24）

筒形で、57は瀬戸・美濃産、58・59は京都・信楽系である。57は三足香炉である。内面は無釉である。

#### 筒形碗他（第42図 第12表 図版24）

60・61は筒形碗である。64は織部菊皿である。62は片口鉢の可能性がある。63は笠原鉢である。65は織部釉鉢、66は腰錆小服、67はペコカン徳利である。瀬戸・美濃産である。



第44図 中近世遺構出土遺物実測図(8)(磁器)

0 10cm  
(1/3)

68～76は肥前陶器である。

三島手・刷毛目鉢（第43図 第12表 図版25）

68は三島手鉢である、植物文様を彫り込み、釉により色分けが施される。69・70は刷毛目鉢である。69には重ね焼きの跡がある。

青緑釉皿・碗他（第43図 第12表 図版25）

71は青緑釉皿である。内面に蛇ノ目釉剥ぎが施される。72は蛇ノ目釉剥ぎの鉢である。73は青緑釉碗である。74・75は呉器手碗、76は刷毛目碗である。

磁器は产地別に肥前及び中国である。肥前産は17世紀以降のものであるので、各器種の代表的なものを図示した。

染付碗（第44図 第12表 図版25・26）

77～88は肥前の染付碗である。半球形の体部に、口径に比べて小径の高台が付く。網目文様、草木文様、松竹梅文様等が施される。底部に文字が書かれているものもある（79・84・85・88）。

染付皿（第44図 第12表 図版26）

89は肥前の染付皿である。90は中国産の染付皿である。底部にケズリ痕が明瞭に残る。

徳利・小杯・筒形碗他（第44図 第12表 図版26）

93～95は肥前の小杯である。97・98は肥前の筒形碗である。96は肥前の染付小鉢である。松竹梅文様である。91・92は徳利、99は筒形香炉である。

鉄製品（第45図 第13表 図版26）

100～103は鉄製品である。103は鎌、101・102は刀子、103は釘である。

銅製品（第46図 第14表 図版27）

104～117はキセルである。火皿、雁首、吸口である。118は小柄の柄、119は鉗である。

砥石（第47～52図 第15表 図版27～29）

120～163は砥石である。凸字形と凹字形の2種類に分かれる。出土数は凸字形が34点、凹字形が10点である。

石塔類・板碑（第53図 第15表 図版29）

164・165石塔類の破片である。砥石に転用されている。166・167は板碑である。梵字等は確認されなかった。掘立柱建物跡よりも以前に当地に設置されていたと考えられる。

古錢（第54～56図 第16表 図版30・31）

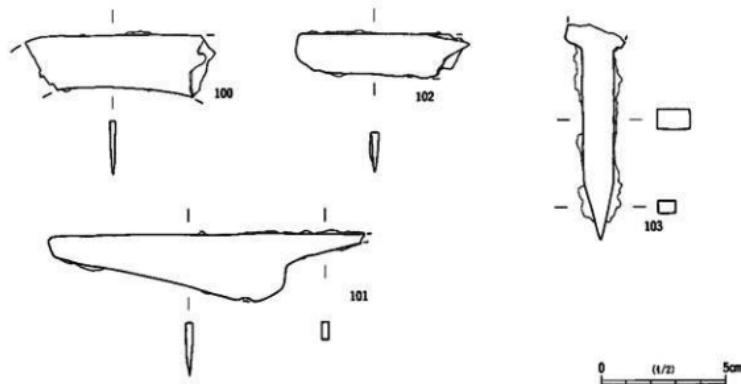
6種48枚出土している。種類は開元通寶、景祐元寶、至和通寶、洪武通寶、永樂通寶、寛永通寶（新寛永）である。

第12表 中近世遺構出土遺物表（3）(陶磁器)

番号	時期	器種	組別	遺構名	組別	產地	時期	法寸 (cm)	體積	文様	胎土	色調	図版
40 34	陶器	壺鉢	1区	1号獨立柱 建物跡	017	瀬戸・ 美濃	17世紀後半 ～18世紀代	口38.4底-高- 以下	10%	織密 砂粒少 黒色粒多	淡黃白色 茶色 網紋	23	
40 35	陶器	壺鉢	1区	2号獨立柱 建物跡	019	瀬戸・ 美濃	17世紀後半 ～18世紀代	口34.9底-高- 以下	10%	織密 砂粒少 黒色粒多	淡黃白色 茶色 網紋	23	
40 36	陶器	壺鉢	3区	1号土壇	048	瀬戸・ 美濃	17世紀後半 ～18世紀代	口29.8底-高- 以下	10%	織密 砂粒少 黒色粒多	淡黃白色 茶色 網紋	23	
41 37	陶器	壺鉢	3区	1号溝状造 構	036	瀬戸・ 美濃	17世紀後半 ～18世紀代	口-底12.0高- 破片	20%	織密 砂粒少 黒色粒多	淡黃白色 喰褐 色網紋	24	
41 38	陶器	壺鉢	3区	土坑062	082	瀬戸・ 美濃	16世紀代	口-底-高- 破片	10%	織密 砂粒少	淡黃白色 黑褐 色網紋	23	
41 39	陶器	壺鉢	3区	土坑062	082	堀	18世紀後半	口-底-高- 破片	10%	織密 砂粒多	暗褐色	23	
41 40	陶器	埋硝壺	1区	1号溝状造 構	022	瀬戸・ 美濃	17世紀代	口13.2底-高- 以下	10%	織密 砂粒微 量	淡黃白色 茶色 網紋	23	
41 41	陶器	埋硝壺	2区	土坑003	003	瀬戸・ 美濃	17世紀代	口-底6.9高- 以下	10%	織密 砂粒少	黃白色 外面黑 褐色	23	
41 42	陶器	天目茶碗	2区	2号地下式 坑	059	瀬戸・ 美濃	17世紀前半	口11.9底-高- 破片	10%	織密 細砂粒 少	淡黃白色 茶褐 色釉	23	
41 43	陶器	天目茶碗	1-2			瀬戸・ 美濃	17世紀前半 高1.4	口12.2底5.6 高1.4	25%	織密 砂粒少 黑色細粒やや 多	灰白色 黑褐色 网纹	23	
41 44	陶器	天目茶碗	3区	土坑054	054	瀬戸・ 美濃	16世紀後半	口-底4.4高- 破片	10%	織密 砂粒少	淡黃白色 喰茶 色釉	23	
41 45	陶器	志野焼 皿	3区	グリッド	ED-83	瀬戸・ 美濃	17世紀第2 四半期	口12.0底7.4 高2.6	40%	密 黑色細粒 少	淡黃白色 褐色和文様(藤 竹文) 透明釉	24	
41 46	陶器	志野風	3区	1号土壇	048	瀬戸・ 美濃	16世紀末～ 17世紀代	口11.8底6.8 高2.1	30%	密 砂粒少	灰褐色 灰色半 透明釉	24	
41 47	陶器	志野輪壳	3区	1号土壘	048	瀬戸・ 美濃	17世紀代	口14.0底6.4 高3.9	30%	密	淡灰褐色 深綠 色半透明釉	24	
41 48	陶器	志野小杯	3区	1号土壘	048	瀬戸・ 美濃	16世紀末～ 17世紀代	口14.2底3.3 高2.3	100%	密 黑色粒多 少	灰色 透明釉	24	
41 49	陶器	志野向付	1-2			瀬戸・ 美濃	17世紀後半	口-底-高- 以下	10%	変形皿 密	黃白色 橙褐色 文様 乳白色半 透明釉	24	
42 50	陶器	灯明皿	3区	1号土壘	048	志戸呂	17世紀末～ 18世紀代	口10.8底6.0 高2.1	50%	織密 細砂粒 少 黑色細粒少	海色(断面暗灰 色) 喰褐色釉	24	
42 51	陶器	灯明受皿	3区	1号土壘	048	志戸呂	17世紀末～ 18世紀代	口11.8底5.4 高2.8 受部径8.0	70%	密 砂粒やや 多	茶褐色 喰褐色 釉	24	
42 52	陶器	灯明受皿	2区	8号獨立柱 建物跡	034	信楽	19世紀前半	口-底4.6高- 以下	10%	織密	灰色 内面透明 釉	24	
42 53	陶器	小皿	1区	グリッド	006	瀬戸・ 美濃	16世紀後半	口-底4.5高- 破片	20%	織密 砂粒少 黒色細粒多	淡灰色 绿褐色 网纹	24	
42 54	陶器	灰輪小皿	3区	1号土壘	048	瀬戸・ 美濃	17世紀代	口12.6底5.4 高2.1	20%	織密 砂粒・ 黒色粒少	灰色 绿褐色透 明釉	24	
42 55	陶器	灰輪丸皿	3区	1号土壘	048	瀬戸・ 美濃	17世紀代	口-底5.8高- 破片	20%	密	淡黃白色 灰白 色半透明釉	24	
42 56	陶器	灰輪小皿	1区	グリッド	006	瀬戸・ 美濃	16世紀代	口10.6底6.9 高1.6	30%	織密 砂粒少 灰色	淡灰褐色	24	
42 57	陶器	三足香炉	2区	1号地下式 坑	001	瀬戸・ 美濃	17世紀後半 高5.7	口11.7底7.5 高5.7	30%	織密 砂粒少 灰色	淡灰綠 色透明釉	24	
42 58	陶器	香炉	1-2			瀬戸・ 美濃	17世紀末～ 18世紀代	口13.6底-高- 以下	10%	織密	淡黃白色 淡灰 色和文様 淡灰 色透明釉	24	
42 59	陶器	香炉	1-2			肥前 京焼風	17世紀後半	口-底5.8高- 破片	20%	織密 きめが 細かい	黃白色 喰灰色 乳白色半 透明釉	24	

組	番号	時期	器種	断面	遺跡名	鉢形	底地	時期	法 直 (cm)	容積	文様	胎土	色調	回版
42	60	陶器	南形碗	2区	土坑003	003	廻戸・美濃	17世紀前半	口11.0底-高-	10%		緻密 砂少	淡黃白色 茶葉 色雜	回版 24
42	61	陶器	南形碗	3区	グリッド	7D-41	廻戸・美濃	18世紀後半	口7.3底3.6 高5.5	20%	菊花文 様	非常に緻密	灰色 青色輪文 様 透明物	回版 24
42	62	陶器	鉢	3区	1号唐伏造 鍋	036	廻戸・美濃	17世紀後半	口-底9.4高-	25%		緻密 砂粒や 十多	淡黃白色 成黃 白色半透明物	回版 24
42	63	陶器	笠原鉢	1区	グリッド	006	廻戸・美濃	17世紀代	口-底15.7高- 以下	10%	無	緻密	灰褐色 灰綠色 雜	回版 24
42	64	陶器	縦部菊皿	3区	1号廻立柱 建物跡	042	廻戸・美濃	17世紀後半	口-底-高- 以下	10%		緻密 砂粒少	淡黃白色 淡灰 綠色透明物に混 綠色雜	回版 24
42	65	陶器	縦部物鉢	2区	1号廻列跡	033	廻戸・美濃	17世紀代	口-底-高-	破片		緻密 砂粒や 十多	淡黃白色 淡灰 綠色透明物に混 綠色雜	回版 24
42	66	陶器	腹縫小皿	3区	1号土型	048	廻戸・美濃	18世紀代	口-底3.8高- 以下	10%		緻密 砂粒少	灰色 内面灰綠 色透明物 外面 全灰褐色雜、部 分の二重緑色雜	回版 24
42	67	陶器	ベコカン 鉢	3区	土坑055	055	廻戸・美濃	18世紀後半 ～19世紀前半	口-底-高-	破片		緻密 黑色細 粒微量	灰褐褐色 外面 茶褐色雜	回版 24
43	68	陶器	三島手鉢	3区	1号土型	048	肥前	17世紀後半 ～18世紀代	口17.4底-高-	10%	三島手	緻密 細砂粒 ・黑色微細粒少	淡珠褐色 内面 乳白色輪文様 透明物	回版 25
43	69	陶器	刷毛目鉢	1区	グリッド	006	肥前	17世紀後半 ～18世紀代	口-底10.0高- 以下	15%	刷毛目	緻密 細砂粒 や多く	暗茶褐色 輪紋 色雜に乳白色輪 文様	回版 25
43	70	陶器	刷毛目鉢	一括			肥前	17世紀後半 ～18世紀代	口-底-高-	破片	刷毛目	緻密 黑色及 び白色微細粒少	暗褐色 白色雜 輪紋波状文 部 分的に褐色雜 全体に透明物	回版 25
43	71	陶器	青緑物皿	1区	1号地下式 坑	020	肥前	17世紀後半 (18世紀前 半)	口13.5底4.5 高4.0	90%	蛇ノ目 独刺ぎ	緻密	淡灰褐色 内面 邊灰綠色雜 外 面灰綠色半透 明物	回版 25
43	72	陶器	灰釉皿	3区	1号土型	048	肥前	17世紀後半	口-底6.4高- 以下	10%	蛇ノ目 独刺ぎ	緻密	淡灰褐色 白色半 透明物	回版 25
43	73	陶器	碗	2区	土坑003	003	肥前	17世紀後半 ～18世紀前 半	口11.6底4.6 高7.0	40%			淡灰褐色 外面 及び内面縦條 波紋色雜	回版 25
43	74	陶器	瓦器手碗	1区	土坑003	003	肥前	17世紀後半	口11.4底-高-	10%		緻密	淡珠灰褐色 瓦 綠色透明物	回版 25
43	75	陶器	瓦器手碗	3区	1号土型	048	肥前	17世紀後半	口-底4.4高- 以下	25%		緻密 砂粒・ 黑色細粒少	淡黃白色 淡灰 綠色透明物	回版 25
43	76	陶器	刷毛目皿	2区	1号廻立柱 建物跡	014	肥前	17世紀～ 18世紀前半	口11.4底-高- 以下	10%		緻密	灰褐色 白色雜 透明物	回版 25
44	77	磁器	染付碗	一括		H13-03	肥前	1640～1650 年代	口-底4.1高- 以下	20%		非常に緻密 黒色細粒少	淡灰白色、暗灰 綠色波状文 乳 白色半透明物	回版 25
44	78	磁器	染付碗	2区	1号廻立柱 建物跡	014	肥前	1640～1650 年代	口12.2底-高-	20%	一重模 目 草文	非常に緻密 黒色細粒ごく 少	暗灰色、灰青色 輪文様、透明物	回版 25
44	79	磁器	染付碗	3区	1号土型	048	肥前	1670～1680 年代	口-底5.0高- 以下	10%	「宜明」 草文	非常に緻密 黒色微細粒や 十多	白色 青色輪文 様 透明物	回版 25
44	80	磁器	染付碗	3区	1号土型	048	肥前	17世紀後半 ～18世紀前 半	口10.6底- 高5.7	30%		非常に緻密	白色、青色輪文 様、透明物	回版 25

番号	測定番号	器種	測定名	測定年	産地	時期	法寸 (cm)	割合	文様	胎土	色調	図版
44	81	磁器	染付碗	1区 土坑003	003	肥前	17世紀末～ 18世紀初	口9.9底4.0 高5.9	40% 鉢剥ぎ	非常に緻密	淡黄白色、青色 釉文様、乳白色半透明釉	図版 25
44	82	磁器	染付碗	1区 1号掘立柱 建物跡	017	肥前	17世紀末～ 18世紀初	口底4.3高～ 15%	草花文	非常に緻密	白色、青色釉文 様、やや青味のある透明釉	図版 25
44	83	磁器	染付碗	1区 1号掘立柱 建物跡	014	肥前	17世紀末～ 18世紀前半	口底4.3高～ 15%		非常に緻密 黒色細粒を微 量	灰白色、青色釉 文様、透明釉	図版 25
44	84	磁器	染付碗	1区 1号唐状建 物跡	036	肥前	17世紀末～ 18世紀前半	口底4.4高～ 15%	大明年 款	非常に緻密	灰白色、青色釉 文様、透明釉	図版 25
44	85	磁器	染付碗	1号土壠	048	肥前	18世紀代	口底4.2高～ 30%		非常に緻密	灰白色、青色釉 文様、透明釉	図版 25
44	86	磁器	染付碗	一括		肥前	18世紀代	口底11.0高～ 10% 以下		非常に緻密	灰白色、青色釉 文様、透明釉	図版 25
44	87	磁器	染付碗	2区 土坑012	012	肥前	18世紀第4 四半期	口底-高～ 10%	愛宕文 字文様	非常に緻密	白色、青色釉文 様、透明釉	図版 25
44	88	磁器	染付碗	2区 1号地下式 坑	001	肥前	1660年代	口7.4底2.9 高4.4	30% 太明	非常に緻密 黒色細粒微量	灰白色、青色釉 文様、透明釉	図版 25
44	89	磁器	染付皿	1区 グリッド	006	肥前	17世紀後半 ～18世紀前半	口13.2底4.6 高3.7	50% 鉢ノ目 鉢剥ぎ 梅枝文	非常に緻密 黒色細粒少 量	灰白色、青色釉 文様、青白色半 透明釉	図版 26
44	90	磁器	染付皿	2区 1号掘立柱 建物跡	014	中国產	17世紀前半	口13.0底7.2 高2.8	50% 人物文 様 口縁内 変形文 字文	非常に緻密 黒色細粒微量	白色、青色釉文 様、半透明釉	図版 26
44	91	磁器	小杯	3区 1号掘立柱 建物跡	042	肥前	17世紀末～ 18世紀初	口6.6底2.7 高4.4	89% コンニ ヤク判	非常に緻密 黒色細粒微量	灰色、青灰色釉 文様、透明釉	図版 26
44	92	磁器	小杯	一括	CT	肥前	18世紀代	口6.9-底2.8 高4.1	95%	非常に緻密 黒色細粒少	灰色、灰緑色釉 文様、透明釉	図版 25
44	93	磁器	小杯	一括		肥前	17世紀後半	口13.4底-高- 40%	草花文	非常に緻密 黒色微細粒少	灰白色、青色釉 文様、透明釉	図版 25
44	94	磁器	染付小鉢	3区 1号土壠	048	肥前	18世紀前半	口9.3底-高- 70%	松竹梅 文様	非常に緻密	白色、青色釉文 様、透明釉	図版 26
44	95	磁器	筒形瓶	3区 土坑055	055	肥前	18世紀後半	口6.6底-高- 20%		非常に緻密 黒色微細粒微量	白色、青色釉文 様、透明釉	図版 26
44	96	磁器	筒形瓶	3区 土坑055	055	肥前	18世紀後半	口7.3底-高- 10%		非常に緻密	白色、青色釉文 様、やや青味が ある透明釉	図版 25
44	97	磁器	香炉	3区 1号掘立柱 建物跡	042	肥前	17世紀後半	口10.0底-高- 10% 以下	ルリ物 鉢	非常に緻密 黒色微細粒少 量	白色、口縁部青 色釉、体部褐色	図版 26
44	98	磁器	德利	一括		肥前	17世紀後半	口-底4.5高- 10%		非常に緻密 黒色微細粒微量	灰色、透明釉	図版 25
44	99	磁器	染付德利	2区 1号掘立柱 建物跡	014	肥前	18世紀後半	口-底-高- 破片		非常に緻密	灰色、暗灰色釉 文様、乳白色半 透明釉	図版 26



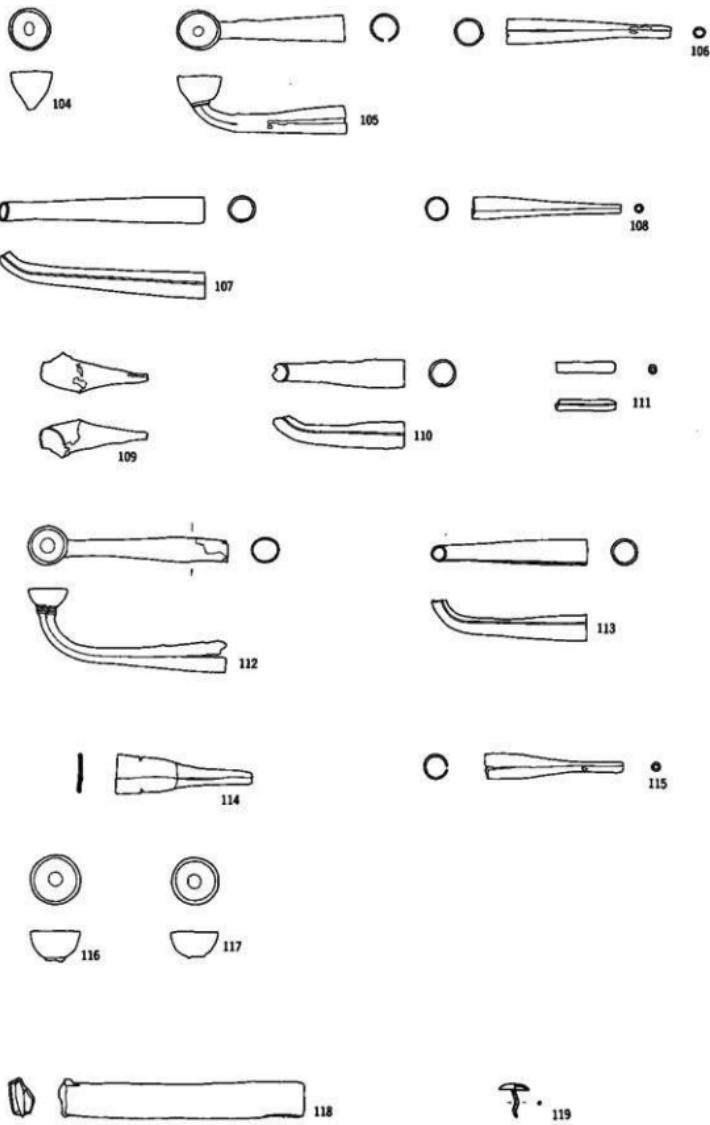
第45図 中近世遺構出土遺物実測図（9）（鉄製品）

第13表 中近世遺構出土遺物表（4）（鉄製品）

種	番号	形	堆	部位	遺物名	遺物番号	法 幅 (cm)	遺存度	備 考
45	100	鐵	1区	グリッド		006	長7.6幅2.1厚0.15重10.9g	20%	刃部の遺存。
45	101	刀子	2区	1号掘立柱遺物跡		014	長12.7幅2.7厚0.3重24.8g	90%	
45	102	刀子	2区	土坑003		003	長7.0幅1.3厚0.3重14.4g	20%	刃部の遺存。
45	103	刃	3区	5号掘立柱遺物跡		045	長8.6幅1.3厚0.5重43.6g	80%	

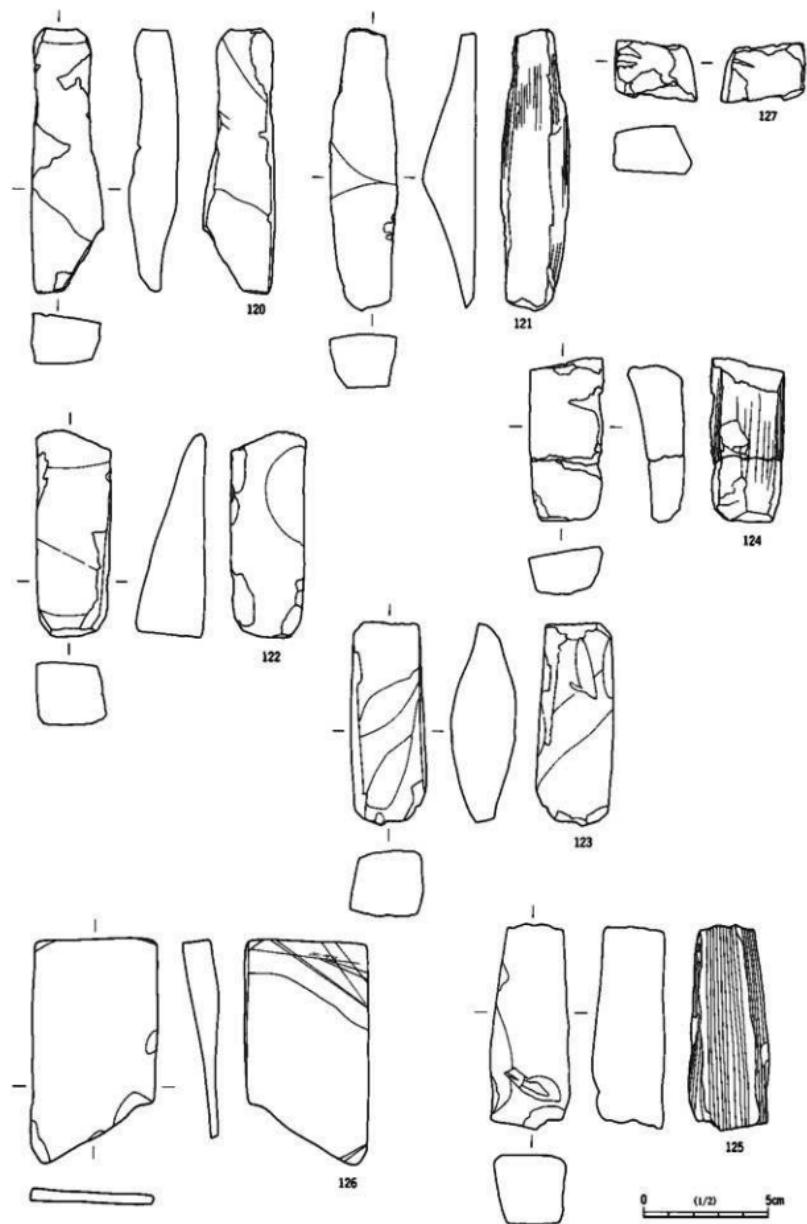
第14表 中近世遺構出土遺物表（5）（銅製品）

種	番号	形	堆	部位	遺物名	遺物番号	法 幅 (cm)	材 質	備 考
46	104	キセル	火照	2区	1号地下式坑	001	直径1.6幅高1.5厚0.05重3.9g	銅製	
46	105	キセル	雁首	3区	1号掘立柱遺物跡	042	長7.6幅2.5径1.1厚0.05火照径1.55×1.7火照 高1.0重9.4g	銅製	
46	106	キセル	張口	3区	1号掘立柱遺物跡	042	長7.6幅0.4~1.1厚0.05重6.5g	銅製	
46	107	キセル	雁首	3区	1号掘立柱遺物跡	042	長8.2幅0.05厚0.1重8.5g	銅製	火照欠。
46	108	キセル	張口	3区	1号掘立柱遺物跡	042	長5.9幅0.6~0.8厚0.05重4.0g	銅製	
46	109	キセル	張口	3区	1号掘立柱遺物跡	042	長4.3幅2.2g	銅製	つぶれている。
46	110	キセル	雁首	3区	5号掘立柱遺物跡	045	長5.3幅0.05厚0.1重5.3g	銅製	火照欠。
46	111	キセル	張口	3区	5号掘立柱遺物跡	045	長2.4幅0.4厚0.1重0.7g	銅製	
46	112	キセル	雁首	3区	6号掘立柱遺物跡	046	長7.9幅3.5径1.0厚0.05火照径1.5火照高0.9 重8.0g	銅製	
46	113	キセル	雁首	3区	7号掘立柱遺物跡	047	長6.2幅0.0厚0.08重5.7g	銅製	火照欠。
46	114	牛ゼル	張口	3区	7号掘立柱遺物跡	047	長5.4幅0.05厚0.24g	銅製	つぶれている。
46	115	牛ゼル	張口	3区	土坑055	055	長5.6幅0.3~1.0厚0.08重3.5g	銅製	
46	116	牛ゼル	火照	3区	土坑061	061	直径2.0厚0.15重5.0g	銅製	
46	117	キセル	火照	一括			直径1.85厚0.13重2.8g	銅製	
46	118	小柄	柄部	3区	1号掘立柱遺物跡	042	長10.7幅1.5重24.3g	銅製	内部に刃身部が残る。
46	119	丸紙		3区	1号掘立柱遺物跡	042	長1.1径1.2重0.8g	銅製	

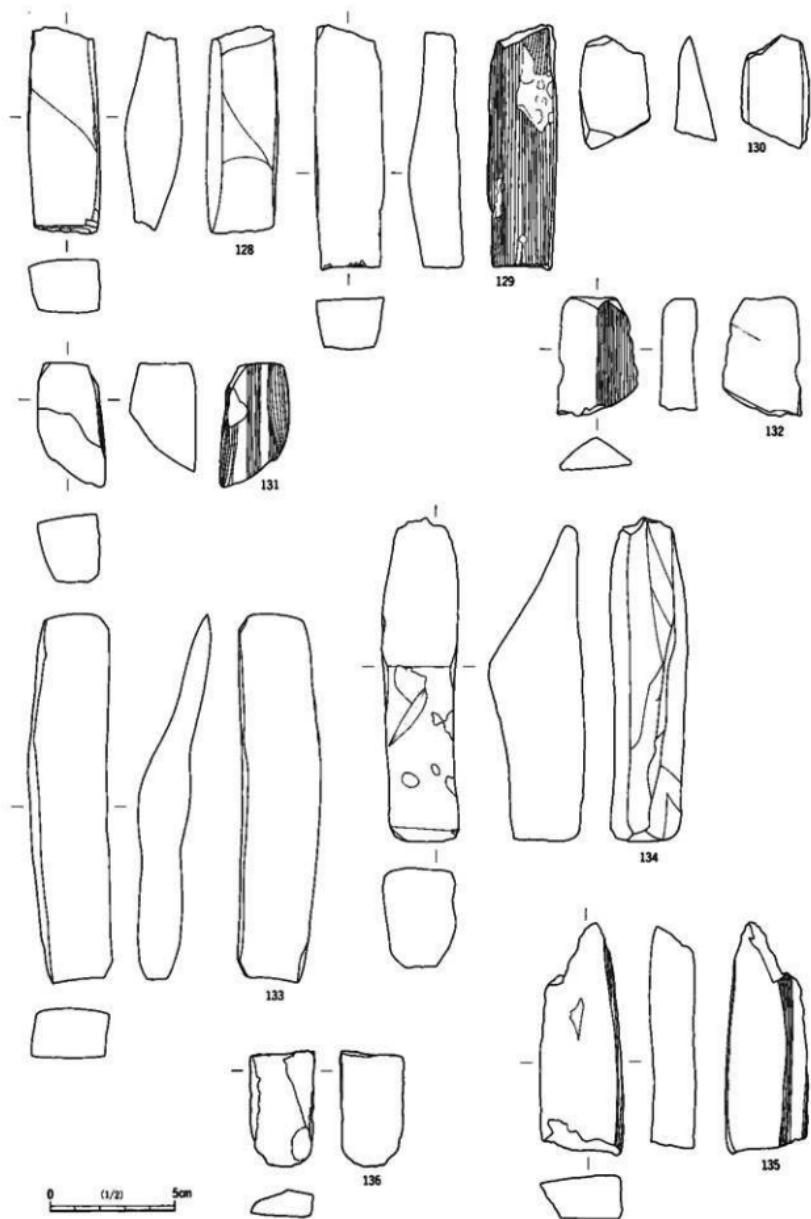


第46図 中近世遺構出土遺物実測図(10) (銅製品)

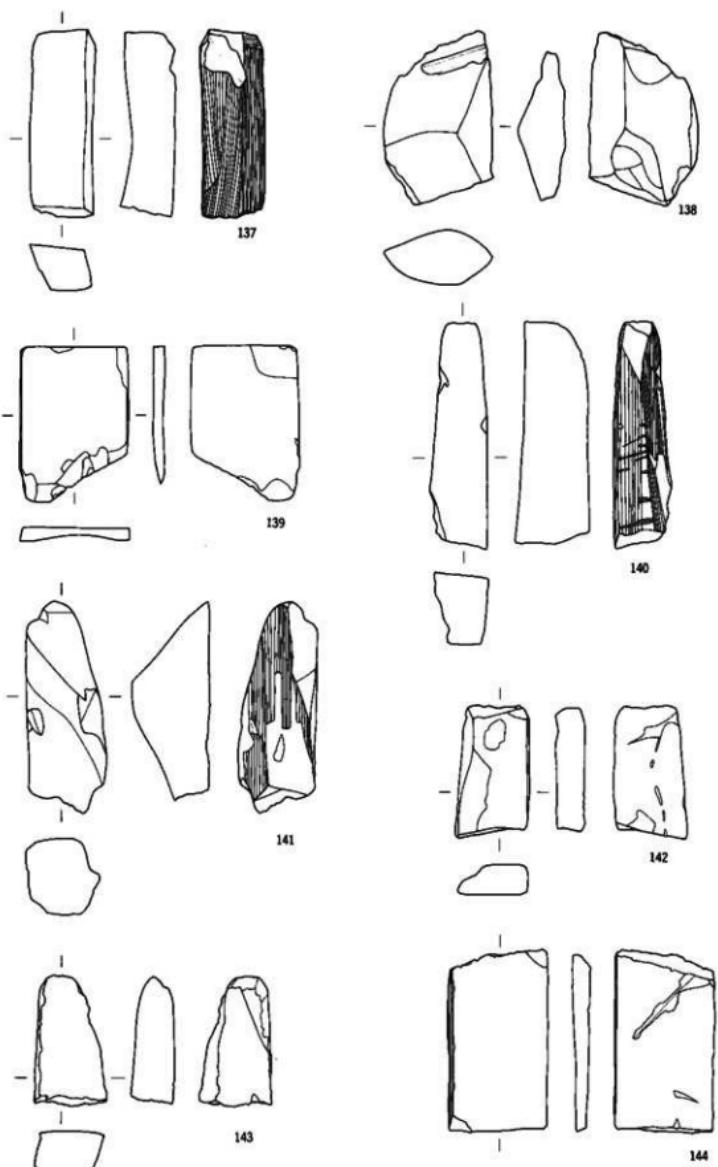
0 5cm  
(1/2)



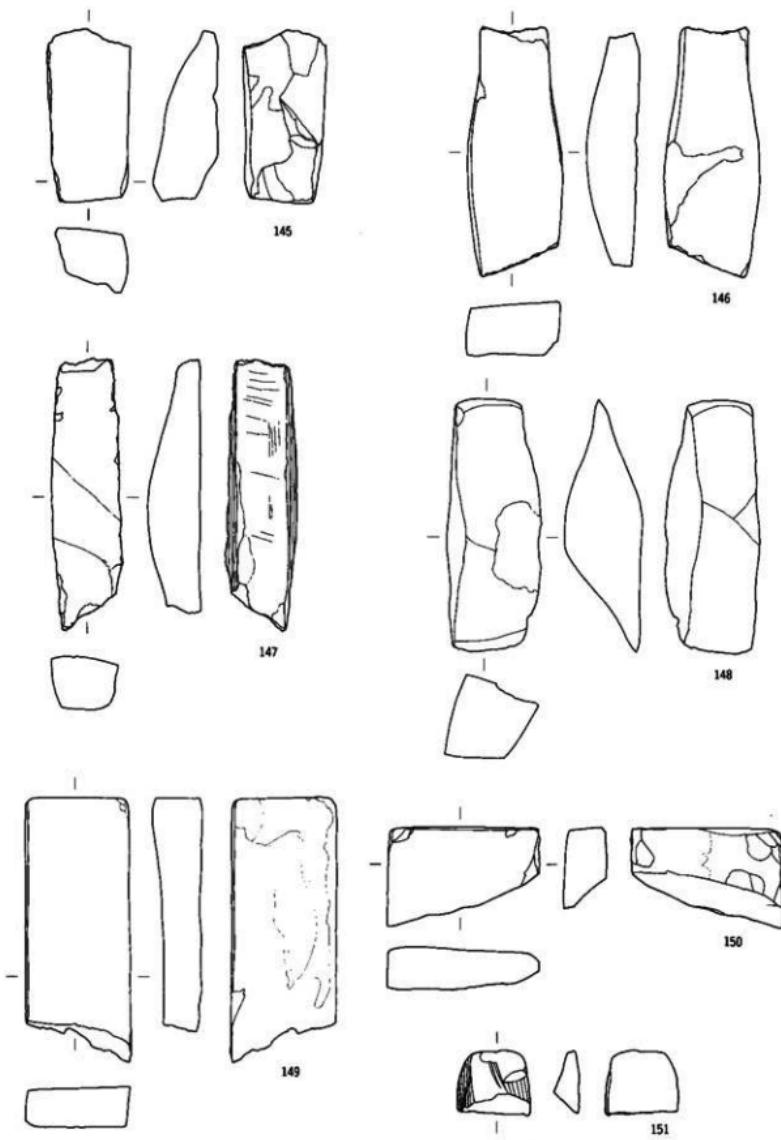
第47図 中近世遺構出土遺物実測図(11)(砥石)



第48図 中近世遺構出土遺物実測図(12) (砥石)

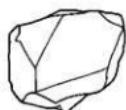
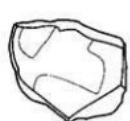


第49圖 中近世遺構出土遺物夾測圖 (13) (砾石)



第50図 中近世遺構出土遺物実測図 (14) (砥石)

0 (1/2) 5cm



152



153



154



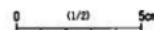
155



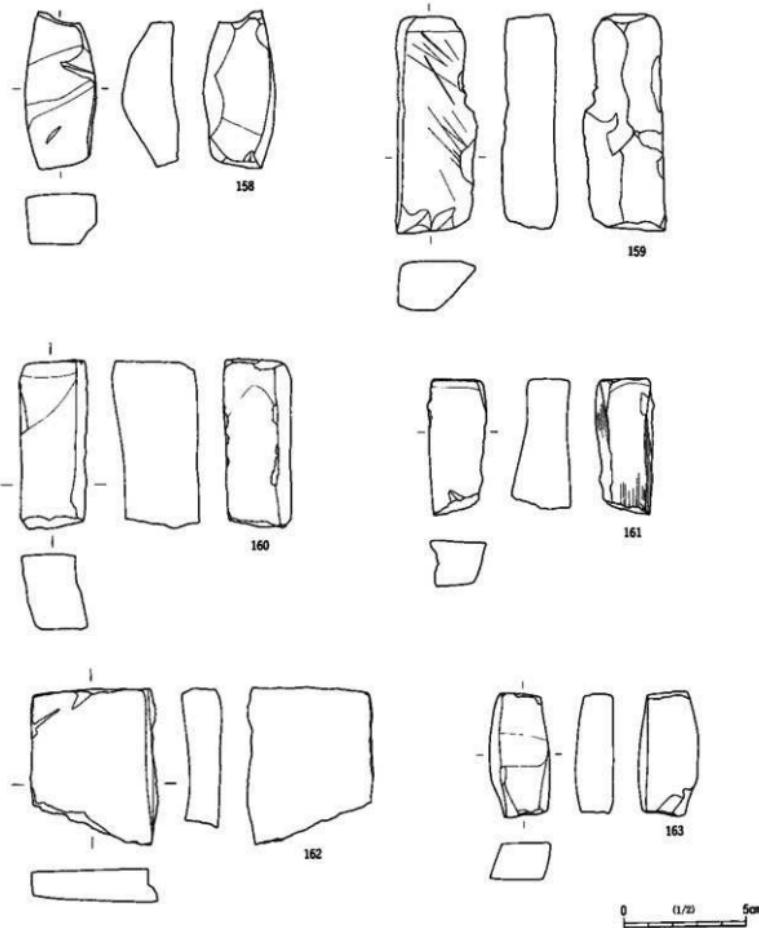
157



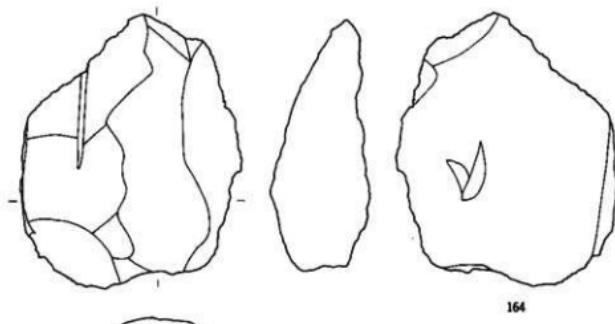
156



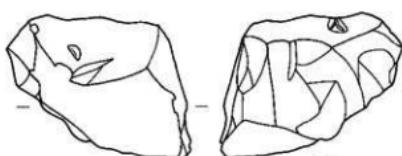
第51図 中近世遺構出土遺物実測図(15)(砥石)



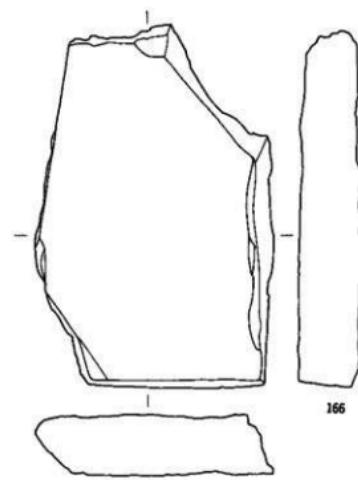
第52図 中近世遺構出土遺物実測図(16)(底石)



164



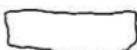
165



166



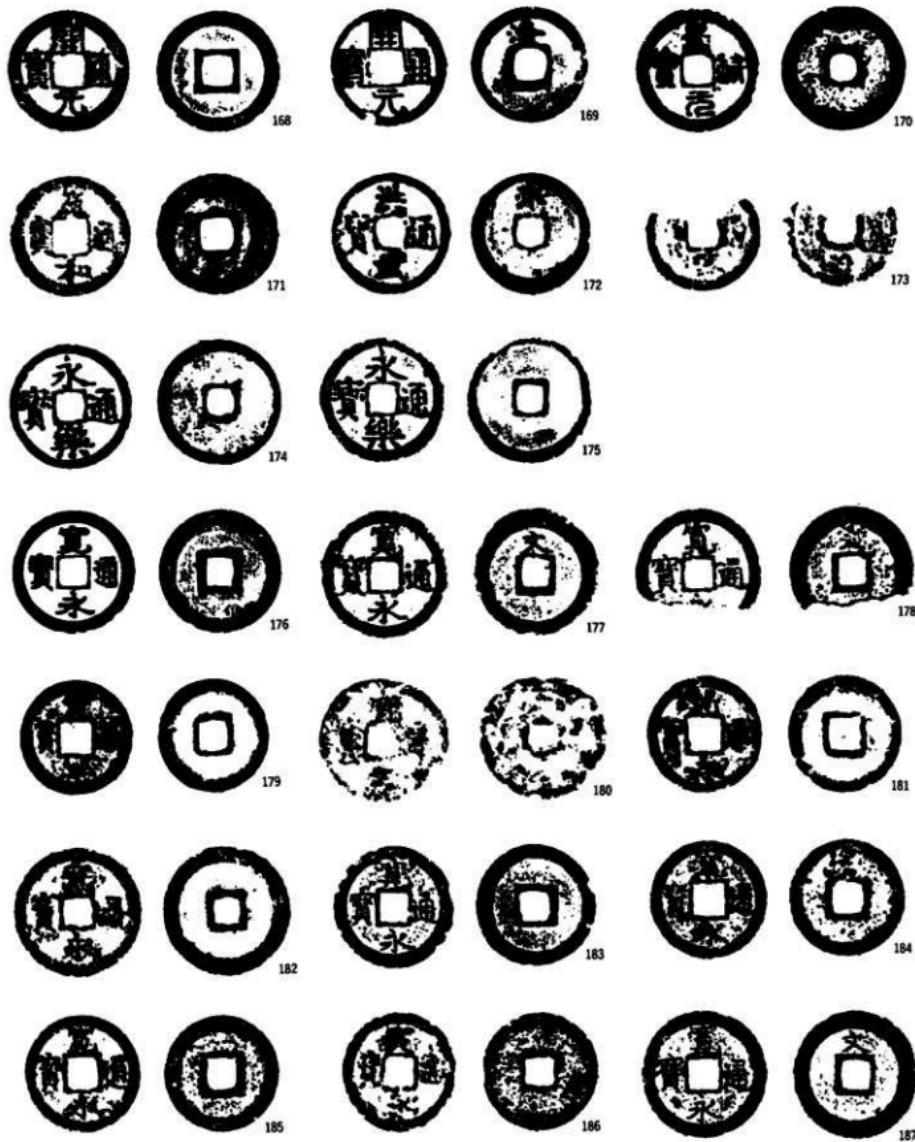
167



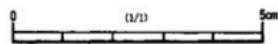
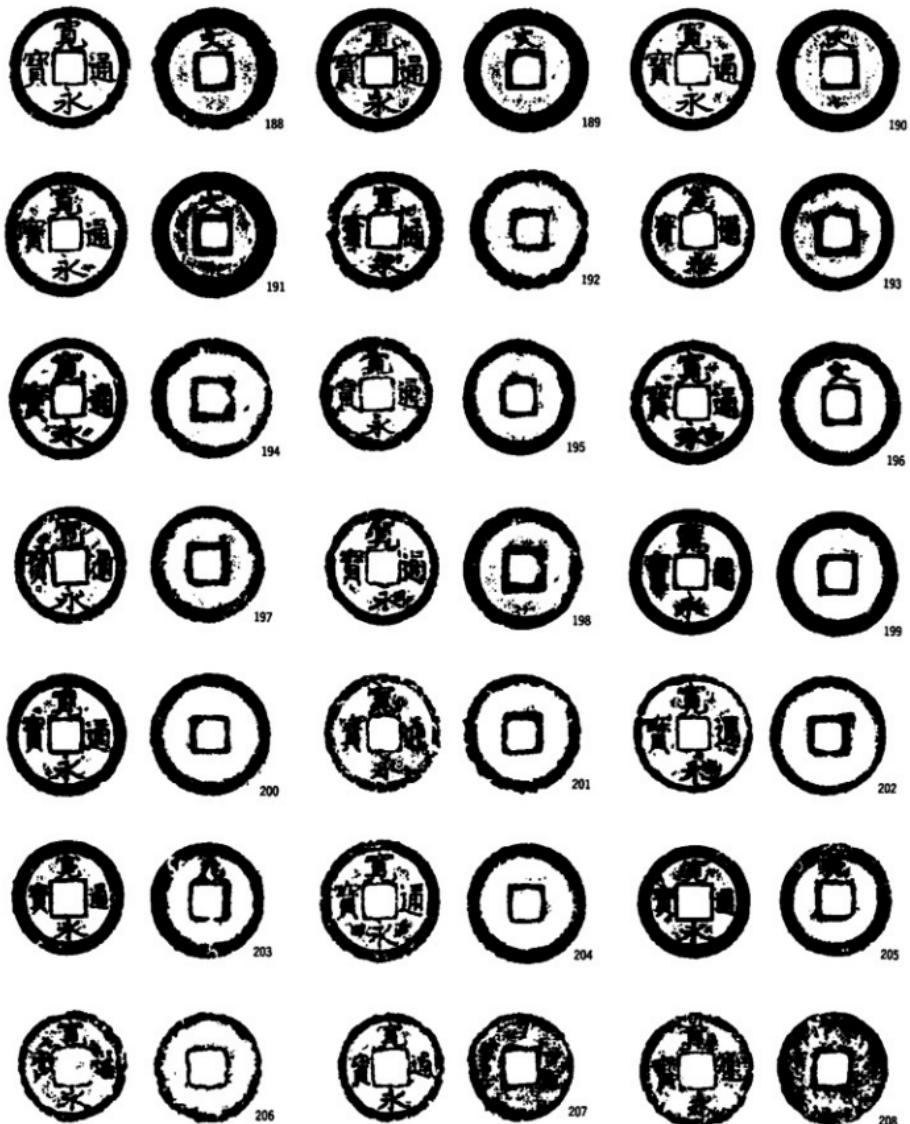
第53図 中近世遺構出土遺物実測図(17)(石塔頸・板碑)

第15表 中近世遺構出土遺物表(6)(磁石・石塔類・板牌)

番号	品名	造形名	翻番	法 盤 (cm)	遺存度	成形・調整等	色 調	石 材	目 名
47	120 磁石 1区	グリッド	006	長19.6幅2.9厚1.9重69.2g	100%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
47	121 磁石 1区	グリッド	006	長11.3幅2.8厚2.1重64.1g	100%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
47	122 磁石 1区	グリッド	006	長8.2幅2.8厚2.1重81.7g	90%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
47	123 磁石 1区	グリッド	006	長8.0幅2.1厚2.6重87.3g	80%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
47	124 磁石 1区	グリッド	006	長8.5幅2.9厚2.3重49.4g	30%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
47	125 磁石 1区	3号獨立柱建物跡	015	長8.1幅2.2厚2.9重108.4g	40%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
47	126 磁石 1区	1号獨立柱建物跡	017	長8.8幅5.0厚1.5重61.5g	50%		明黄褐色	粘板岩質	凹字形
47	127 磁石 1区	グリッド		長2.4幅2.3厚1.9重21.4g	20%		淡灰色	凝灰岩質	凸字形
48	128 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	014	長8.3幅2.0厚2.1重76.1g	70%		暗灰色	凝灰岩質	凸字形
48	129 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	014	長9.8幅2.8厚2.1重78.4g	70%	条縞状成形痕残存。	淡青灰色	凝灰岩質	凸字形
48	130 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	014	長4.6幅2.8厚1.7重21.0g	10%		暗灰褐色	凝灰岩質	凸字形
48	131 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	014	長4.9幅2.2厚2.6重42.9g	10%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
48	132 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	014	長4.7幅2.2厚2.1重21.5g	10%	条縞状成形痕残存。	淡青灰色	凝灰岩質	凸字形
48	133 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	014	長14.6幅3.9厚2.9重131.3g	100%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
48	134 磁石 2区	5号獨立柱建物跡	028	長12.9幅3.1厚3.9重186.1g	100%		淡青灰色	凝灰岩質	凸字形
48	135 磁石 2区	9号獨立柱建物跡	026	長9.2幅2.4厚1.8重74.6g	20%	条縞状成形痕残存。	淡青灰色	凝灰岩質	凹字形
48	136 磁石 2区	1号地下式坑	001	長4.6幅1.6厚1.1重16.8g	40%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
49	137 磁石 2区	土坑003	003	長7.6幅1.5厚2.2重61.9g	60%	条縞状成形痕残存。	暗灰色	凝灰岩質	凹字形
49	138 磁石 2区	土坑003	002	長7.0幅0.9厚3.1重54.0g	60%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
49	139 磁石 2区	土坑003	003	長6.1幅0.4厚0.5重24.5g	20%		明黄褐色	粘板岩質	凹字形
49	140 磁石 2区	土坑010	010	長8.9幅3.1厚3.0重80.7g	40%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
49	141 磁石 2区	1号獨立柱建物跡	042	長8.3幅2.1厚3.1重81.9g	80%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
49	142 磁石 2区	1号独立柱建物跡	042	長5.2幅0.8厚1.2重26.8g	50%		暗灰褐色	凝灰岩質	凹字形
49	143 磁石 3区	5号獨立柱建物跡	045	長5.1幅2.9厚1.7重33.6g	30%		暗灰褐色	凝灰岩質	凸字形
49	144 磁石 3区	6号獨立柱建物跡	046	長7.2幅0.8厚0.7重32.6g	20%	両面削離。	淡青褐色	粘板岩質	凹字形
50	145 磁石 3区	1号土壙	048	長7.0幅3.3厚2.6重73.2g	30%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
50	146 磁石 3区	1号土壙	048	長10.0幅3.9厚2.1重117.5g	60%		淡青灰色	粘板岩質	凹字形
50	147 磁石 3区	1号土壙	048	長10.1幅3.8厚2.1重116.9g	90%		暗灰褐色	凝灰岩質	凸字形
50	148 磁石 3区	1号土壙	048	長10.1幅2.9厚2.2重85.2g	90%	側面未使用。条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
50	149 磁石 3区	1号土壙	048	長10.5幅4.3厚2.1重145.8g	50%		暗灰褐色	粘板岩質	凹字形
50	150 磁石 3区	1号土壙	048	長4.0幅2.2厚1.7重51.1g	10%		暗灰色	粘板岩質	凹字形
50	151 磁石 3区	1号土壙	048	長2.6幅0.9厚1.0重9.0g	10%	条縞状成形痕残存。	灰白色	凝灰岩質	凸字形
51	152 磁石 3区	2号土壙	051	長4.1幅4.7厚2.6重54.0g	20%		灰色	砂岩質	凸字形
51	153 磁石 3区	1号病状遺構	036	長6.2幅0.3厚2.3重55.0g	40%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
51	154 磁石 3区	1号溝状遺構	036	長8.1幅2.2厚3.2重127.0g	40%	条縞状成形痕残存。	暗灰褐色	凝灰岩質	凸字形
51	155 磁石 3区	土坑053	053	長9.5幅3.0厚2.3重77.8g	80%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
51	156 磁石 3区	土坑056	056	長7.2幅2.3厚2.5重84.7g	70%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
51	157 磁石 3区	グリッド	TB-02	抜8.2幅2.8厚2.6重143.7g	60%		淡青灰色	粘板岩質	凸字形
52	158 磁石 -1階			長8.5幅2.0厚2.3重48.3g	60%		灰白色	凝灰岩質	凸字形
52	159 磁石 -1階			長8.7幅3.1厚2.3重85.3g	50%		暗灰色	凝灰岩質	凸字形
52	160 磁石 -1階			長6.8幅2.5厚2.3重106.8g	60%		淡青灰色	粘板岩質	凹字形
52	161 磁石 -1階			長5.5幅2.1厚2.4重41.6g	40%		暗灰色	凝灰岩質	凸字形
52	162 磁石 -1階			長6.3幅2.5厚2.1重79.0g	60%		淡黄褐色	凝灰岩質	凹字形
52	163 磁石 -1階			長5.0幅2.5厚1.5重28.4g	60%		灰色	砂岩質	凸字形
53	164 石塔 1区	グリッド	006	長10.9幅8.9厚4.0重249.8g	破片		黑褐色	安山岩質	砾石に転用。
53	165 石塔 2区	1号地下式坑	001	長5.7幅3.7厚5.7重224.7g	破片		暗灰色	砂岩質	砾石に転用。
53	166 板牌 2区	1号地下式坑	001	長14.3幅9.5厚2.5重554.2g	破片		青灰色	雲母片岩質	
53	167 板牌 3区	4号土壙	049	長10.7幅6.9厚1.9重164.4g	破片		暗灰色	雲母片岩質	



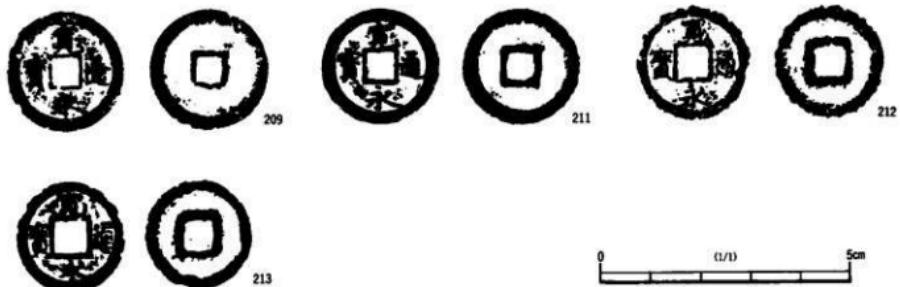
第54図 中近世遺構出土遺物実測図(18)(古銭)



第55図 中近世遺構出土遺物実測図(19)(古銭)

第16表 中近世遺構出土遺物表（7）（古錢）

編	固	段名	固	道橋名	固	固	固	固	固	固	固	固	固	固	固
54	168	元水道實	1区	グリッド	4A-89	24. 55	19. 1	7.75	6.43	1.07	0.56	2.6	東来鐵		
54	169	元水道實	1区	グリッド	4A-89	24. 48	19. 8	7.98	6.55	1.09	0.51	2.5	東来鐵「南」		
54	170	東来元實	1区	グリッド	4A-89	25. 15	20. 3	6.98	5.75	1. 2	0.83	2.5	東来鐵		
54	171	東来元實	3区	土坑055	055	24. 48	19. 03	7.83	6.89	1.05	0.79	2.9	東来鐵		
54	172	洪水道實	1区	グリッド	4A-89	24. 28	20. 8	7.05	5.98	1.45	0.65	2.7	東来鐵「南」		
54	173	洪水道實	1区	グリッド	4A-89							1.5	東来鐵欠損		
54	174	永水道實	1区	グリッド	4A-89	24. 78	21. 13	6. 7	5.5	1.15	0.63	3	新永水		
54	175	永水道實	3区	石塁上置	050	25. 25	20. 93	6.75	5.55	1.32	0.79	3.7	東来鐵		
54	176	寛永道實	1区	1号獨立柱道橋物	017	24. 55	19. 33	6.88	5.48	1.22	0.62	3.4	古寛永		
54	177	寛永道實	1区	グリッド	006	25. 33	20. 1	7.88	5.8	1.25	0.61	2.9	寛永水「文」		
54	178	寛永道實	1区	グリッド	006				7.18	5.6		2.2	新寛永「文」		
54	179	寛永道實	2区	1号獨立柱道橋物	014	22. 55	19. 25	7.88	6.33	1.13	0.73	2.2	新寛永		
54	180	寛永道實	2区	1号獨立柱道橋物	030	25. 4	20. 75	7. 5	5.88	1.52	0.77	4.1	新寛永		
54	181	寛永道實	3区	1号獨立柱道橋物	042	22. 98	19. 8	5.93	7.23	1.02	0.69	2.4	新寛永		
54	182	寛永道實	3区	1号獨立柱道橋物	042	25. 78	20. 58	7.05	5.63	1.29	0.68	3.4	新寛永		
54	183	寛永道實	3区	1号獨立柱道橋物	042	24. 1	19. 98	7.18	6.03	1. 2	0.76	2.7	新寛永		
54	184	寛永道實	3区	1号獨立柱道橋物	042	23. 35	19. 45	7.75	6.38	1.02	0.85	2.7	新寛永		
54	185	寛永道實	3区	1号獨立柱道橋物	042	23. 05	19. 18	7. 4	6.43	1.01	0.78	2.5	新寛永		
54	186	寛永道實	3区	5号獨立柱道橋物	045	23. 35	20. 2	7.18	5.93	0.98	0.68	2.1	新寛永		
54	187	寛永道實	3区	5号獨立柱道橋物	046	25. 13	19. 78	7.05	5.98	1.22	0.7	3.3	新寛永「文」		
55	188	寛永道實	3区	6号獨立柱道橋物	046	25. 23	20. 3	6.85	5.58	1.37	0.81	3.3	新寛永「文」		
55	189	寛永道實	3区	6号獨立柱道橋物	046	25. 33	19. 78	7.13	5.85	1.19	0.63	3.1	新寛永「文」		
55	190	寛永道實	3区	6号獨立柱道橋物	046	25	20. 03	7.15	5.9	1.23	0.65	3.2	新寛永「文」		
55	191	寛永道實	3区	6号獨立柱道橋物	046	25. 38	20. 13	6.95	5.45	1.27	0.71	3.4	新寛永「文」		
55	192	寛永道實	3区	土坑055	055	23. 9	19. 33	7.23	5.9	1. 1	0.69	2.8	新寛永		
55	193	寛永道實	3区	土坑055	055	22. 15	19. 25	8	6.45	0.97	0.64	2.4	新寛永		
55	194	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	24. 6	19. 98	7.05	5.7	1.19	0.54	3.2	新寛永		
55	195	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	23. 2	17.88	7.25	5.88	1.02	0.7	2.5	新寛永		
55	196	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	25. 08	26. 28	7.48	6.18	1.26	0.69	3.6	新寛永「文」		
55	197	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	23. 4	18. 8	7.88	6.18	1.12	0.68	2.6	新寛永		
55	198	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	23. 33	19. 3	7.18	5.95	1.27	0.94	3.2	新寛永		
55	199	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	25. 2	20. 7	7. 4	5.75	1.21	0.65	3.2	新寛永		
55	200	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	24. 45	19. 53	7.25	5.85	1.18	0.56	2.9	新寛永		
55	201	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	23. 55	20. 03	7.15	6.13	0.97	0.61	2.1	新寛永		
55	202	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	23. 85	20. 73	6.93	5.7	0.97	0.5	1.8	新寛永		
55	203	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	23. 43	17.88	7. 7	6.35	0.95	0.48	1.8	新寛永「元」		
55	204	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	24. 5	19. 83	7.23	5.95	1.13	0.67	2.9	新寛永		
55	205	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	27. 15	17. 6	7.63	6.2	1.05	0.65	2.3	新寛永		
55	206	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	21. 9	18. 43	7.95	6.7	0.82	0.56	1.5	新寛永		
55	207	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	21. 88	17. 95	8. 1	7	0.85	0.59	1.7	新寛永		
55	208	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	22. 53	18. 98	7.98	6.68	1.16	0.97	2.8	新寛永		
56	209	寛永道實	3区	グリッド	6C-68	24. 65	19. 5	7	5.63	1.19	0.58	2.9	新寛永		
56	210	寛永道實	3区	グリッド	6C-68							9.8	新寛永「3枚 鉛輪」		
56	211	寛永道實	3区	グリッド	6C-89	23. 78	18. 85	7.35	5.8	1.03	0.61	2.6	新寛永		
56	212	寛永道實	3区	グリッド	7C-46	22. 75	19. 18	7. 6	6.4	1. 2	0.8	2.5	新寛永		
56	213	寛永道實	-般	鉛輪	21. 75	18. 05	8.08	6.58	0.99	0.62	1.8	新寛永			



第56図 中近世遺構出土遺物実測図（20）（古銭）

#### タニシプロック

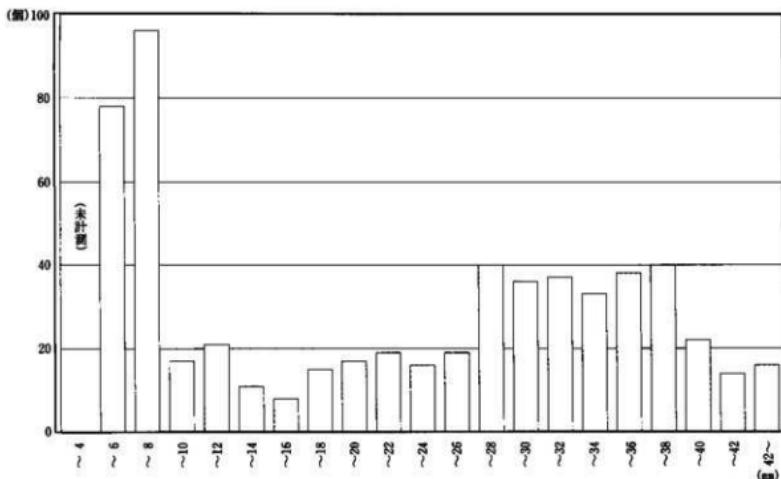
出土したタニシの貝プロックは小規模なもので、分層もできなかったため一括で採取し、9.52mmと4mmのふるいを使用して水洗により土を除去した。ついで殻口が残存している個体のみをカウントし、殻頂部まで残存しているものについては、殻長を計測した。その結果、全部で593点という数が得られた。ただし、4mmに満たなかった個体については数が極めて多量であることと、そのほとんどが、稚貝であることから、現段階では計測を行う必要性に乏しいと判断し、対象から除外した。したがって、これらを含めると実際には数はかなり増える。第57図に殻長を測定した結果を示しているが、26mm～38mmに一つのピークが築かれており、ここがこの貝プロックに含まれる親貝の平均的な大きさと考えられる。そこより小さい8mm～26mmのエリアは、成長段階の幼生もしくは若い親貝と考えられる。16mm付近に谷が見られるもののおしなべて平均的な数量を保っており、選択採取が行われていた可能性が強い。8mmエリアにはいきなり大きなピークが築かれるが、まだ生まれていないか生まれた直後の稚貝と考えられる。図では示せなかったが4mm以下のエリアにも大きなピークが築かれており、受精からあまり時間を経ていない個体も相当数存在することが想像できる。タニシの産卵期は初夏から盛夏で、食用として採集されるのは冬眠からさめる晩春であるため、食用として採取されたもののうち稚貝をはらんでいた雌が相当数含まれていたと推測できる。こうした中・近世の貝殻の一括採取について、宗教的な性格を見いだす考え方もあるが、洞谷台遺跡の例を観察・分析する限りそこからは、日常の生活活動を営む中で行われた食料採取の姿が浮かび上がってくる。すべての類例について同じ性格を与えることはできないのは当然であるが、貝そのものに対する分析、タニシの生態についての観察、そして当時の漁労法の追求といった手段を複合的に用いることによって、それを解明する手がかりが得られると考えられる。

### イシガイブロック

出土した貝ブロックはすべてイシガイであつた。数が少なかったのと極めて脆かったためふるいは掛けは行わず、殻頂部が残存していたもののみ抽出して、個体数をカウントしたが(右38・左51)、いずれも殻表部の摩滅が著しく、殻長の計測は不可能であった。

### 参考文献

相澤敬吾 1996「第4章 君津市の動物」『君津市史 自然編』君津市史編さん委員会



第57図 タニシ殻長分布図

注1 鳴田浩司ほか 平成10年 「空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1 一山武郡芝山町古宿・上谷遺跡ー」

鰐 千葉県文化財センター

2 昭和58・59年度、平成3年度 鰐 千葉県文化財センター調査。

## 第5章 大堀切遺跡

### 第1節 調査の概要

大堀切遺跡は木戸川の支谷によって樹枝状に開析された舌状台地上に位置する。空港南部工業団地の造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、台地南端部を残し、ほとんどが調査された。今回の調査は残された台地南端部の調査である。

調査対象となったのは道路の南側の平坦部及び緩斜面1,200m<sup>2</sup>であり、地番は岩山字出崎1,646-5ほかである。調査区は南北に長く、約半分は緩斜面部にあたる。大堀切遺跡は空港南部工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施され、このときに設定されたグリッドを踏襲した。公共座標にあわせて50m×50mの方形を大グリッドとし、さらに、大グリッド内に5m×5mの小グリッドを設定した。大グリッドは北から南へG13・G14及びH13～H15まで設定し、小グリッドについては北西隅を起点に00～99と番号をついた。

調査は平成3年10月2日から同年10月31日まで実施した。調査は上層確認調査、上層本調査、下層確認調査、下層本調査の順に行う予定であった。しかし、上層確認調査時に土坑1基、炭窯跡1基を検出したのみであったので、上層本調査は実施しなかった。また、下層確認調査においても旧石器時代の石器は検出されず、下層本調査は実施しなかった。

大堀切遺跡は台地平坦部においては武藏野ローム残存面より50cm下でTP（東京バシス）層を確認し、南端緩斜面部では表土直下に成田層がみられる。本台地上の標準的な土層堆積状況が残存するのは北端部のみであり、この部分の堆積状況を説明する。

最上層の第1層は表土層であり、腐植土を含み、暗褐色を呈する。第2層は台地上におけるII～IV層に当たる層と考えられ、上下層に比べやや明るくソフト化している。第3層はV～VII層に当たると考えられる。AT層がブロック状に存在している。第4層はIX層中にX層を含む層である。第5層はX層を主体とする層であると考えられる。第6層は武藏野ローム層であり、第XI層に当たる。第5層に比べさらに青みを増し、著しい粘性を帯びる。

以上が本遺跡北端の層序である。いずれも斜面である西に向かって下がっており、これらの層序も二次堆積の可能性が強く、台地縁辺の緩斜面部の様相を呈している。

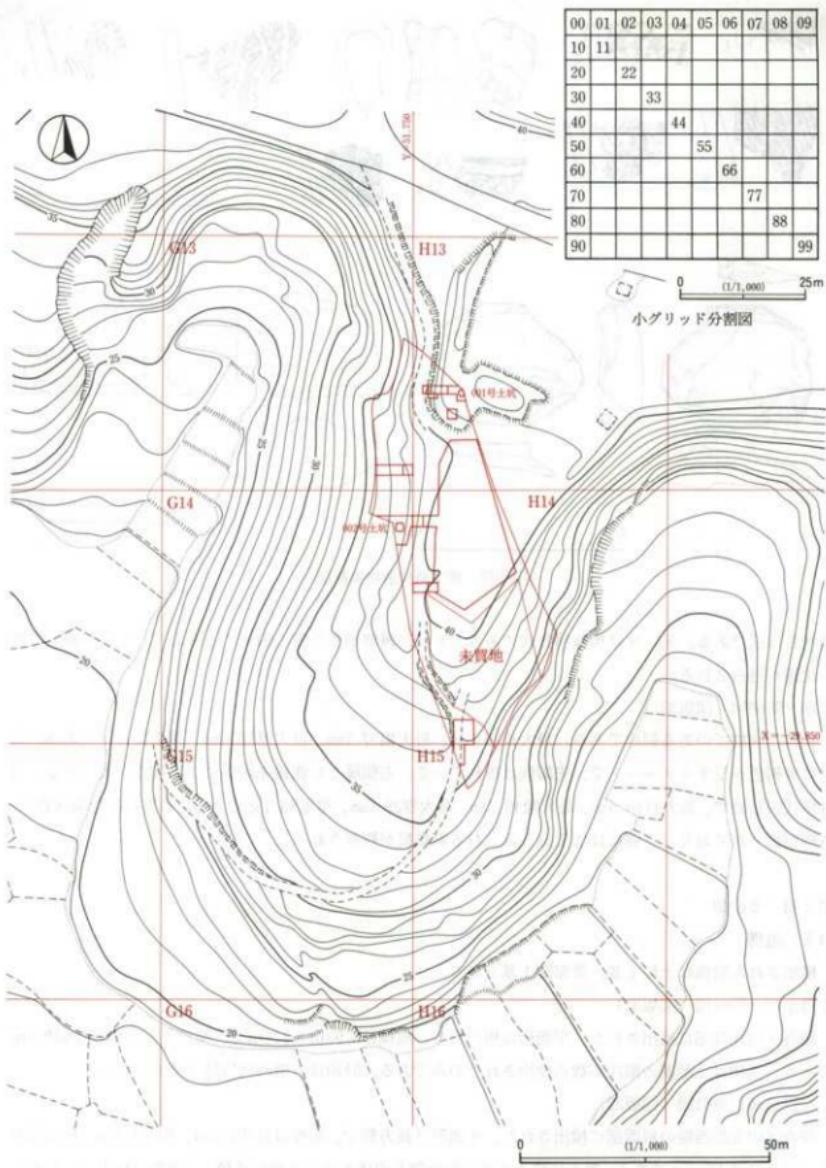
### 第2節 遺構と遺物

#### 第1項 繩文時代

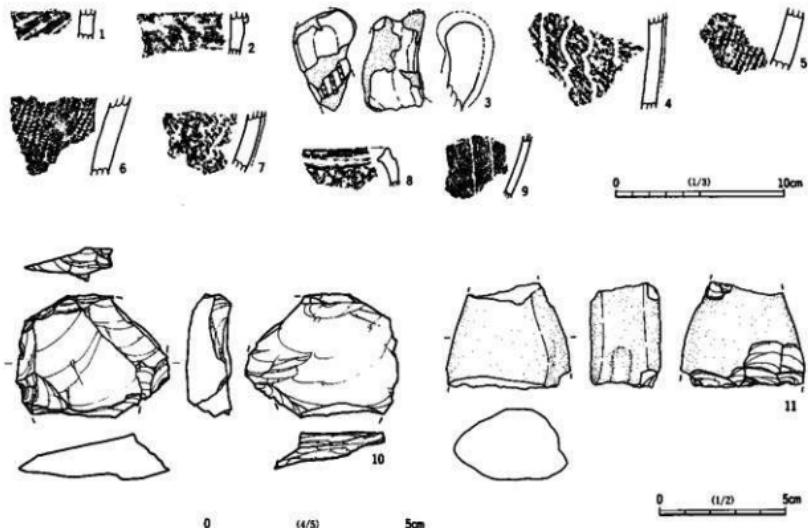
##### 繩文土器（第60図 図版33）

調査区内から出土した繩文土器は極めて少ない。1は早期田戸下層式土器である。太い棒状工具による平行沈線を施す。2は摩耗が著しいが、横方向に指頭による凹凸文を巡らせるもので、浮島式である。3は貼り付け把手で、側方に先端が尖った棒状工具による連続刺突が施される。中期前半のものと考えられる。4～7は加曾利E式である。4は繩文地紋に隆起線を貼り付け、波状の沈線を施すもので、加曾利E式の古い段階のものである。7は微隆起線を貼り付けてその両側にナゾリ状の無文帶を配するもので、加





第59図 全体図及びグリッド配置図



第60図 繩文時代遺物実測図

曾利EIV式である。8、9は加曾利B式である。8は口縁部がやや強く内湾するもので、口縁に沿って浅い沈線が巡らされる。

#### 石器（第60図 図版33）

10は二次加工のある剝片である。最大長30.3mm、最大幅37.7mm、最大厚10.6mm、重量12.8gである。石材は青褐色を呈するチャートで、先端側は折れている。右側縁と左側縁先端側に二次加工が施される。11は棒状の石器で、最大長40.5mm、最大幅49.2mm、最大厚28.0mm、重量83.1gである。石材は緑色凝灰岩で、両側が折られており、下側には加工痕とみられる剝離痕が観察される。

#### 第2項 その他

##### (1) 遺構

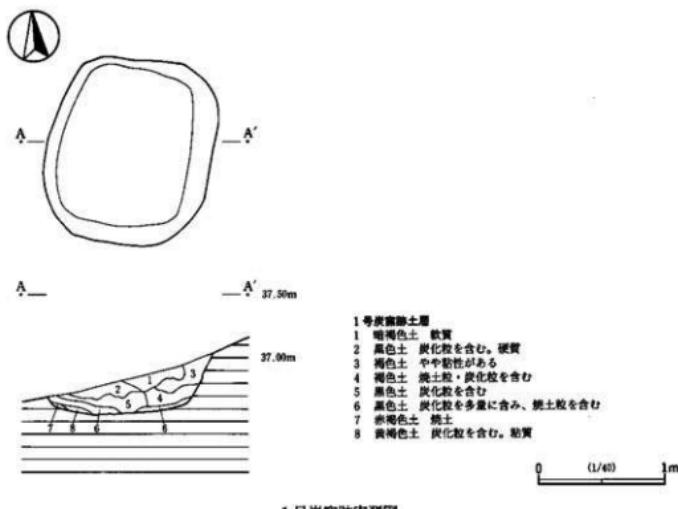
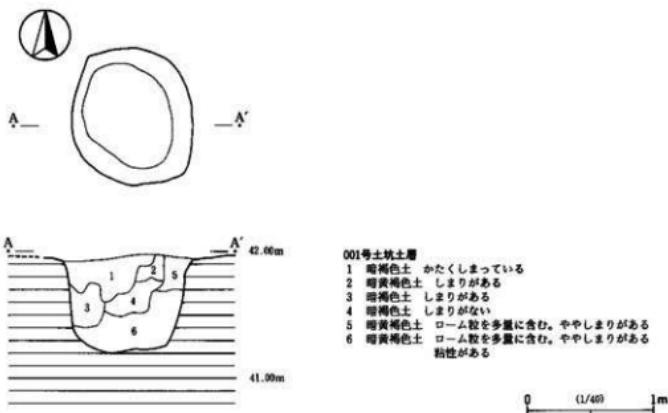
検出された遺構は土坑1基、炭窯跡1基である。

##### 1号土坑（第61図 図版32）

調査区の北端部に検出された。平面形は梢円形で、規模は0.98m×1.1mで、検出面からの深さは0.8mである。遺物は土師器の細片が数点検出されたのみである。時期は古墳時代以降と考えられる。

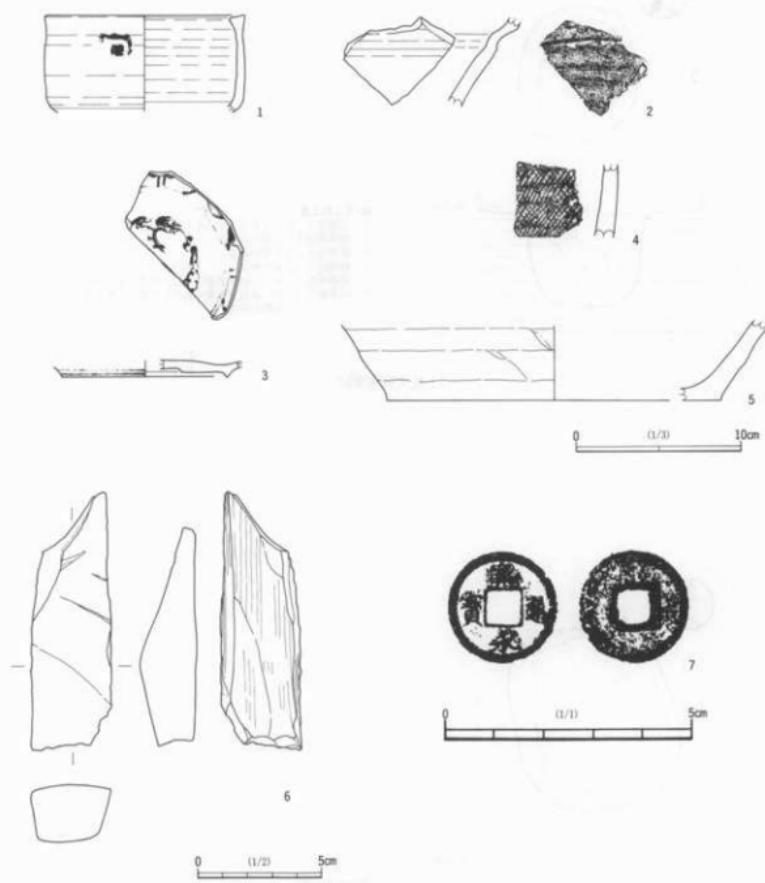
##### 1号炭窯跡（第61図 図版32）

調査区中央部西端の斜面部に検出された。平面形は長方形で、規模は長辺1.5m、短辺1.3m、検出面からの深さは最大0.5mである。覆土に焼土を含む炭化物を主体とする土層が堆積し、遺物は検出されなかつたので、中近世遺構の炭窯と考えられる。



第61図 1号土坑及び1号炭窯跡実測図

(2) 遺構 (第62図 第17表 図版33)



第62図 中近世出土遺物実測図

第17表 出土遺物表

順	種類	場所	縦幅	底地	時代	寸法(cm)	遺存度	成形・施装等の特徴	色調等
1	陶器	香炉	H13-61	瀬戸・美濃	18世紀	口12.0幅12.0	10%以下	無輪粗鉢文様	灰白色 反暈色地
2	陶器	擂鉢	H13-71	瀬戸・美濃	17世紀後半～ 18世紀代		破片	擂目	茶褐色
3	磁器	染付皿	H13-61	肥前	18世紀後半	底10.0	20%	松竹梅文様	乳白色 青色染付
4	瓦質土器	火鉢	H13-62	左地	18世紀～19世紀	胴部片	叩き目		黒色
5	土器質上器	土鍋	H13-61	左地		底20.1	10%以下		褐色 内面黒色
6	石製品	砥石	H13-62			長10.3幅3.2厚2.3 重73.5g	60%	凸字形 成形時の工具 と想われる削余線	淡灰褐色 無光封質
7	古鏡	寛永通寶	一括		1668年以降	外縁外径22.50 外縁内径18.65 内郭外径 7.18 内郭内径 7.08 外 線 厚 0.88 文字面厚 0.66 (以上mm) 重1.9g	100%	新寛永	

遺物はほとんどが遺構外からの出土である。

1・2は瀬戸・美濃産の陶器である。1は香炉、2は擂鉢片である。3は肥前産の染付皿の底部である。蛇の目状である。4は火鉢の胴部片である。5は土鍋の底部である。6は凸字形の砥石、7は寛永通寶(新寛永)である。

## 第6章 まとめ

### 大台西藤ヶ作遺跡

調査区が斜面部であり、また、細長い帯状の調査であったので、遺跡全体の内容は把握できないが、隣接遺跡の調査成果から、古墳時代後期～奈良・平安時代の集落跡が存在する可能性がある。しかし、遺物の出土状況から、遺構の密度は低いと考えられる。

### 深田台遺跡

調査区は遺跡の北西端部に位置し、調査面積も300m<sup>2</sup>と小規模である。しかし、奈良・平安時代の竪穴住居跡が4軒検出されたので、遺構の密度は高く、調査区の東側及び南側に、同時期の集落跡が展開している可能性は大きい。旧石器時代については、確認調査を実施したが、遺物は出土しなかった。縄文時代及び弥生時代については、土器片、石器片が少量出土したのみである。

### 洞谷台遺跡

調査区は舌状台地の東約1/3である。縄文時代、古墳時代後期及び中近世の遺構、遺物が検出されている。

縄文時代については、遺構は検出されなかったが、早期、前期後半、中期後半、後期前半の土器片と、削器、磨石、敲石などの石器が少量出土している。

古墳時代後期では、竪穴住居跡が4軒検出され、集落を形成している。すべて調査区の北半部から検出されているが、南半部は全体的に、中近世の遺構構築時に削平、整地が行なわれているので、中近世以前の遺構は消滅している。よって、古墳時代後期には、集落が、立地条件が良い調査区の南半部を含めて、舌状台地全体に広がっている可能性が大きい。

中近世では、調査区全体に遺構、遺物が検出されている。中心となる遺構は、掘立柱建物跡である。これに付属して、地下式坑、溝状遺構、柵列跡、土壘、土坑があり、遺構群を形成している。

遺構は、分布状況から3区に分けられ、北から1区、2区、3区と呼称している。各区とも、中心に平入、直屋<sup>11</sup>で長軸が南北方向の掘立柱建物跡（主屋）があり、前面に庭的な空間が広がり、これを囲むように掘立柱建物跡（付属屋<sup>12</sup>（作業小屋・厩・納屋等））等が配置され、全体を区画する溝状遺構、土壘、柵列跡が配置され、屋敷地を構成している。

1区は庭的な空間の東半部が削平されているので、屋敷地全体の構造は不明である。内容は、東向きで、西側に庇がある主屋の南北両側に付属屋をもつ構造である。北側の掘立柱建物跡は、作業小屋または厩と思われる。南側は、地下式坑を伴う掘立柱建物跡で、納屋的な施設と考えられる。屋敷地内に地下式坑を伴う形式は、2・3区ではなく、1区の大きな特徴である。主屋は内部が、团炉裏的な遺構を境に、2分割されると考えられる。現存する古民家の内部構造から、北側約1/3は土間、南側約2/3は床張りと考えられる。ただし、近世に多く造られた広間型三間取り<sup>13</sup>など、床張り部分を区切る明瞭な遺構は検出されなかった。よって、主屋は、間取りが成立する過渡期の可能性があり、1区の屋敷地の始まりは、16世紀代にさかのぼると考えられる。

2区の屋敷地の内容は、東向きの主屋の北側に付属屋をもち、庭的な空間の南北に建物が配置される構造である。北側の掘立柱建物跡は、東端が竪穴状遺構と重複している。民家の厩部分には大型の土坑を伴う

ものがあり<sup>4</sup>、この掘立柱建物跡も作業場よりは厩である可能性が大きい。また、屋敷地を区切る施設として北側に溝、南側に柵及び溝が配置される。地下式坑が屋敷地から張り出している。2区の特徴として、屋敷地全体の拡張が行なわれた可能性があることである。初めは、2区6号掘立柱建物跡が主屋で、2区7号及び9号掘立柱建物跡が付属屋であったと考えられる。

主屋は内部が、囲炉裏的な遺構を境に、2分割される。古民家の内部構造から、北側約1/3は土間、南側約2/3は床張りと考えられる。建物跡内部に柱穴が検出され、広間型三間取りを構成する可能性がある。

3区は庭的空間の東側約1/3が調査区外のため、屋敷地全体の構造は不明である。検出された遺構の内容は、東向きの主屋の南北両側に付属屋をもつ構造である。北側の掘立柱建物跡は、作業場または厩と思われる。南側は、北側に比べて小規模な掘立柱建物跡で、納屋的な施設と考えられるが、土塁との位置関係から門跡の可能性がある。3区の屋敷地の特徴は、屋敷地を区画する施設として、土塁が遺存していることである。屋敷地の北、西、南に西側では柵を伴っている。

主屋は、内部が1・2区と同様に2分割されると考えられるが、土間と床張り部分を区別する遺構は検出されなかった。

屋敷地の成立については、1区、2区、3区の順に成立したと考えられる。第19表の1・3・4は各区の種類別の遺物の表及びグラフである。3は種類別の比率グラフである。古銭については、1区では中世に流通した渡来銭が多く出土し、2区では古銭の出土は少ないが、寛永通寶（新寛永）が出土している。3区は、渡来銭も出土しているが、寛永通寶（新寛永）がより多く出土している。また、陶器と磁器の比率を比べても、1区、2区、3区の順に、陶器が少なくなり、磁器が多くなっていることが判る。以上から、1区が出土遺物では古い様相を示し、2区、3区と新しくなり、屋敷地の成立順序が推定できる。しかし、後述の理由から成立順の差は小さく、遺物の内容、量の差は、各屋敷地成立後の豊かさの差とも考えられる。

第19表の1・3・4は、出土陶磁器の表である。4・5は種類・器種別の出土点数表である。碗・皿の日常生活雑器がほとんどである。器種は陶器が種類、磁器が種類である。産地は、確定したもので、陶器が瀬戸・美濃、肥前、志戸呂、京都・信楽系、信楽、常滑、備前の7か所、磁器が肥前及び中国産の2か所である。

5・6は時期別に陶磁器の出土数をグラフにしたものである。各区で、出土数のピークほぼ一致していることが判る。また、陶器は17世紀代、磁器は17世紀後半から18世紀代が出土数のピークである。これは、前述した屋敷地成立の時間差は小さく、屋敷地成立後は、陶磁器の消費において、3か所とも同じ経過であったことを示している。

19世紀以降の陶磁器が激減していることは、この時期に、居住の移動があったと考えられる。近世では、民家が掘立柱から礎石建に変化する時期として、18世紀後半から19世紀前半が考えられている<sup>5</sup>。洞谷台遺跡においても、19世紀以降、掘立柱建物がなくなったと考えられるので、礎石建への移行も考えられるが、遺物が少ないので、他地区へ移動した可能性が大きい。

以上から、洞谷台遺跡の中近世遺構の特徴は、中世から近世の農村における居住の形態を示すことである。複数の掘立柱建物をもつ屋敷地を形成し、屋敷地が複数集合していることである<sup>6</sup>。また、19世紀以降、3地区同時に移動したと考えられるので、この時期にかなり大きな集落の変化があったと推定される。

## 大堀切遺跡

大堀切遺跡の台地平坦部の大半は近・現代の削平により、遺構などの存在はほとんど確認されなかった。同一台地上に存在する上宿遺跡・古宿・上谷遺跡の中間に存在する細長い尾根状の台地であったため、本来、遺構が希薄であった可能性も考えられる。今回の調査区は大堀遺跡の縁辺である。

注1 長方形の平面をもつ民家を直屋造（すごやつくり）と呼称する。

民家の構造で、アプローチの向きによる呼称である。屋根の大棟（おおむね）に対して直角にアプローチするものを平入（ひらいり）、延長方向からのものを妻入（つまいり）と呼称する。

1989 復元日本大観6 民家と町並み 世界文化社

2 中世から近世の民家は、複数の建物が集まって屋敷地を構成するものがあり、絵巻物、絵画等にも表現されている。

小泉和子ほか編 1996 「絵巻物の建築を読む」 東京大学出版会

冷泉為人ほか 1996 「瑞穂の国・日本 四季耕作図の世界」 淡交社

3 近世に広く普及した間取り。建物を梁方向に3分し、中央に広間（居間に相当）、下手に土間、上手の表側に客間、裏側に専用の寝間が設けられている。客間は接客用の空間で、座敷として成立し、日常生活空間ではない。なお、座敷は17世紀後半には農家にかなり普及していたと考えられ、幕府等から農家の稼作制限が出されている。

吉田高子ほか 1998 「物語 ものの建築史 座敷のはなし」 鹿島出版会

4 羽柴直人ほか 平成6年 「白木野I・II・III遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

高橋與右衛門「掘立柱建物跡からみた南部「曲り家」出現期の一試案」平成5年「紀要 XIII」(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

5 渋江芳浩「近世農家のイメージ」 1987 「貝塚 40」 物質文化研究会

6 上記のほかに、近年の中近世の民家の掘立柱建物跡の発掘調査例には次のものがある。

鈴木貞行ほか 平成7年 「上野々遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

斎藤 實ほか 平成6年 「木内I遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

立川敏之ほか 1998 「上溝上3号遺跡発掘調査報告書」 (財) 東広島市教育文化振興事業団

また、民家的な掘立柱建物跡に関する考察には、上記のほかに次のものがある。

羽柴直人「西和賀地方の近世民家」平成5年「紀要 XIII」(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

羽柴直人「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について—泉屋遺跡、志羅山遺跡の事例を中心に—」平成9年「紀要 XVII」(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

羽柴直人「岩手県湯田町における近世掘立柱民家について」1998年7月『館研究 第1号』 岩手の館研究会

第18表 洞谷台遺跡出土中近世土器・陶磁器集計表

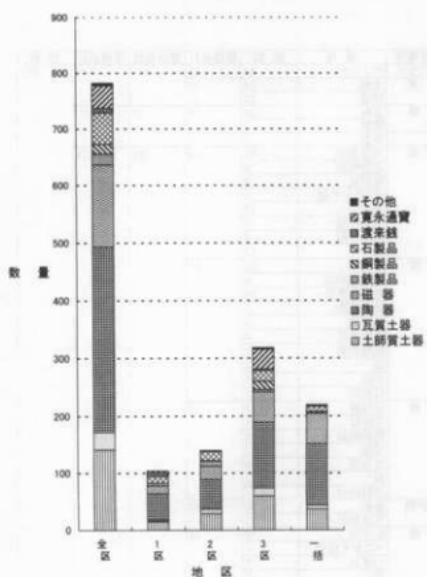
洞谷台遺跡中近世遺物累計表

地 区	全 区	1 区	2 区	3 区	一 條
土 葵 質 土 器	141	15	29	60	37
瓦 質 土 器	31	2	8	14	7
陶 器	321	47	52	115	107
磁 器	144	14	23	53	54
鉄 製 品	19	5	9	4	1
銅 製 品	17	0	1	14	2
石 製 品	56	12	16	19	9
凌 未 錢	8	6	0	2	0
實 通 永 實	40	3	2	34	1
そ の 他	5	0	0	3	2
合 計	782	104	140	318	220

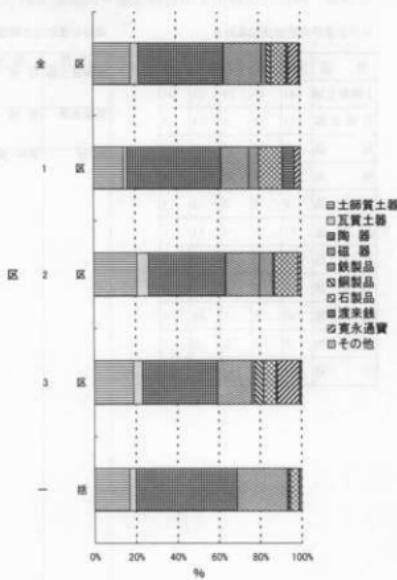
洞爺台遺跡出土陶瓶標

種 類	原 地	製 造 者	品 物	個 数	総 個 数	販 售 台 数	総 個 数	販 售 台 数	総 合
土師質土器	在 地	カツラケ	カツラケ	84	84	141	141	141	637
		土瓶	土瓶	34	57				
		壺	壺	23					
瓦質土器	在 地	鉢 類	火鉢	29	30	31	31		
		瓦	瓦	1	1				
陶 器	瀬戸・美濃	碗 類	天目茶碗	62	103	240	321		
		白磁茶碗	白磁茶碗	6					
		白磁	白磁	21					
		うつわん手鏡	うつわん手鏡	1					
		小鉢	小鉢	10					
		小鉢	小鉢	1					
		高麗小鉢	高麗小鉢	4					
		高麗小盤	高麗小盤	4					
		皿	皿	17					
		小皿	小皿	5					
		灯明皿	灯明皿	1					
		灰吹	灰吹	1	47				
		豆原鉢	豆原鉢	1					
		鶴形鉢	鶴形鉢	3					
		鶴鉢	鶴鉢	33					
		虎形壺	虎形壺	6					
		灰吹丸皿	灰吹丸皿	1					
		皿	皿	3					
		小皿	小皿	1					
		香炉類	香炉向付	1					
		香炉	香炉	10	13				
		三足香炉	三足香炉	3					
		查 箱	駄屋箱	10	16				
			べこかん便利	1					
			小便利	1					
			鏡	2					
			鏡	1					
			土瓶	1					
		豪 類	半圓鏡	1	1				
		不 明	不 明	5	5				
肥 前	筑 砂	青銅地鏡	青銅地鏡	4	17	51			
		青銅子鏡	青銅子鏡	3					
		瓦掛風鏡	瓦掛風鏡	2					
		毛目鏡	毛目鏡	6					
		小鉢	小鉢	1					
		皿	皿	1					
		皿	青銅地皿	17	19				
		小皿	小皿	1					
		鉢 類	三字手鉢	3	14				
			扇形目鉢	10					
			小鉢	1					
		香炉類	京焼風香炉	1	1				
志戸呂	田 領	灯明鏡	灯明鏡	10	14	14			
		灯明受皿	灯明受皿	4					
		鏡	鏡	2	2	2			
		京都・信濃	扇形鏡	1	2	2			
		鏡	鏡	1					
佐 東	丘 領	灯明鏡	灯明鏡	1	1	1			
宗 沢	丘 領	鏡	鏡	4	4	4			
佐 藤	丘 領	木鉢	木鉢	1	1	1			
		象牙鏡	象牙鏡	78	116	142	144		
		白磁	白磁	1					
		白磁鏡	白磁鏡	5					
		うつわん手鏡	うつわん手鏡	1					
		扇形鏡	扇形鏡	2					
		鏡	鏡	14					
		小鉢(倉む地付)	小鉢(倉む地付)	14					
		鏡	鏡	1					
		皿	皿	3					
		皿	金付皿	10	16				
		金付皿	金付皿	1					
		金付大皿	金付大皿	1					
		金付小皿	金付小皿	1					
		金付	金付	1					
		査 箱	査 箱	2	6				
		査 箱	査 箱	1					
		査 箱	査 箱	1					
		査 箱	査 箱	2	2	2			
		査 箱	査 箱	1	2				
		その他	その他	1					
		水滴	水滴	1					
		金付小鉢	金付小鉢	1					
		金付鏡	金付鏡	2	2	2			
中 国	四 領	金付鏡	金付鏡	2	2	2			

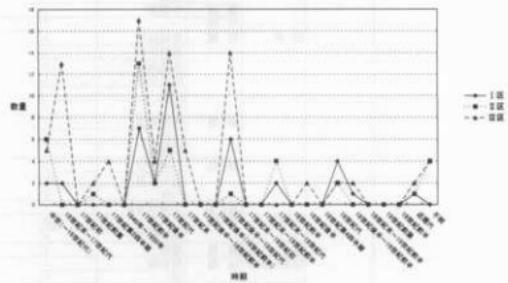
中近世出土遺物グラフ



中近世出土遺物グラフ(%)



洞谷台遺跡・薬戸・美濃区分別グラフ



# 写 真 図 版



航空写真（1）



航空写真（2）



調査区近景



調査区近景



調査区近景



調査区近景



確認グリッド



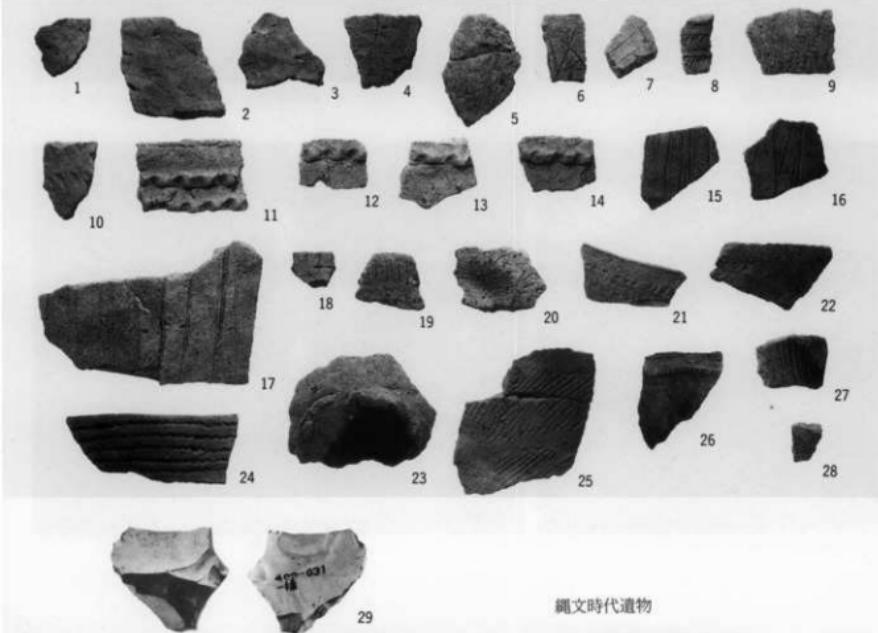
確認風景



調査区近景（北から）



調査前状況（北から）



縄文時代遺物



上 001号住居跡土層断面



右 001号住居跡（南西から）



002号住居跡全景  
(南西から)



002号住居跡炭化材  
出土状況（南西から）



003号住居跡全貌（南西から）



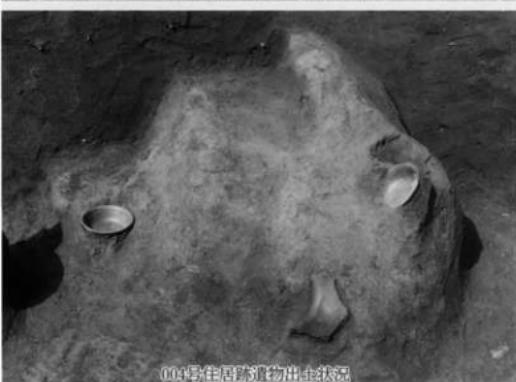
004号住居跡全貌（南西から）



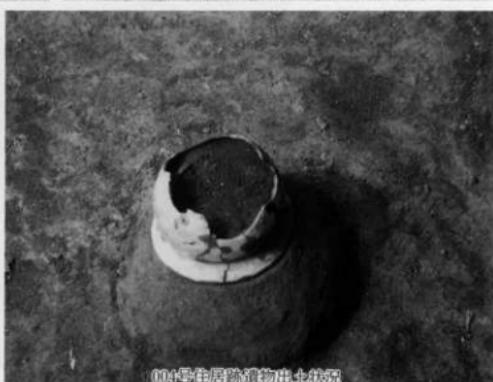
004号住居跡遺物出土状況（南西から）



004号住居跡遺物出土状況



004号住居跡遺物出土状況



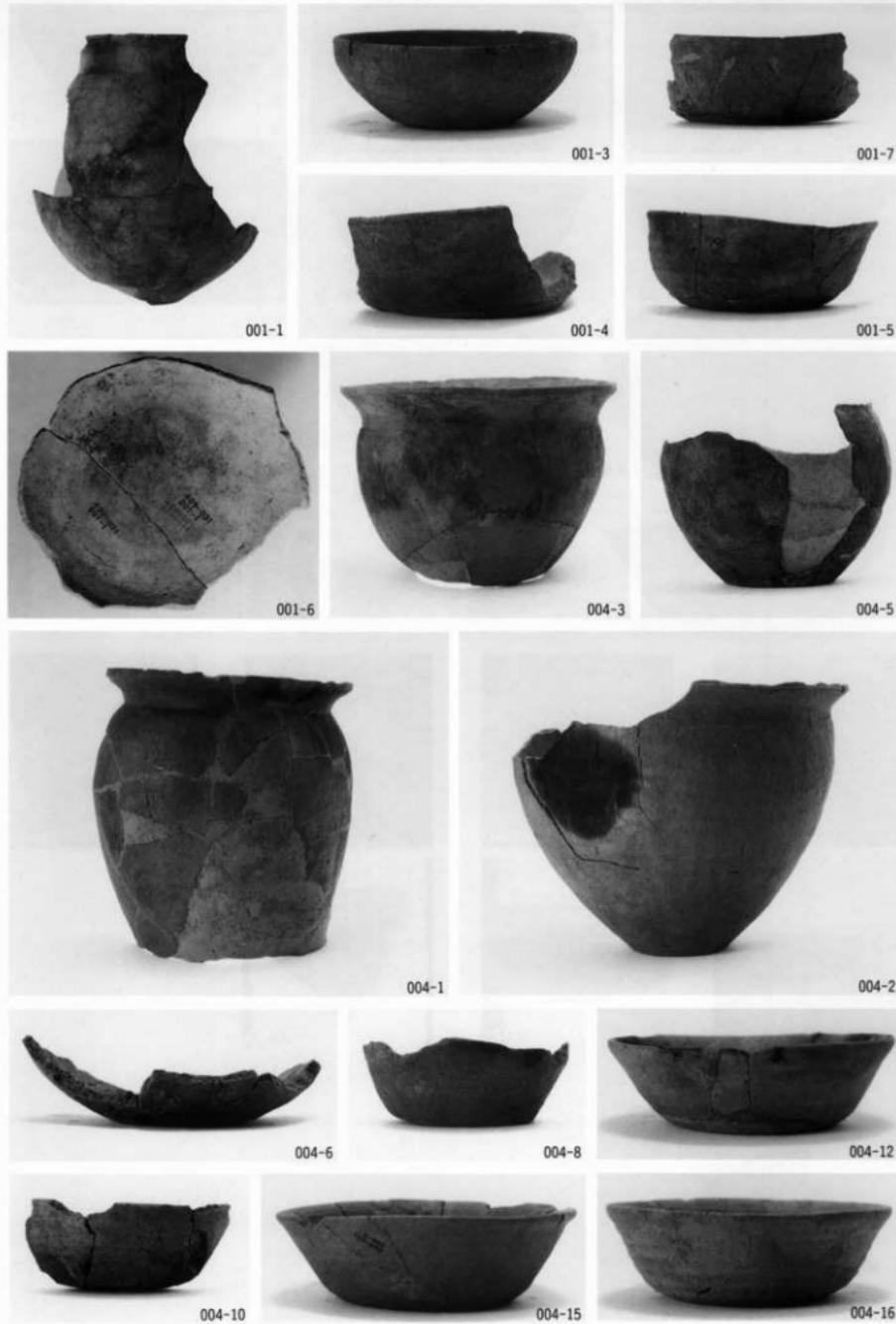
004号住居跡遺物出土状況



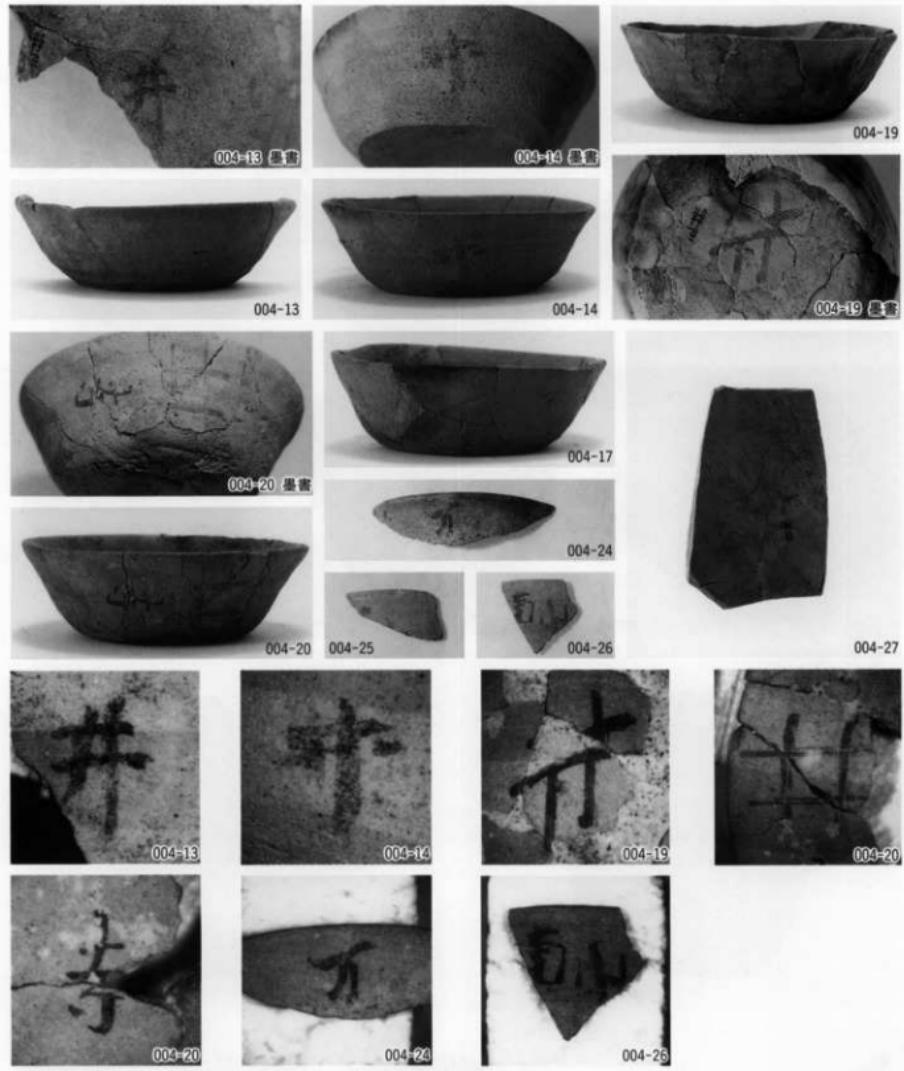
004号住居跡カマド検出状況



004号住居跡カマド



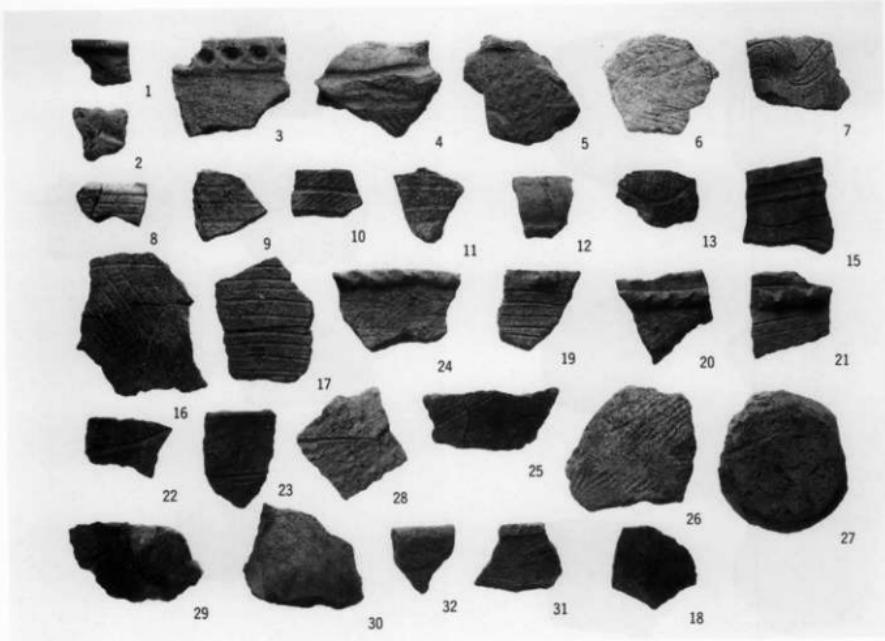
深田台遺跡出土遺物（1）



墨書赤外線写真



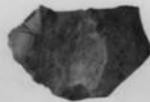
深田台遺跡出土遺物（2）



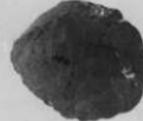
繩文時代遺物（1）



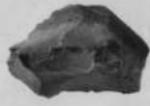
33



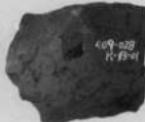
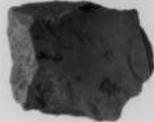
37



34



38



35



36



39



40



41



42

縄文時代遺物（3）



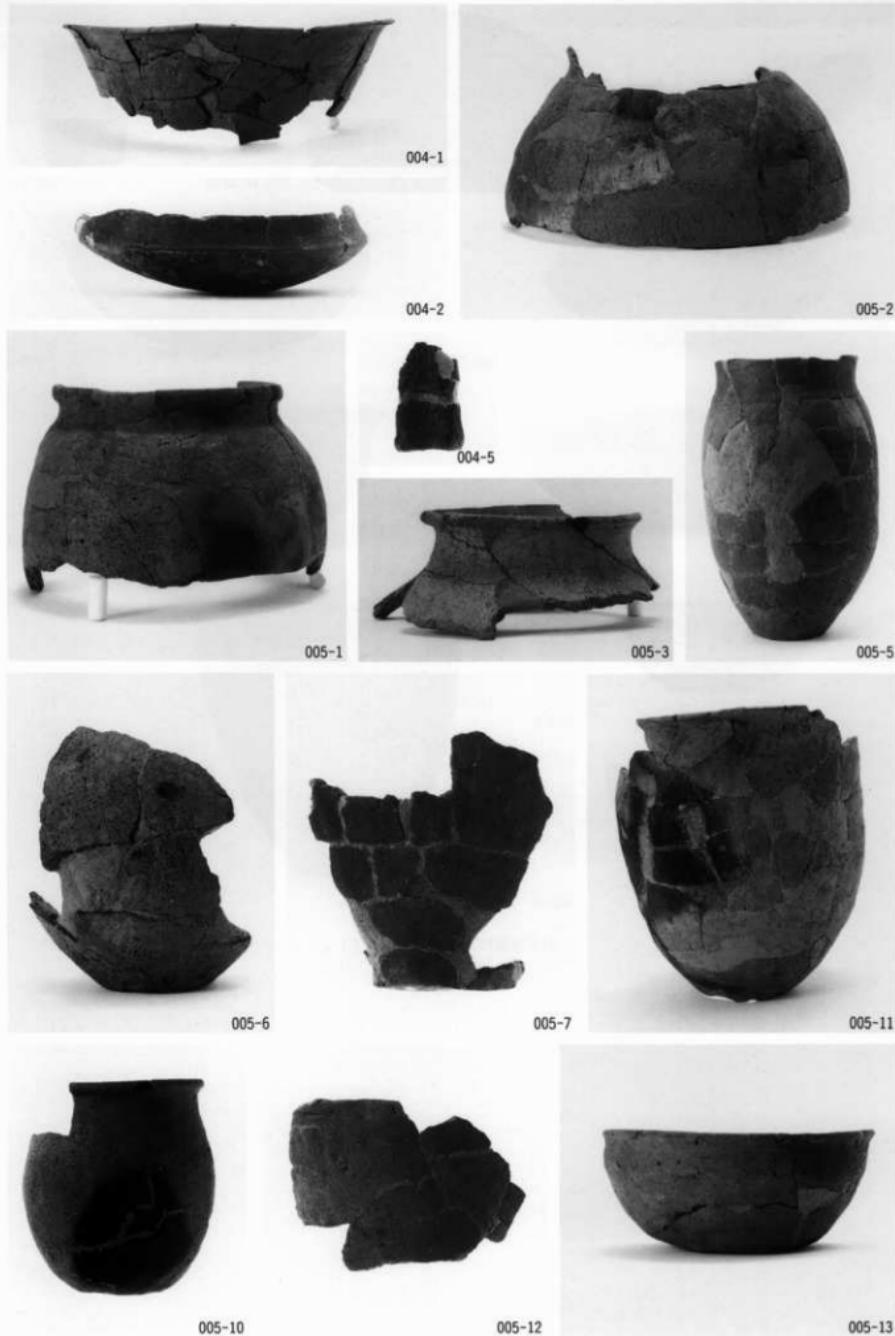
004号住居跡全景（南から）



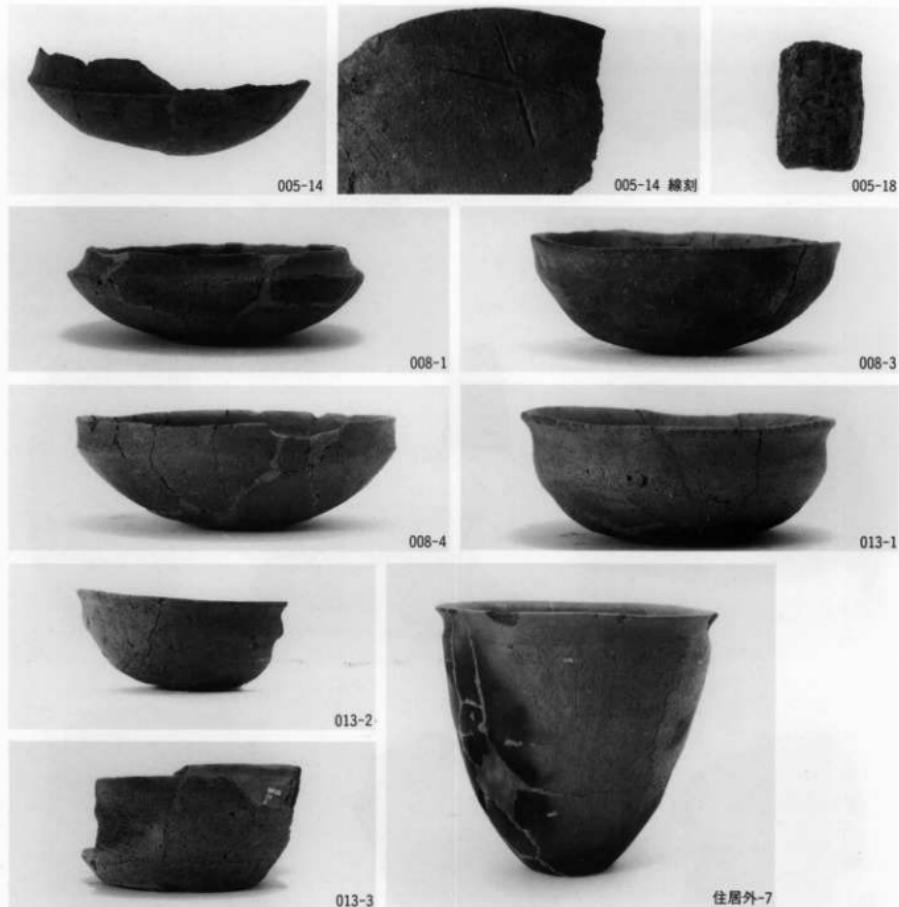
005号住居跡全景（北東から）



008号住居跡全景（南西から）



洞谷台遺跡古墳時代遺物（1）



洞谷台遺跡古墳時代遺物（2）



調査区全景（北から）



1区全景（北から）



1区全景（南から）



1区全景（南東から）



1区 1号地下式坑（東から）



1区 1号溝状遺構（南東から）



2区全景（南から）



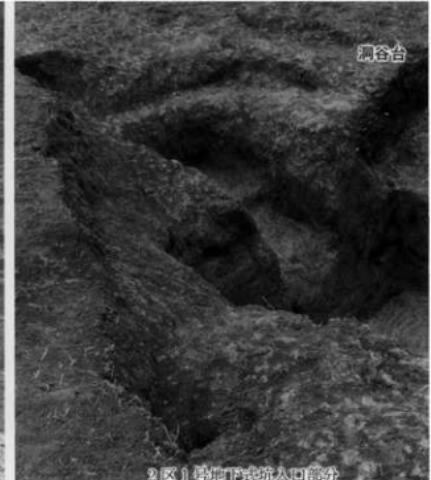
2区全景（北から）



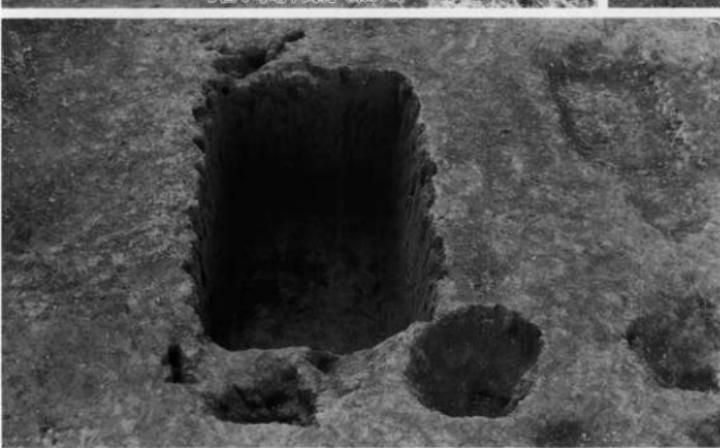
2区全景（南東から）



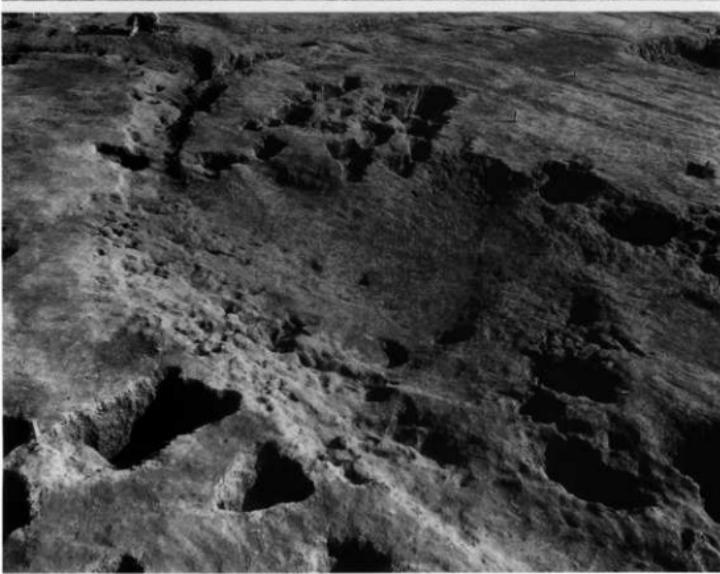
2区1号地下式坑(西から)



2区1号地下式坑入口部分



2区2号地下式坑(東から)



2区4・5号掘立柱建物跡、  
2区1号竪穴状遺構(北西から)



3区全景（北西から）



3区土壠内全景  
(北西から)



3区1・2号土壠  
(西から)



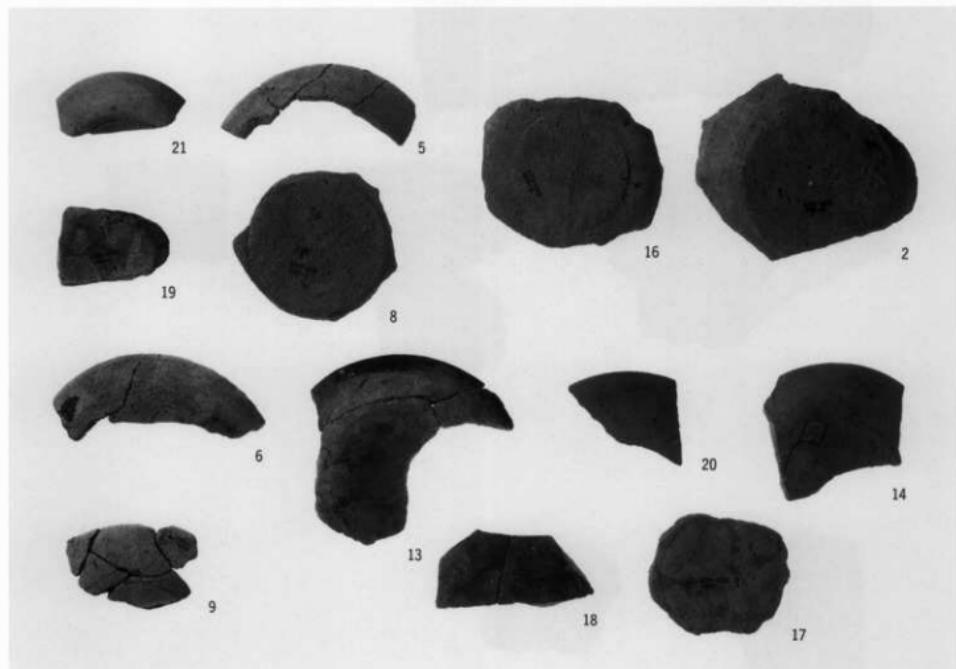
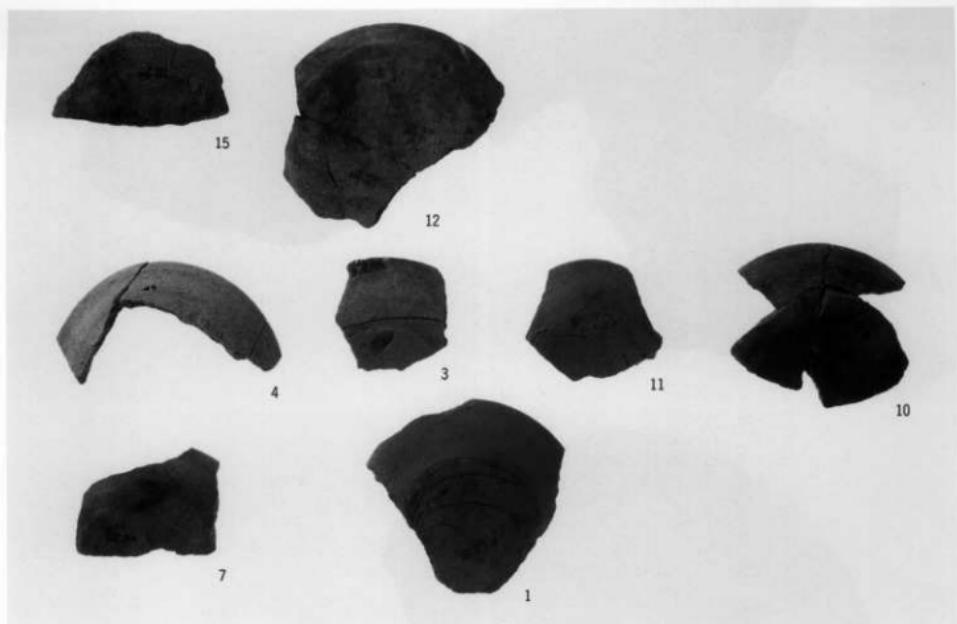
3区南部全景（西から）



2区中央部全景（西から）



3区北部全景（北西から）



中近世遺構出土遺物（1）



22



23



24



23



25



26



28



27



30



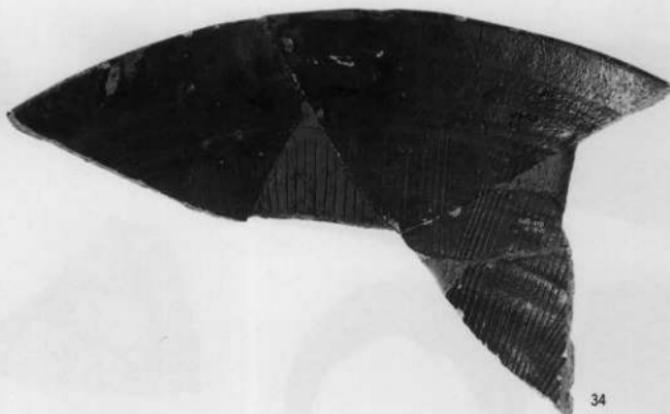
31



32



29



34



35



36



38



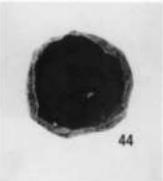
39



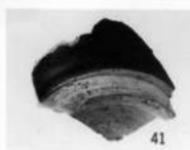
40



42



44



41



43

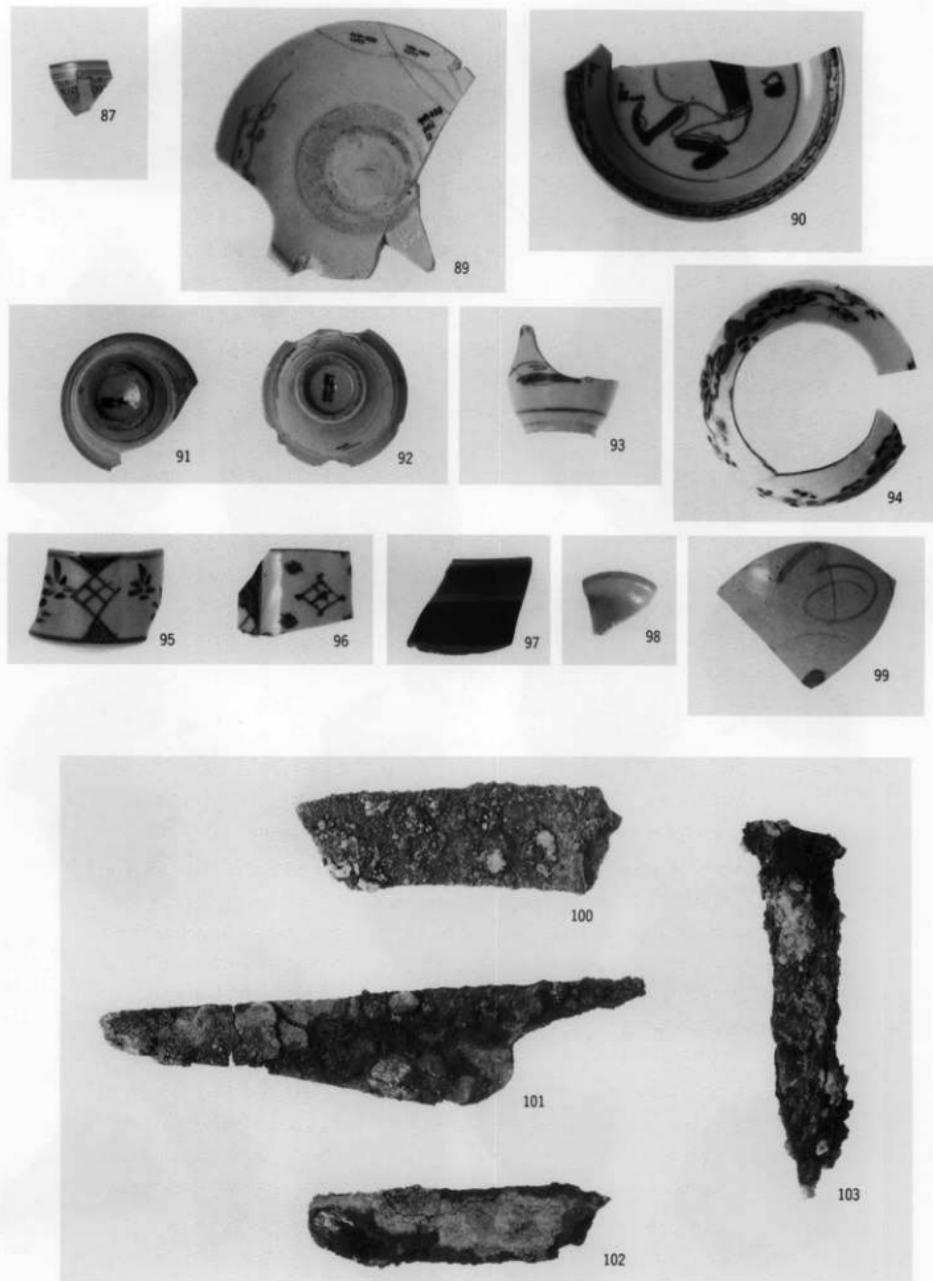
中近世遺構出土遺物（3）



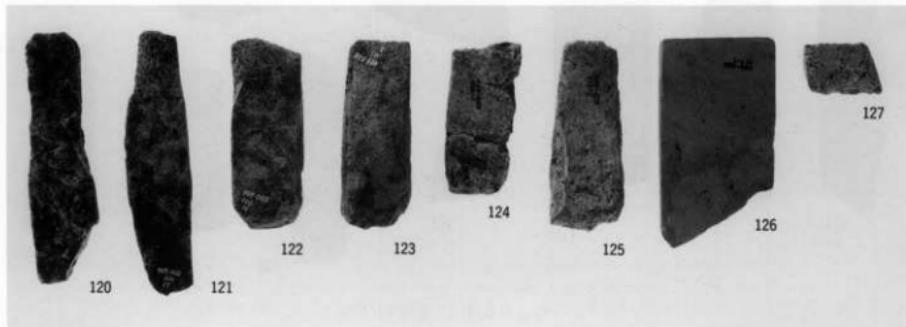
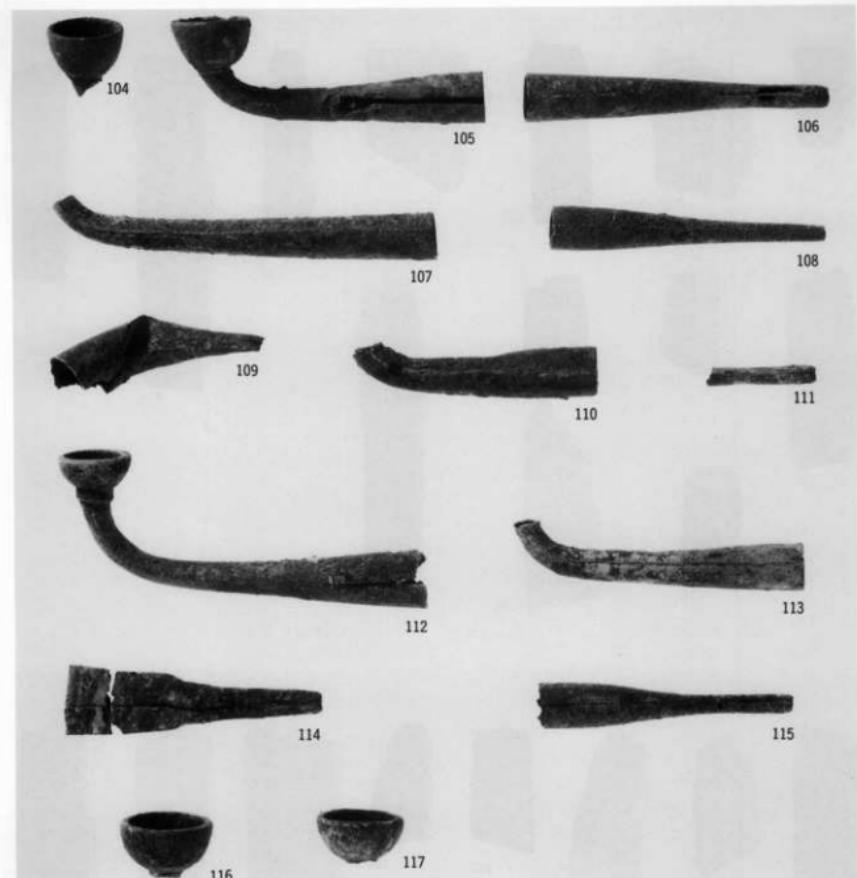
中近世遺構出土遺物（4）



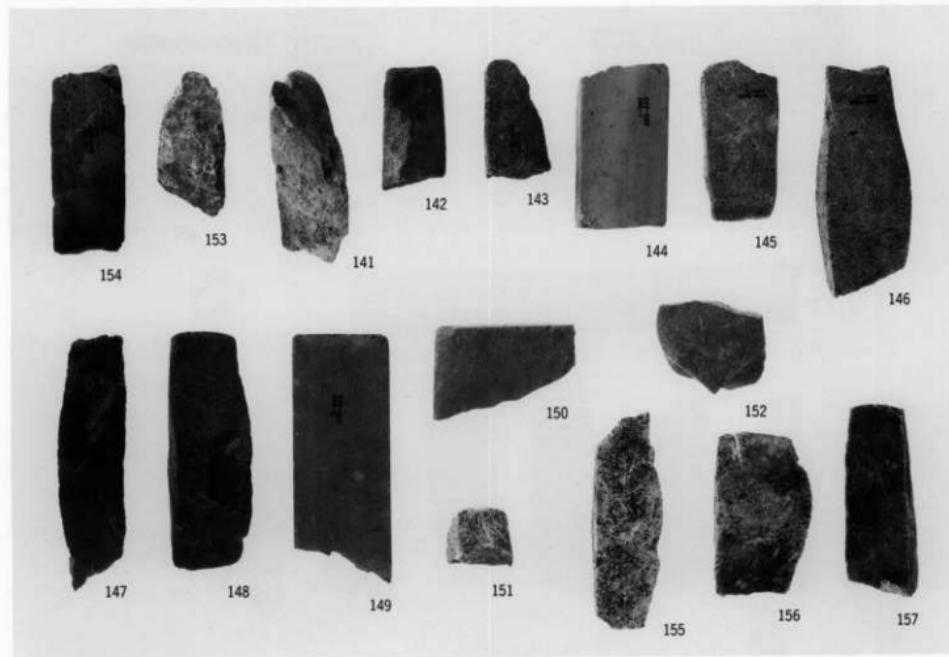
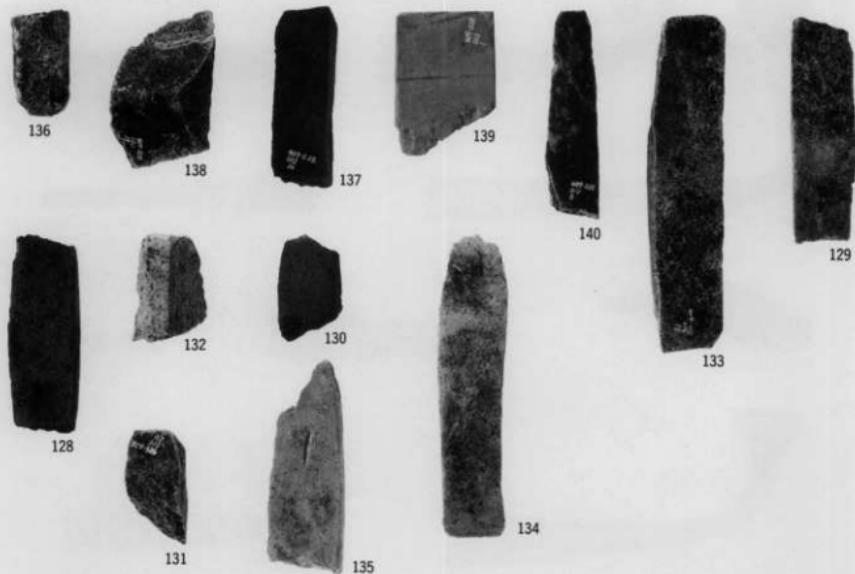
中近世遺構出土遺物（5）



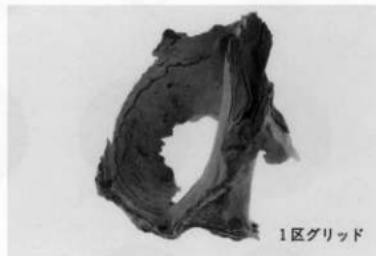
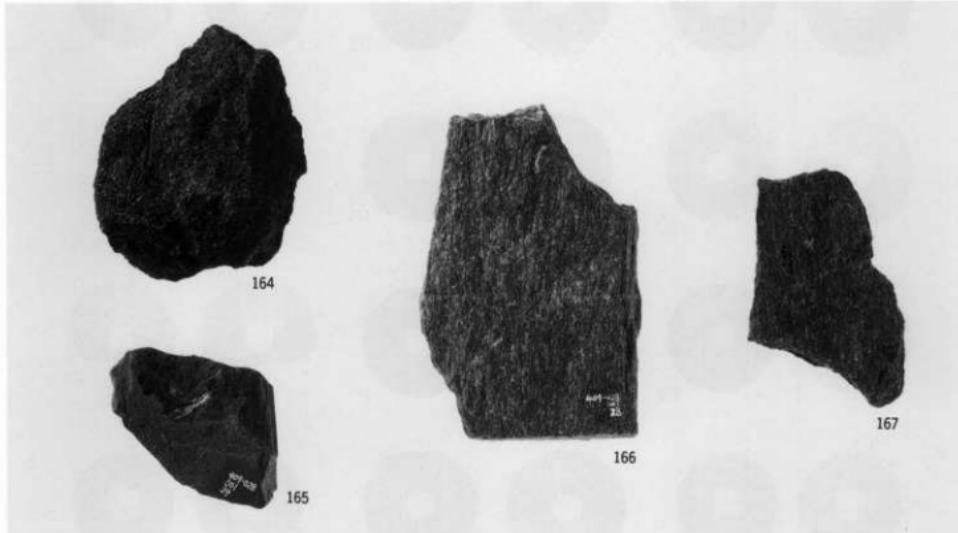
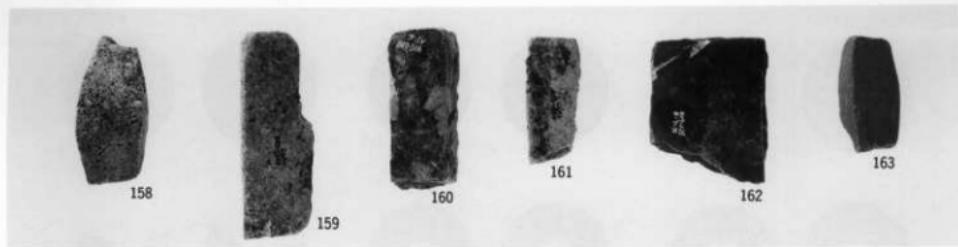
中近世遺構出土遺物（6）

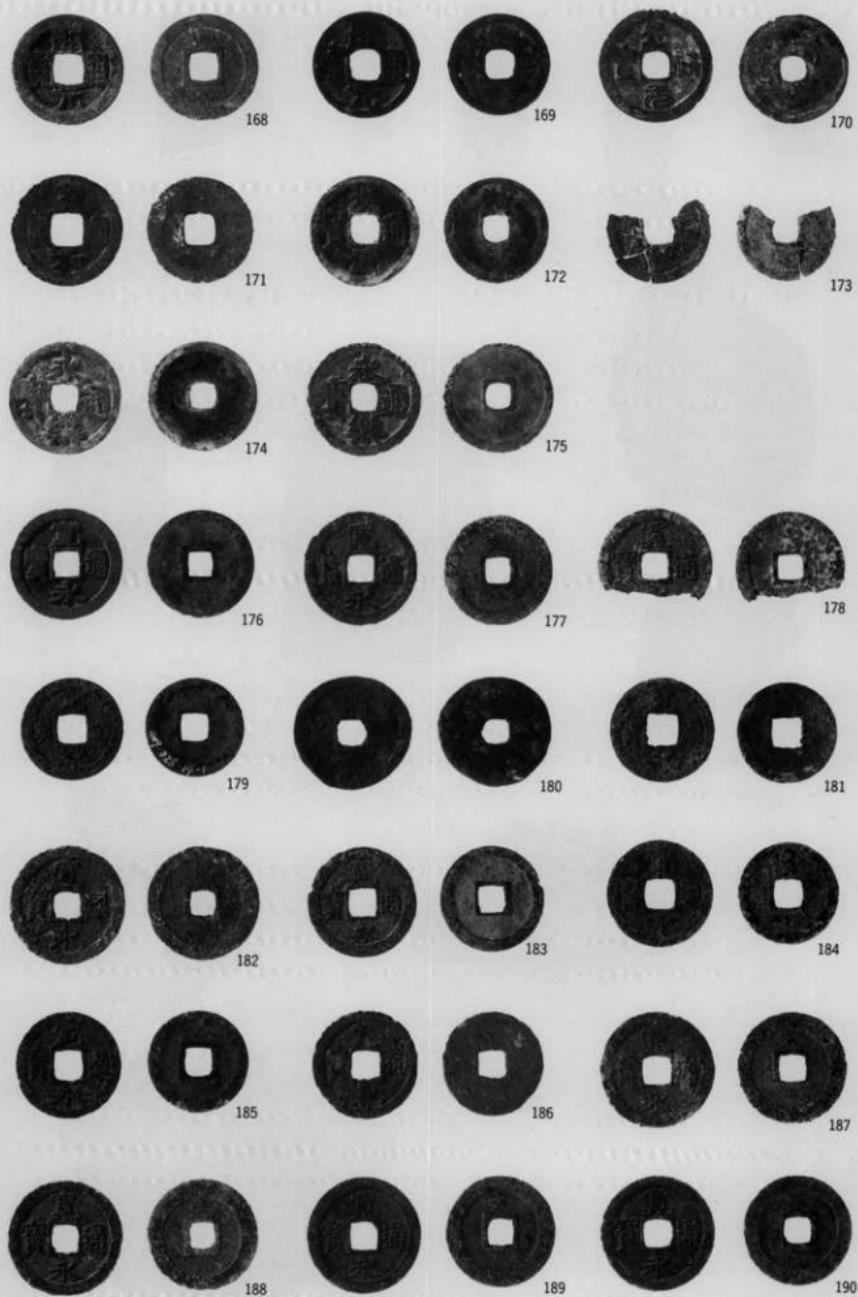


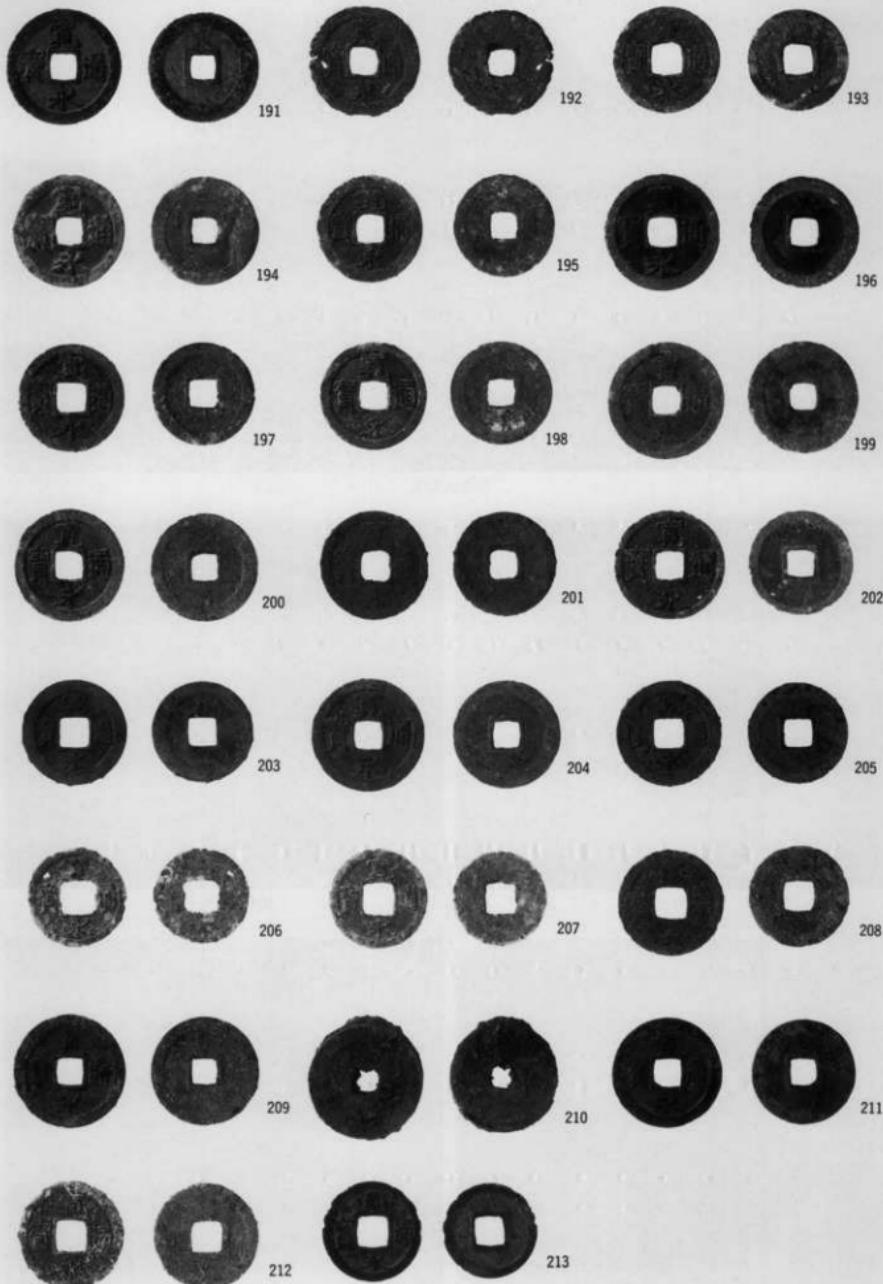
中近世遺構出土遺物（7）



中近世遺構出土遺物 (8)





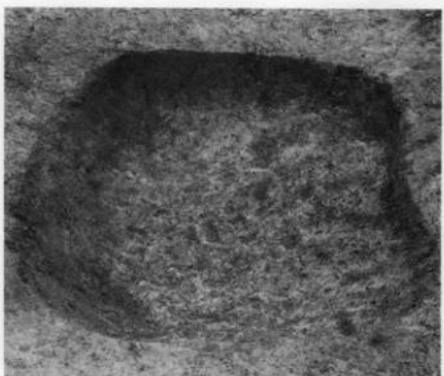




調査区近景



001号土坑



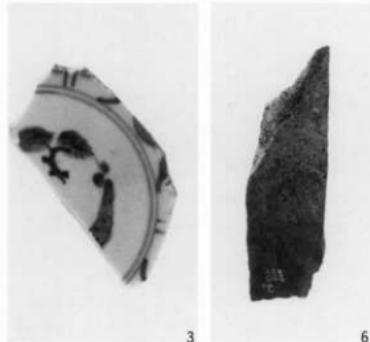
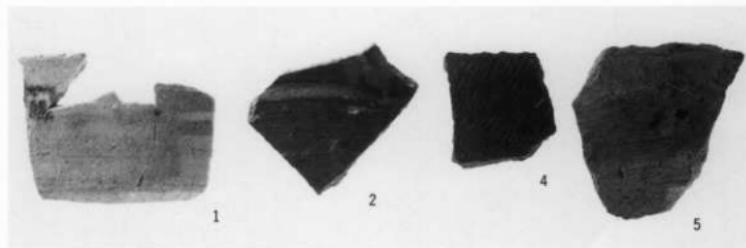
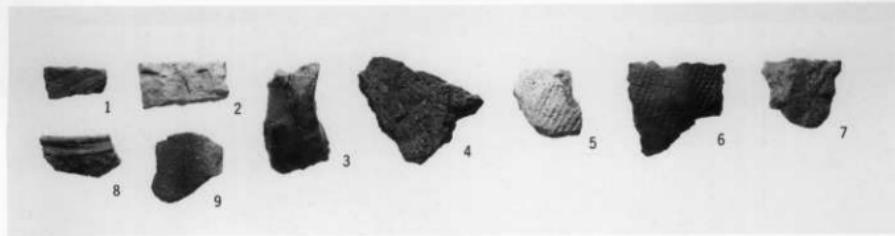
001号土坑土層



002号土坑



002号土坑土層



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどうなりたまつおせん
署名	主要地方道成田松尾線IX
副書名	一芝山町大台西藤ヶ作遺跡・深田台遺跡・洞谷台遺跡・大堀切遺跡-
卷次	IX
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第372集
編著者名	香取正彦、安井健一
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811
発行年月日	西暦1999年3月31日

所 収 遺 跡	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調 査 期 間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大台西藤ヶ作	千葉県山武郡芝山町高 田字塙田394ほか	409	022	35度	140度	19870801～	4,000	道路建設
				42分	24分	19870831		
				10秒	35秒			
深田台	千葉県山武郡芝山町朝 倉字入谷277-1ほか	409	031	35度	140度	19960523～	300	
				43分	24分	19960614		
				05秒	05秒			
洞谷台	千葉県山武郡芝山町朝 倉字洞谷台23-1ほか	409	028	35度	140度	19920803～	4,200	
				43分	24分	19921030		
				40秒	20秒			
大堀切	千葉県山武郡芝山町岩 山字出崎1,646-5ほか	409	016	35度	140度	19911002～	1,200	
				43分	24分	19911030		
				50秒	20秒			

所 収 遺 跡 名	種 别	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
大台西藤ヶ作	包蔵地			土器細片	
深田台	集落跡	縄文 弥生 奈良・平安	堅穴住居跡 4軒	縄文土器（早、前、中、後） 弥生土器（後） 土師器、須恵器	墨書き土器出土「中」「井」「寺」
洞谷台	集落跡	縄文 古墳 中近世	堅穴住居跡 4軒 掘立柱建物跡 20棟 堅穴状遺構 2基 地下式坑 3基 壠列跡 5列 土器 4か所 溝状遺構 5条 土坑 110基以上	縄文土器（早・前・後） 搔器、磨石、磨製石斧 土築器（古墳後期） カワラケ、土鍋、熔炉、漚戸・美濃陶器、肥前陶磁器、 鉄器、キセル、砥石、古鏡	民家的な掘立柱建 物跡を伴う屋敷地 を3か所検出した。
大堀切	包蔵地	縄文 中近世	土坑 1基 炭窯跡 1基	縄文土器（早、中、後） 剥片 漚戸・美濃陶器、肥前磁器、 土鍋、火鉢、砥石、古鏡	

千葉県文化財センター調査報告第372集

**主要地方道成田松尾線IX**

—芝山町大台西藤ヶ作遺跡・深田台遺跡・洞谷台遺跡・大堀切遺跡—

---

平成11年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部  
千葉市中央区市場町1番1号

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社  
千葉市中央区都町2丁目5番5号

---